

北魏方山永固陵の研究

—— 東亞考古學會 1939 年収集品を中心として ——

岡村 秀典・向井 佑介 編

方山永固陵は山西省大同市の北およそ 20 km に所在する北魏の陵墓である (圖 1)。方山の山頂は平坦な玄武岩の溶岩臺地で、その特異な地形によって北魏代に方山と呼ばれていた。いまは山の東北にある西寺兒村にちなんで西寺兒梁山または寺兒山と呼ばれる。標高はおよそ 1450 m、臺地の東・南・西は急斜面をなし、河床との比高差は 250 m ほどである。北には尾根づたいに走る長城がみえ、南には御河の下流にひろがる大同市街が望まれる。北魏の孝文帝はこの山上に文明太皇太后とみずからの壽陵および思遠佛寺や清廟を建造した。この方山永固陵が、遊牧民の拓跋鮮卑がはじめて長城内に造營し、そして以後のモデルになった、中國式の巨大陵墓である。

わたしたちは水野清一・長廣敏雄ら東方文化研究所 (いまの京都大學人文科學研究所) が 1938 年から 1944 年にかけて雲岡石窟とその周邊で収集した遺物を整理し、昨年その報告書を公刊した [岡村編 2006]。そのなかで方山永固陵の瓦當・塑像・石彫は、實年代をめぐって論争のつづいている雲岡石窟の編年研究に大きく寄與するだけでなく、平城時代の北魏文化史を再構築する重要な意義をもっていることを指摘した。それをふまえて本研究は、東亞考古學會が方山で収集した文物を報告し、方山永固陵をめぐる研究の現状と展望を示そうとするものである。

東京大學の原田淑人ら東亞考古學會は、1939 年に北魏平城遺址の調査をおこない、あわせて方山永固陵を踏査した。その正式報告は公刊されていないが、外務省に提出されたガリ版刷りの調査概要がアジア歴史資料センターで公開されている [原田 1939]。そのとき収集された瓦當・塑像・石彫などは東京大學文學部考古學研究室に寄贈され、一部は同研究室の資料集『考古圖編』 [東京大學 1952・1960] や調査に参加した駒井和愛の著作 [1952・1959] に紹介されているものの、正式報告がないため、この調査について知る人も少なかった。しかし、塑像や石彫は東方文化研究所の収集品よりも豊富で、考古學はもとより佛教美術史の研究にも裨益するところが大きい。そこで岡村秀典は「北魏時代の平城と雲岡の

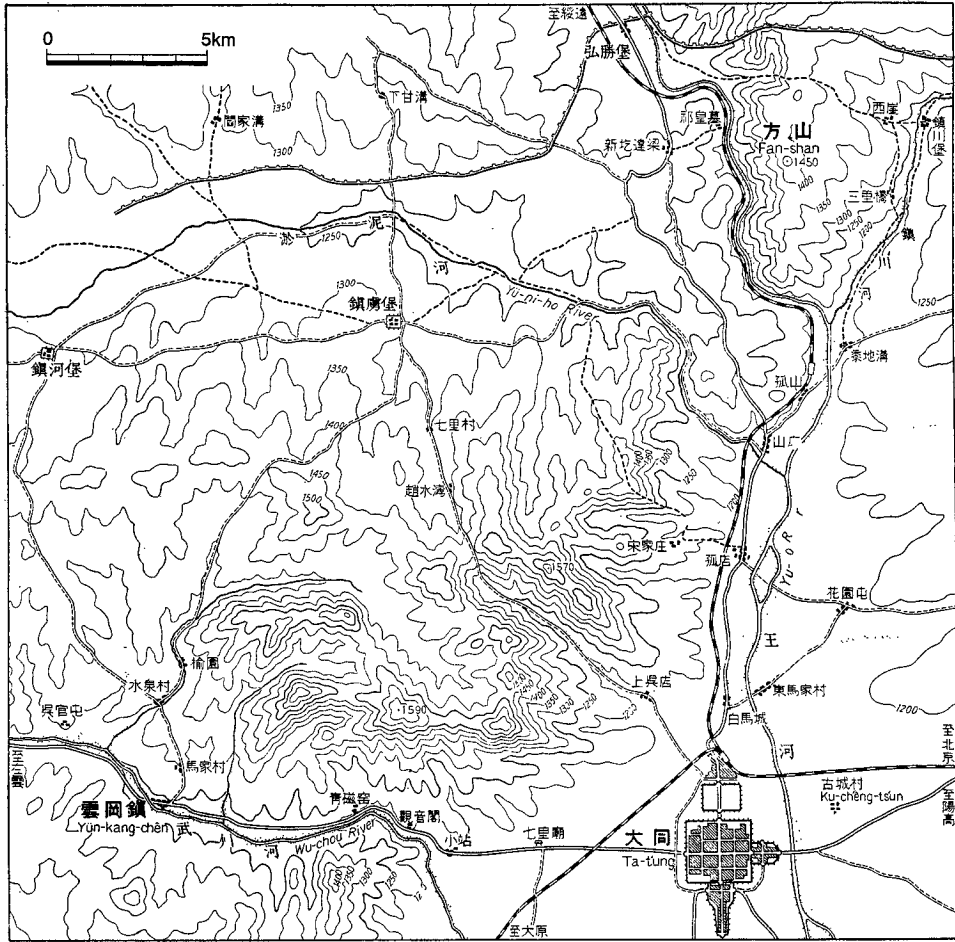


圖1 大同市方山的位置〔水野・長廣 1956：圖1〕

歴史考古學的研究」を課題とする日本學術振興會科學研究費補助金（基盤研究B）をえて、東京大學に保管する方山出土資料の考古學と美術史學による共同調査を実施した。調査の參加者と本論の執筆分擔はつぎのとおりである。

- 今井 晃樹（奈良文化財研究所）……………第2章第1節
- 大原 嘉豐（京都國立博物館）……………第2章第2・第3節
- 岡村 秀典（京都大學人文科學研究所）…序・第1章・第3章・第6章・展望
- 謝 振發（京都大學研修員）……………第2章第2・第3節
- 向井 佑介（京都大學人文科學研究所）…第4章・第5章

今井は科研費の研究分擔者であり、ほかの4名は『雲岡石窟』遺物篇の擔當者であった。まず2003年1月29日の岡村と向井による豫備調査をふまえ、2005年7月22・23日と

2006年10月4～6日に今井・岡村・向井が方山出土品の實測・拓本・寫眞撮影をし、2006年3月6日に大原・岡村・謝が塑像と石彫の美術史的検討をおこなった。第2章の實測圖は今井・岡村・向井が作成し、今井・向井が製圖した。寫眞は岡村が撮影した。

調査と本研究の發表においては、東京大學大学院人文社會系研究科の大貫靜夫教授よりご高配をたまり、同研究科大學院生の中村亞希子さんには事前の整理をふくめた多大なご盡力をいただいた。兩氏のご協力にたいして厚くお禮申しあげたい。

第1章 既往の考古學調査

フリーア美術館による調査 方山永固陵の考古學調査をはじめて實施したのはフリーア美術館のBishopとWenleyらである。もともと同館のBishopが1917年と1925年の2度にわたって大同を訪れ、1925年春到北京の國立歴史博物館との共同發掘を計劃したが、Bishopの病氣そのほかの事情から順延され、同年10月にWenleyらが測量調査をおこない、戦後になって詳しい文獻考證を加えた報告書が公刊された〔Wenley 1947〕。Bishopの報告 *Archaeological Research in China 1923-1934* は未發表だったが、近年にいたってフリーア美術館からタイプ原稿のマイクロフィッシュが公表された〔Hennessey 1999〕。その第14章 (pp. 287-313) が方山の調査報告である。ちなみにBishopは1924年に國立歴史博物館の裘善元と共同で河南省信陽市に所在する後漢代の甄室墓を發掘し〔Bishop 1925/裘 1926〕、それが中國と外國との最初の共同調査で、永固陵の調査はその第2回目にあたる。しかし、國立歴史博物館から永固陵の調査報告が發表されることはなかった。アメリカ留學から歸國した清華大學の李濟がBishopの援助によって山西省の各地を踏査したのが1925年、それをうけて夏縣西陰村遺址を發掘したのが1926年、同じころ日本では東亞考古學會の濱田耕作と原田淑人が北京大學の馬衡らと東方考古學協會の設置に向けた交渉を進めていた〔吉開 2006〕。方山永固陵の共同調査は、ちょうど中國で考古學研究がはじまり、國際協力をうたう列強が鎬を削る節目のときにあたっていた。

Wenleyらは詳細な平板測量によって北魏代の陵園遺構が分布する方山の地圖を作成した(圖2)。『水經注』の檢證がその目的であった。標高は墳丘東側の平坦地をかりに0-footの基準點(圖2のDatum)とし、等高線はおおむね5 feet 間隔だが、微地形をあらわすために3-footの補助線を加え、急斜面は10 feet 間隔にしている。測量から80年あまり経たいまなおこれにかわる地圖は知られていないし、その報告書も稀覯本で、水野清一・長廣敏雄(1956)と宿白(1977)をのぞけば、これまでほとんど引用されることがないから、その成果の一部を抄譯しておこう。なお、長さの單位はメートル法に改めている。

文明太后馮氏墓の墳丘(圖2のA)は臺地のほぼ中央、南崖から450 m ほど北にある。

墳丘は半球形で、高さ 22 m、直徑はおよそ 90 m に復元され、東西 122 m×南北 106 m、高さ 1 m の基臺上に築かれている。盛土の崩壊などを考えると、その規模は『魏書』文成文明皇后馮氏傳の「今以山陵萬世所仰，復廣爲六十步」と矛盾しない。

墳丘から 180 m 南に東西 46 m×南北 90 m、高さ 1.5 m ほどの高まりがあり、その南端に礎石のような四角い石がある。ここが永固堂(同 B)であり、左右の等高線 3-foot の平らな部分が『水經注』にいう「左右列柏」にあたる。周囲には土器・瓦・石彫などが散亂しており、かつてここに建物があったことをうかがわせる。その南は一段低くなって南崖まで 270 m ほどなだらかに傾斜している。『水經注』の「迷禽闔日」という情景がかってここにみられたのだろうが、いまは瓦や石彫の斷片しか残っていない。思遠靈圖の遺構は不明である。

南崖の西に圓形の高まり(同 C)があり、『水經注』の「南門表二石闕」の片方かもしれない。東端には石闕のもういっぽうがある。

南崖は高さ 30 m ほどで、自然石が露出している。そこに『水經注』にいう「御道」がジグザグに走り、崖下の緩斜面を 90 m ほど(同 E)まっすぐいったところに小さな長方形の基臺とそのすぐ南に一辺 60 m ほどの正方形の基臺がある(同 D)。正方形の基臺は石積みの壁をもち、南邊に東からのぼるスロープがある。ここから 50 m ほど南にも小さな方形の土臺がある。

地圖から明らかなように、馮氏墓の墳丘(A)、永固堂(B)、南門の石闕(C)、御道(E)、崖下の 3 つの基臺(D)がほぼ一直線に並んでいる。その軸線は磁北から少し東に傾き、眞北に合わせているようだが、確かめていない。『水經注』が臺地上から南をみて「下望靈泉宮池，皎若圓鏡矣」と記しているのは、崖下の 3 つの基臺(D)をいうのであろう。その西側には谷状の窪地があり、『水經注』に「枝津東南注(靈泉)池」という靈泉池に比定するならば、3 基臺のうち南端にある方形の土臺が『水經注』に「池渚舊名白楊泉。泉上有白楊樹，因以名焉」という小島にあたるのかもしれない。

Bishop が計劃した文明太后馮氏墓の發掘は地元民の反對によって中止された。しかし、Wenley らの測量圖はその後の調査と研究の出発点になった。水野清一・長廣敏雄ら東方文化研究所による方山永固陵の調査は 1939 年と 1942 年の 2 回實施されたが、このとき水野は Wenley らの調査について多くの情報をえており〔水野 1939 a〕、北京の午門にあった國立歴史博物館でその測量圖をみていた可能性が高い。水野・長廣の報告〔1956〕に掲載された地形圖および早稲田大學文學部の駒井(和愛)文庫 1258 に收藏する東亞考古學會の測量圖は、いずれも Wenley らの作成した圖をもとにしているからである。また、Wenley が『水經注』の記載を参考に陵園の遺構を細かく考證したことも特筆される。ただし、踏査のときに遺物にも注意を拂っていたにもかかわらず、報告でそれを分析することがな

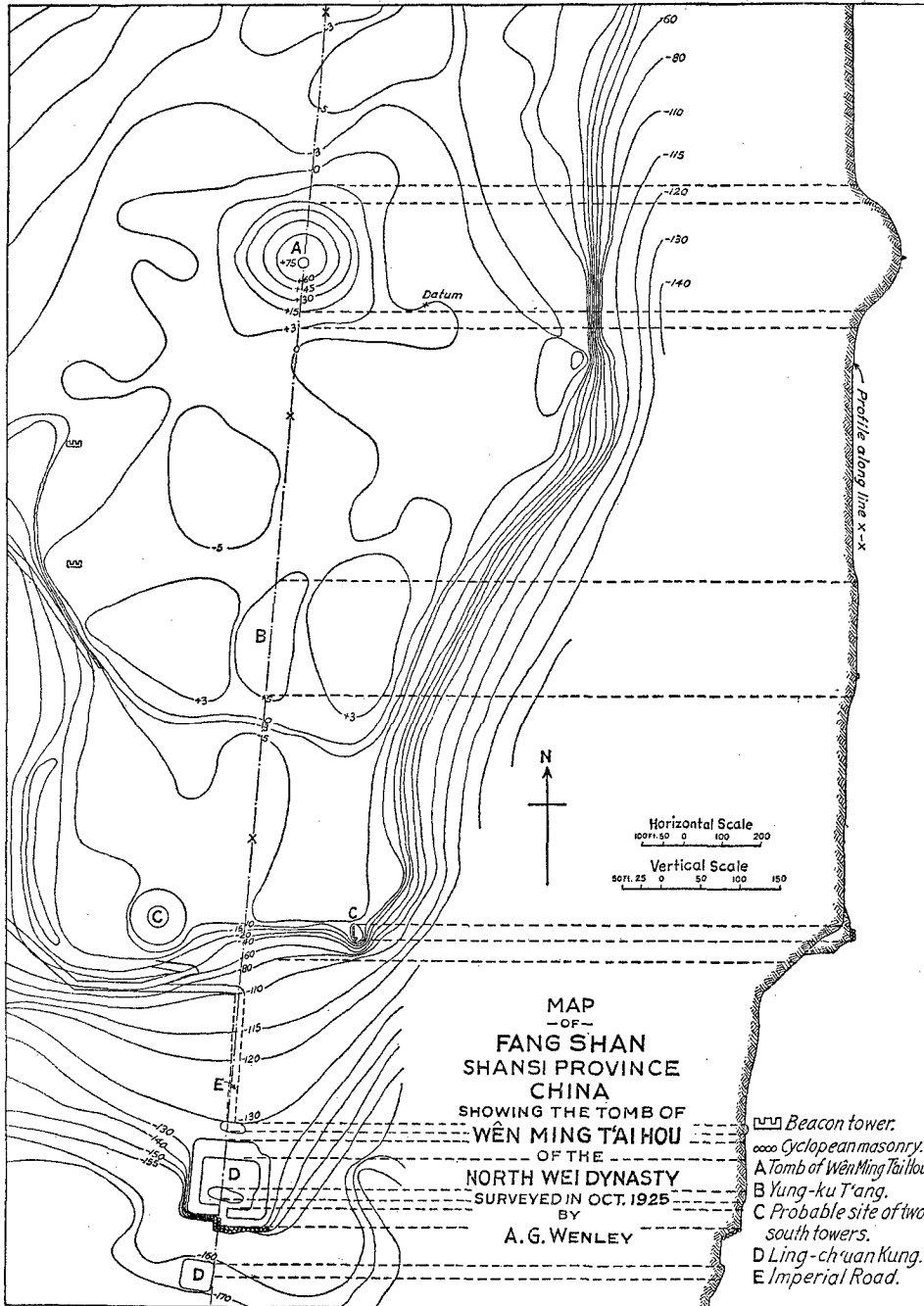


圖2 方山永固陵の地形〔Wenley 1947 : fig. 3〕

かったのは惜まれる。近年フリアー美術館で公表されたマイクロフィッシュの寫眞集 *Bishop Book III* [Hennessey 1999: Mf. no. 7] には、方山収集の「萬歲富貴」瓦當や蓮華化生紋瓦當、龍頭をあらわした石彫片などが収録されている。方山ではないが、平城遺址で發掘した石佛片も重要である。また、C 地點（白佛臺遺址）の石碑龜趺について、報告にまったくふれていないのも不思議である。このときは土に埋没していたのであろうか。

第3章に論じるように、『水經注』にみえる文明太后馮氏墓の墳丘と孝文帝の陵墓として造營された萬年堂、および南崖につくられた御道の比定をめぐる異論がほとんどない。しかし、水野・長廣〔1956〕は Wenley が C 地點とした臺地南端を白佛臺遺址と呼んで永固堂に比定し、崖下の D 地點を草堂山遺址と呼んで思遠靈圖に比定した。白佛臺や草堂山という名の由來が明らかでないが、遺構の比定に異論のある現状では、歴史的な名稱で呼ぶと混亂するおそれがあり、ここでは水野・長廣〔1956〕にならって白佛臺遺址や草堂山遺址と呼ぶことにする。

日本人による調査 Wenley らの調査の後、東京大學の關野貞は 1931 年に方山永固陵を踏査した。このとき採集した「萬歲富貴」瓦當・蓮華紋瓦當〔關野 1938: 116-117 頁〕・蓮華紋垂木先瓦などは東方文化學院（東京研究所）に收藏されていたという〔水野 1939〕。

1937 年に日中戦争がはじまり、まもなく大同は日本軍の支配下にはいる。翌 1938 年に水野清一ら東方文化研究所は雲岡石窟の調査を開始し、東京大學の原田淑人は北魏平城遺址の發掘調査を外務省に申請した〔吉村 1999〕。現地の治安状況などから外務省が助成を認可したのは翌年にずれこみ、1939 年 6 月 15 日から 7 月 2 日まで大同市平城遺址を中心とする調査がおこなわれた〔小林 1939 a・1939 b〕。方山永固陵の踏査は 6 月 26 日と 7 月 2 日にそれぞれ大同市から日歸りで實施された。京都大學から參加した澄田正一の記録〔1975〕によると、兩日とも遺構の觀察と遺物採集が中心であったが、7 月 2 日には南斜面の遺構測量を實施したという。南斜面とは白佛臺遺址を指すのであろうか。原田淑人の記録〔1939〕では、白佛臺遺址の一帶に北魏代の文字瓦當・石彫・塑像片などが散在していたという。調査に同行した駒井和愛は、白佛臺遺址で「萬歲富貴」瓦當・蓮華紋瓦當・垂木先瓦・塑像片・佛像の石彫片をみだし、草堂山遺址では北魏式の礎石が掘りだされているのを確認した〔駒井 1952: 82-85 頁、圖版 22-24〕。これをもとに原田は『水經注』にみえる永固堂・思遠靈圖を白佛臺遺址に、靈泉宮を崖下の草堂山遺址に比定し、駒井もその説にしたがっている。

水野清一・長廣敏雄ら東方文化研究所による 1939 年の踏査については、長廣の日記〔1988: 58-59 頁〕に詳しい。それによると、東亞考古學會の調査後、9 月 1 日に大同市から晉北政廳のトラックで日歸りの調査を實施した。水野らは白佛臺遺址と草堂山遺址を測量し、長廣・米田美代治・有光教一の 3 人は大墓（馮氏墓）と小墓（萬年堂）を略測した。

大墓と小墓の距離は 674 m, 大墓の高さ 22 m, 大墓と白佛臺遺址との距離は 590 m, このとき 2 点の石彫片を採集し, ひとは縦型の唐草波状紋, もうひとは六朝風の樹木の浮彫りで, 長廣は「断片ながら收穫だった」と記している。第 6 章にみるように, この石彫は雲岡石窟との相対編年や方山永固陵における南朝の影響を考える重要な資料である〔岡村編 2006: 154-155 頁〕。1939 年 10 月 16 日に水野・長廣らは軍の飛行機で雲岡石窟と方山永固陵を空中から撮影した (長廣 1988: 80-83 頁)。また, 1942 年 7 月 17 日には南の八里橋から方山に登り, 河床から 30~40 m のところで仰韶文化の土器や石器などを採集している〔雲岡石窟調査班 1943〕。

水野・長廣の正式報告 (1956) では, 小墓は一辺約 60 m の四角い基臺に高さ約 13 m の圓墳があり, 『水經注』の萬年堂に比定した。大墓は高さ 22.50 m, 大墓と白佛臺遺址との距離は 569.50 m という。長廣の日記と數値が少しちがっているのは Wenley の報告によったからか。白佛臺遺址の西南隅には北魏式の礎石 (圖 3-1) があり, そこから東と北に石積みの壁がのびて, 永固堂の遺構と考えられた。石碑の龜趺 (圖 3-3) については, 實測圖と寫眞が報告されている。そのときの寫眞をみると, 龜趺の周圍を少し掘ったよう

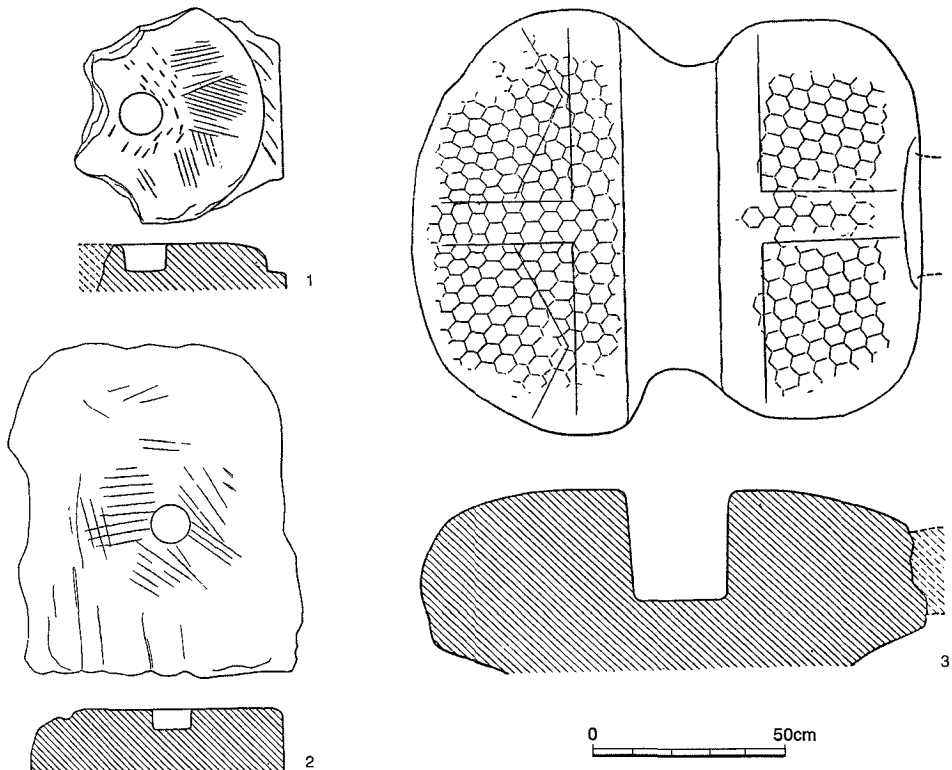


圖 3 礎石と龜趺 (水野・長廣 1956: 圖 5~圖 7) 1・3 白佛臺遺址, 2 草堂山遺址

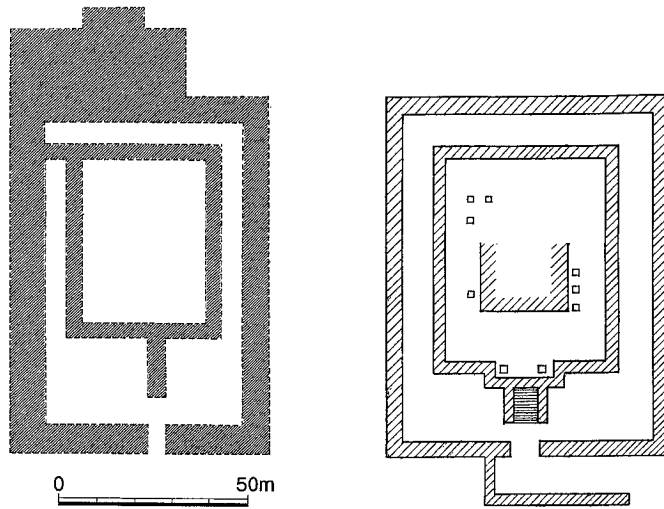


圖4 草堂山遺址〔水野・長廣 1956：圖8，宿 1977：圖1〕

だ。この白佛臺遺址には「傳祚無窮」瓦當が多く、「萬歳富貴」瓦當や蓮華化生紋瓦當が採集されたほか、「青味のある緻密な砂岩に、山水その他の浮彫のみえる断片」があり、『水經注』の「隱起忠孝之容，題刻貞順之名」を連想させるという。この石彫は『雲岡石窟』遺物篇に報告した。ただし、當研究所には「方a」の注記をもつ白佛臺遺址採集の「萬歳富貴」瓦當・蓮華化生紋瓦當・石彫片は將來されているが、不思議なことに、多數發見されたという「傳祚無窮」瓦當はそのなかに1片もふくまれていない。

崖下の草堂山遺址について、水野・長廣の報告〔1956：圖8〕はその略測圖を載せ（圖4左）、方形の塔の周圍に回廊をめぐる塔院で、思遠佛圖に比定した。圖の北側に張りだした部分は、後方の建築基址であろう。その東や南にも平坦地があり、南の小さな方形の土臺は『水經注』の「南門表二石闕」に比定した。また、航空寫眞をみると（圖版1）、谷をはさんだ東の丘陵上にも同じような方形の基址が存在していたようである。そして、水野・長廣は草堂山遺址に靈泉宮をあてた Wenley 説を批判し、御河と鎮川河とが合流する方山南麓の黍地溝のあたりこそ靈泉（宮）池にふさわしいと論じた。

新中國の調査 新中國の成立後、北京大學の宿白は方山永固陵を踏査した。崖下の草堂山遺址は回廊のめぐる塔院、臺地南端の白佛臺遺址は長方形の建築遺構であり、礎石や石碑の龜趺が残存し、「傳祚無窮」・「萬歳富貴」瓦當や蓮華化生紋瓦當、黄色石灰岩の「文石」断片などが散布していたという。また、陵園の近くで石窟を發見し、『魏書』高祖紀に太和八年（484）秋七月に行幸したという「方山石窟寺」と推測している〔宿 1977〕。この石窟についてその後の情報はない。1976年に宿白ら北京大學の師生たちは崖下の草堂山遺址を略測し（圖4右）、外周はおおよそ東西 50 m×南北 85.5 m の長方形で、その基臺上に東西 30

m×南北 40 m の塔基と中央に 10 m 四方の中心塔柱があり、塔柱の周囲 9 か所に礎石が残存していたという〔宿 1997〕。示意図のため不正確なところがあるかもしれないが、水野・長廣の報告とあわせみることによって、そのおおよそをうかがうことができる。このとき中心塔柱の近くで収集された塑造の佛菩薩像は、北京大學サッカー考古藝術博物館に所蔵され、日本にも出品された〔出光美術館編 1995〕。宿白〔1982〕はその様式が雲岡石窟第 9・第 10 洞よりもやや先行し、大型の佛像は断面方形の粘土帯を貼りつけてつくった衣紋の形が石窟第 7・第 8 洞に近いことを指摘し、みずからの石窟編年を補強した。

1976 年春には大同市博物館など〔1978〕が馮氏墓の墓室を發掘した。甌積みの墓室は南向きで全長 17.60 m、墓道の兩側には 5.9 m の石積みがある。後室は胴張りのある方形で、東西 6.8 m×南北 6.4 m、四角錐形の天井は高さ 7.3 m、甬道の前後には石門があり、浮彫であらわされた籐座式柱頭に乗る鳳凰、蓮華の蕾を両手でかかえる童子像(圖 5)、虎頭形枕石などは年代の明らかな様式の指標として重要である〔長廣 1980/八木 1991〕。また、このころ小墓の萬年堂から盜掘された門框石が近年紹介された〔王・曹 2004〕。右手に刀をもつ武人と龍を淺い浮彫であらわしたもので、様式の指標として注目される。

つづいて 1981 年に大同市博物館が草堂山遺址を發掘し、2002-2003 年にその補足調査がおこなわれた。簡単な報道〔胡ほか 2004〕によると、外周は東西 57.5 m×南北 88.2 m の長方形で、その基臺上に東西 34.2 m×南北 45.8 m、高さ 2.5 m の塔基と中央に一邊 12 m ほどの中心塔柱があり、その東側に 2 か所、西側に 2 か所の礎石が残存し、7 間の正方形の回廊が復元できた。礎石間の距離は 3.03 ~ 3.2 m。後方には 7 間×2 間の佛殿があり、4 か所に礎石が残存していた。中心塔柱の周邊から菩薩や飛天などの塑像が多数出土し、塔基の周邊からは「萬歲富貴」・「忠賢永貴」瓦當や蓮華化生紋瓦當などの北魏瓦のほか、若干の遼瓦が出土したという。

近年では山西省考古研究所の張慶捷の踏査報告〔2003〕がある。新中國の地形圖を用いているのだろうが、永固堂は中軸線よりやや西にあり、Wenley の配置圖とちがっている(圖 6)。Google Earth の衛星寫眞をみると、永固堂の位置は中軸線より東にある Wenley の圖が正しいから、作圖のまちがいであろう。報文の要旨はつぎのとおりである。馮氏墓から永固堂までの距離は約 400 m、その規模はおおよそ東西 60 m×南北 55 m、甌の破片や黒・赤・白色など北魏の研磨瓦がいたるところに散布し、「傳祚無窮」・「萬歲富貴」瓦當、蓮華紋瓦當、蓮華化生紋瓦當、石彫片などもあった。南に石碑の龜趺がある。この永固堂の東北 10 m 足らずのところ(東西 30 m×南北 35 m ほどの遺構)があり、中央に方形の版築土臺があつて、周圍に北魏の瓦甌が散布している。『水經注』には該當する記述がないが、永固堂の寢室もしくはそれに附屬する建物であろう。永固堂の西 70 m にはまた別の建築遺構があり、東西 35 m×南北 40 m の長方形で、思遠靈圖にあたる。この西にも建築



圖5 文明太后馮氏墓の石門彫刻〔曾布川・岡田編
2000：圖版24〕

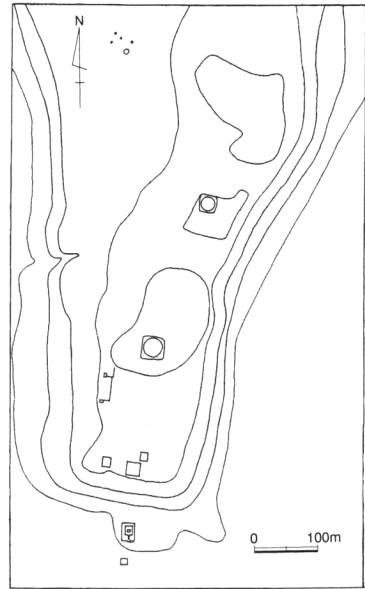


圖6 張慶捷による方山永固陵の配置
〔張2003：圖3〕

材料が散布し、『水經注』の齋堂に比定した。その北230 mの西崖近くに110 mの距離をおいて南北に相對する土闕があり、南の土闕は一邊10 m、高さ1.53 m、石積みの基臺に版築で土闕を築いている。これも『水經注』には記述がなく、Wenleyは後世の烽火臺とみなしたが、『魏書』高祖紀上にみえる鑿玄殿もしくは文石室の可能性があるとす。いっぽう南崖下の塔院は大同市博物館が発掘したとおりだが、その南90 mに方形の平臺があり、東西30 m×南北25 m、周圍に石積みし、『水經注』の靈泉宮に比定した。このように張慶捷は白佛臺遺址を3組の獨立した遺址に分け、西崖に近い一對の土闕を北魏の遺構と推定するなど、新しい見解を示した。

『魏書』や『水經注』に記録のある靈泉宮については、久しく所在が不明であったが、殷憲〔2007〕らは御河と萬泉河の合流點の東南にある青羊嶺村で北魏瓦の散布と靈泉池の遺迹とみられる窪地を発見した。その窪地は東西200 m×南北350 mほどで、『水經注』に「東西百步、南北二百步」という數値に近いという。

新中國の報告で注意しなければならないのは、發掘された草堂山遺址をのぞけば、遺址の測量値はWenleyと水野・長廣の報告にしたがい、採集したという遺物の種類は水野・長廣の報告をそのまま踏襲しているらしいことである。しかも、宿白ら北京大學が草堂山遺址で採集した塑像が日本で公開されたことをのぞけば、収集された遺物の圖が報告されることがなく、遺物にたいする關心はきわめて低かった。このため、ゆきづまっている雲岡石窟の美術様式論に一石を投じるべく、宿白が方山の塑像と雲岡石窟との關係性を力説

しても、日中の雙方で論議が盛りあがることはなかったのである。塑像や石彫をふくむ東亞考古學會の収集資料は、調査からすでに60年以上を経過しているとはいえ、學界に公表する意義はけっして小さくないだろう。

第2章 東亞考古學會の収集資料

東京大學に所蔵されている方山の遺物には、瓦・土器類、塑像、石彫があり、それぞれに墨書で「方山」「方山段」「方山下」の注記がある。「方山」は瓦類・塑像・石彫にあり、「方山段」と「方山下」は石彫1點をのぞいて瓦・土器類に限られる。原田淑人の調査概要〔1939〕、東京大學考古學研究室の資料集〔東京大學1952・1960〕や調査に参加した駒井和愛の著作〔1952・1959〕によって、「方山下」は崖下の草堂山遺址、「方山」は崖上の白佛臺遺址、「方山段」はその間の崖を指していると考えられる。

遺物には瓦・土器類、塑像、石彫の順に1から43まで一連の通し番號をつけた。『雲岡石窟』遺物篇に収録した京大人文研の方山出土遺物は48點あり、兩者を對比する略號として、東大の遺物番號にTを、京大のそれにはKを冠することにする。

1 瓦・土器類（圖版3～4、圖7～8）

白佛臺遺址 1～6は「萬歳富貴」瓦當。1・2は「萬」字の破片である。1は灰黄色（2.5 Y 6/2）を呈する。2は泥質で、灰色（N 6/0）。3は「歳」字の一部が残る。泥質で、灰色（5 Y 5/1）を呈する。4は「富」字の破片。胎土にやや大きめの砂粒が少量まじり、灰黄色（2.5 Y 7/2）を呈する。5は「貴」字と「歳」字の一部が残る。灰色（7.5 Y 5/1）を呈し、泥質。6は「萬」「貴」字が残存する。灰色（5 Y 5/1）を呈し、泥質。

7・8は複瓣蓮華紋瓦當。7は蓮瓣の形が不明瞭。瓦當裏面と側面を撫で調整する。胎土に少量の砂粒をふくみ、灰色（N 5/1）を呈する。8は半球状の中房に圓圈をめぐらせ、8葉の複瓣蓮華紋を配する。瓦當裏面は撫で調整するが、邊緣にそって弱い削りをほどこし、瓦當側面は撫で調整する。復元徑は12.4 cm。灰色（7.5 Y 5/1～6/1）を呈し、泥質。

9～11は複瓣蓮華化生紋瓦當。蓮瓣は3點とも複瓣で、中央に豐滿な化生童子の上半身をあらわす。化生童子は肘をまげて合掌するように、胸前で何かを保持する。丸く盛りあがった腹部の下方には、臍の凹みがみえる。10では带状の胸飾りの様子がわかり、10と11では肘にかかる天衣の一部もみてとれる。9は復元徑16 cm、10は復元徑18 cmほどで、10は9・11に比べてやや大きいが、これは前者の周縁が廣くつくられることに起因する。胎土はいずれも泥質、色調は9が灰色（10 Y 6/1～10 Y 7/1）、10は灰黄色（2.5 Y 6/2）、11はにぶい黄橙色（10 YR 7/2）を呈する。

12・13は文字瓦當。いずれも井桁状の格子によって瓦當面を分割し、上下左右に4文字を配する。12は字形不明。瓦當裏面に丸瓦接合のための刻み(カキヤブリ)がみられる。胎土に若干の砂粒をふくみ、暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する。13は「流」字の破片である。泥質で、灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。

14・15は廣端面に押壓波状紋をほどこす平瓦。14は凹面に縦撫でと横撫での痕を残す。凸面は横撫でを基調とし、廣端附近に斜位の撫でをほどこす。15は凹面に布目が残り、凸面は横撫で調整する。泥質で、焼成は堅緻。灰色(5Y5/1~5Y6/1)を呈する。

16・17は道具瓦。16は垂木先瓦である。中央に正方形の釘孔を設け、周圍に平面圓形の凸帯をつくり、8瓣の複瓣蓮華紋を飾る。側面は削り調整して花瓣の輪郭を整える。復元径14.6cm。泥質で焼成堅緻、灰色(N5/0)を呈する。17は鷗尾の鱗部分の破片。表面は等間隔に斜位の突帯を貼りつけて撫で調整する。裏面は平坦で、撫で調整する。泥質で焼成堅緻、灰色(5Y6/1)を呈する。

このほか赤色磨研の丸瓦と平瓦がある(圖21)。丸瓦は凸面、平瓦は凹面を撫で調整したのち縦に研磨し、赤色の顔料を塗布して焼成している。丸瓦凹面には布目が残り、平瓦凸面は横撫で調整する。泥質で、研磨をほどこした面は橙色(5YR6/6)を呈する。

草堂山遺址 24に「方山段」の注記があり、草堂山遺址の北にせまる崖面で採集されたもの。それ以外の18~30は「方山下」と注記する草堂山遺址の採集品である。

18~22は「萬歳富貴」文字瓦當である。18と19はいずれも「萬」字の破片であるが、それぞれ明らかに異なる範の製品である。前者がやや大型で、太くやわらかい字體であるのにたいし、後者は角ばった細い字體を用いている。18は白佛臺遺址の1・2と同範であろう。灰色(7.5Y5/1)を呈し、泥質。19は瓦當裏面を撫で調整し、丸瓦接合部には撫でつけ痕跡が残る。丸瓦部の凸面を縦に研磨している。灰色(10Y6/1)を呈する。20は「富」字の破片で、灰色(5Y5/1)を呈し、泥質。21は「歳」字と「富」字の一部が残り、復元径13.4cm。瓦當裏面を縦に撫で調整し、瓦當側面を撫で調整する。灰黄色(2.5Y6/2)を呈し、泥質。22は「歳」字の破片。瓦當裏面を撫で調整する。泥質で、灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。

23は「貴」字のようだが、白佛臺遺址の5とは字體が異なり、下の文字も「歳」とは異なっているから、別の文句を記した瓦當かもしれない。泥質で、灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。24は「賢」字の破片で、他の文字瓦當と異なり、その書體は楷書體ふうである。泥質で、焼成はやや軟質、灰色(10Y6/1)を呈する。25は複瓣蓮華紋瓦當である。中房に1+6の珠紋を配し、幅の廣い蓮瓣を飾る。復元径は14.4cm。胎土は砂粒が少量混じり、灰色(10Y6/1)を呈する。

26は押壓波状紋平瓦。凹面は横位の研磨、凸面は撫で調整する。泥質で、灰色(N5/0)

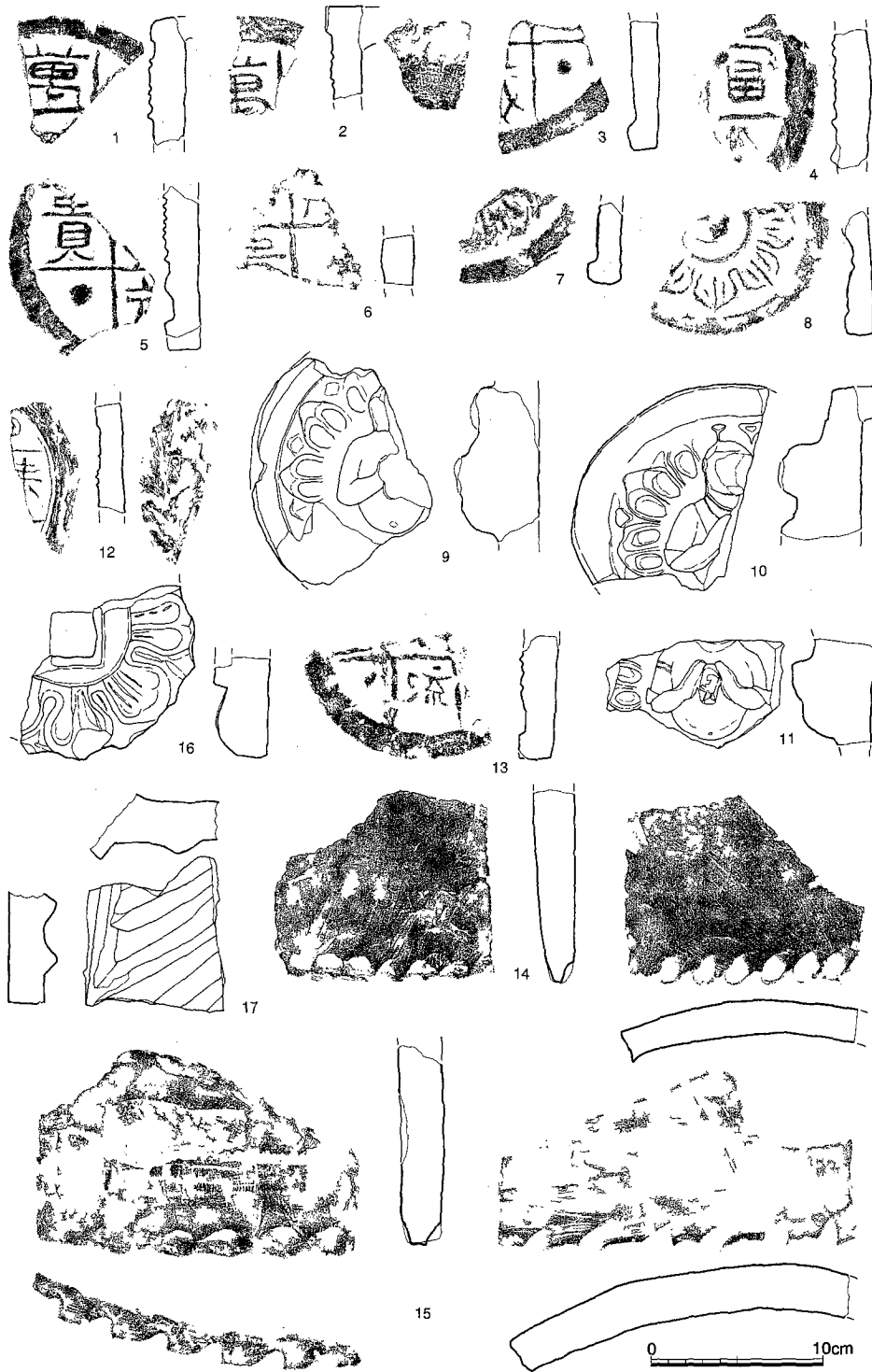


圖7 白佛臺遺址の瓦類 縮尺1/4

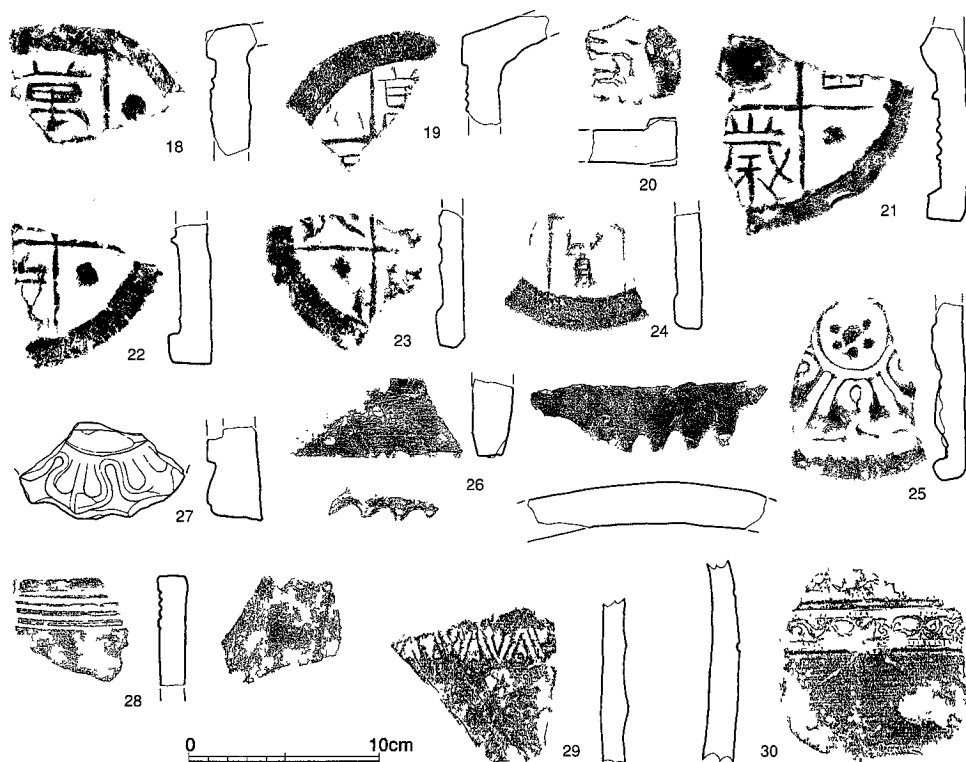


圖8 草堂山遺址の瓦・土器類 18-28:縮尺1/4, 29・30:縮尺1/2

を呈する。27は垂木先瓦で、白佛臺遺址の16と同巧だが、やや小ぶりである。泥質で、焼成は堅緻、灰色(N5/0)を呈する。28は平瓦の狭端部分。凸面の端部にそって5條の平行沈線をほどこす。凹面は布目を残し、端面と凸面は横撫で調整する。泥質で、にぶい黄褐色(10 YR 5/3)を呈する。

29・30は回轉印紋をもつ土器。29は内面に三角紋を飾る盆。外面はやや強い横位の撫で調整をほどこすため稜線がある。胎土は泥質、焼成は堅緻、灰色(7.5 Y 5/1)を呈する。30は外面に唐草紋を飾る。波狀唐草紋の上下に細かい珠紋を配した紋様帯を構成し、資料では同様の紋様帯が上下にふたつ重なる。それ以外の部分は撫で調整後に研磨をほどこす。内面は撫で調整する。泥質で焼成は堅緻、灰色(7.5 Y 5/1)を呈する。洛陽遷都の直前に出現する、いわゆる黑色磨研土器である。

2 塑像(圖版4~5, 圖9)

31~39の塑像にはすべて「方山」の注記があり、原田〔1939〕の記載から白佛臺遺址で採集したことがわかる。いずれも二次的な火をうけて堅く焼けている。

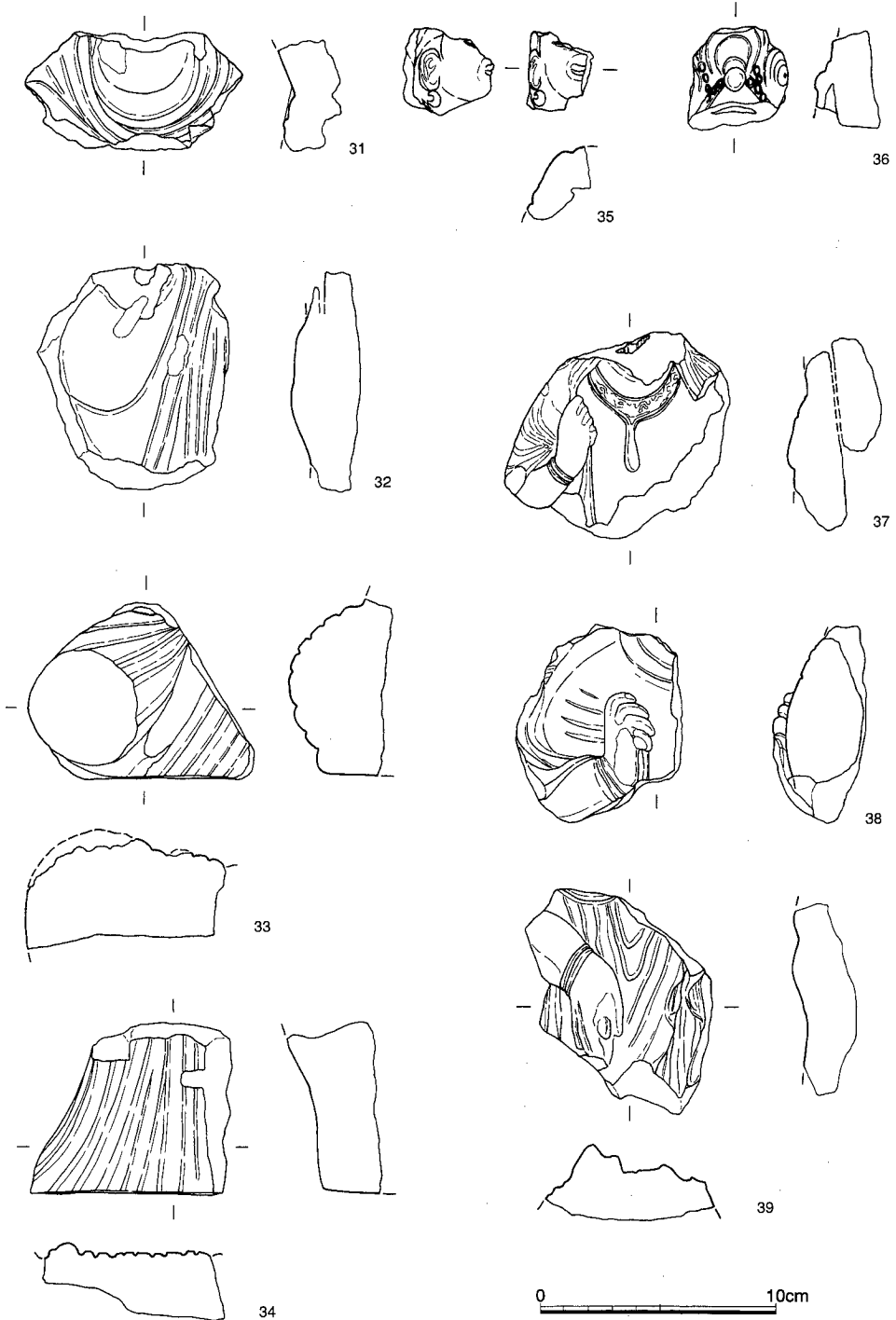


圖9 白佛臺遺址の塑像 縮尺1/3

31 は如來像の頸部片。通肩式大衣を身につけ、襟部に左右各3本の衣褶線を刻む。同范とみられる塑像片が、北京大學サックラー考古藝術博物館の所藏品中にある〔出光美術館編1995：圖版118-h〕。殘存の高さ5.0 cm、幅9.1 cmをはかる。ごく少量の細砂粒をふくみ、にぶい黄褐色（10 YR 7/3）を呈する。

32 は如來像の體部斷片である。僧祇支を内に、大衣を上、それぞれ偏袒右肩にまとい、左肩から右脇へ斜めにかかる大衣の襞もはっきりと確認できる。大衣の右肩をかぶった部分が欠損し、衣の縁部のみが痕跡をとどめる。頸部断面には長径0.8 cm、深さ3 cmあまりの小孔があり、木芯の痕跡と考えられる。孔の角度は、やや前傾氣味である。高さ9.4 cm、幅8.1 cmが殘存する。胎土は精良で、にぶい黄褐色（10 YR 7/3）を呈する。

33 は如來像の右足部斷片である。結跏趺坐した右足の部分であり、衣褶が力強い陰刻線で刻みだされている。腹前から垂下する裳裾も同様に、放射状の刻線で衣褶があらわされる。底面が平らな面をなしている。表面全體に赤色の顔料が殘存する。殘存高7.4 cm、幅9.4 cm。胎土に細砂粒をふくみ、淺黄色（10 YR 8/3）を呈する。

34 も33と同様の破片である。右膝の部分を缺失するが、放射状の刻線で衣褶をあらわした裳裾がよく残っている。底面には平らな面をもつ。一部に赤色の顔料が残る。殘存高7.3 cm、幅8.5 cm。胎土に細砂粒をふくみ、灰白色（10 YR 8/2）を呈する。

35 は左を向いた頭部の斷片である。伏し目がちの切れ長の目尻と、口角を引き締めて微笑を浮かべる表情が認められる。耳もとに三日月形の耳飾りらしきものを装着し、菩薩像と推定される。この頭部斷片の幅は、さきに述べた32の菩薩像の寶冠の幅や、33の如來像の頸徑と人體比例が近似し、一連の群像を構成していた可能性が高い。裏面には方柱状の木芯の痕跡をとどめている。殘存の高さ3.7 cm、幅2.7 cmをはかる。胎土は精良な粘土を用い、にぶい橙色（5 YR 7/3～7/4）を呈する。

36 は菩薩像の三面寶冠の斷片である。正面觀で、三面立飾の各間に、パルメット紋らしい裝飾がある。このような形式の寶冠は、雲岡石窟第6洞以前の諸窟において盛行していた。冠正面の圓形立飾の下部中央に半球形の玉を置き、そこから左右に連珠裝飾を冠側に弧状に垂下させていたようだが、摩損がいちじるしい。類似する形式の寶冠として、雲岡石窟第8洞主室の北壁上段龕にある半跏思惟像が1例としてあげられる。髮際の一部も殘る。断面に幅1.8 cm、深さ1.1 cmの空隙があるが、芯の痕跡かどうかは不明である。殘存の高さ4.3 cm、幅4.2 cm。細砂粒をふくみ、灰白色（10 YR 8/2）を呈する。

37 は菩薩像の體部破片である。頭部を失うが、兩肩にかかる冠繪の一部が残る。頸部断面には、幅1.3 cmの平たい孔があり、腰のあたりまでまっすぐに貫いている。木目が明瞭に觀察でき、荒削りの板片を芯にしていたと考えられる。右手に蓮莖をとるが、蓮華上部は缺失する。握掌の上部から伸びているはずの蓮莖は摩損しているようだが、右肩付け根

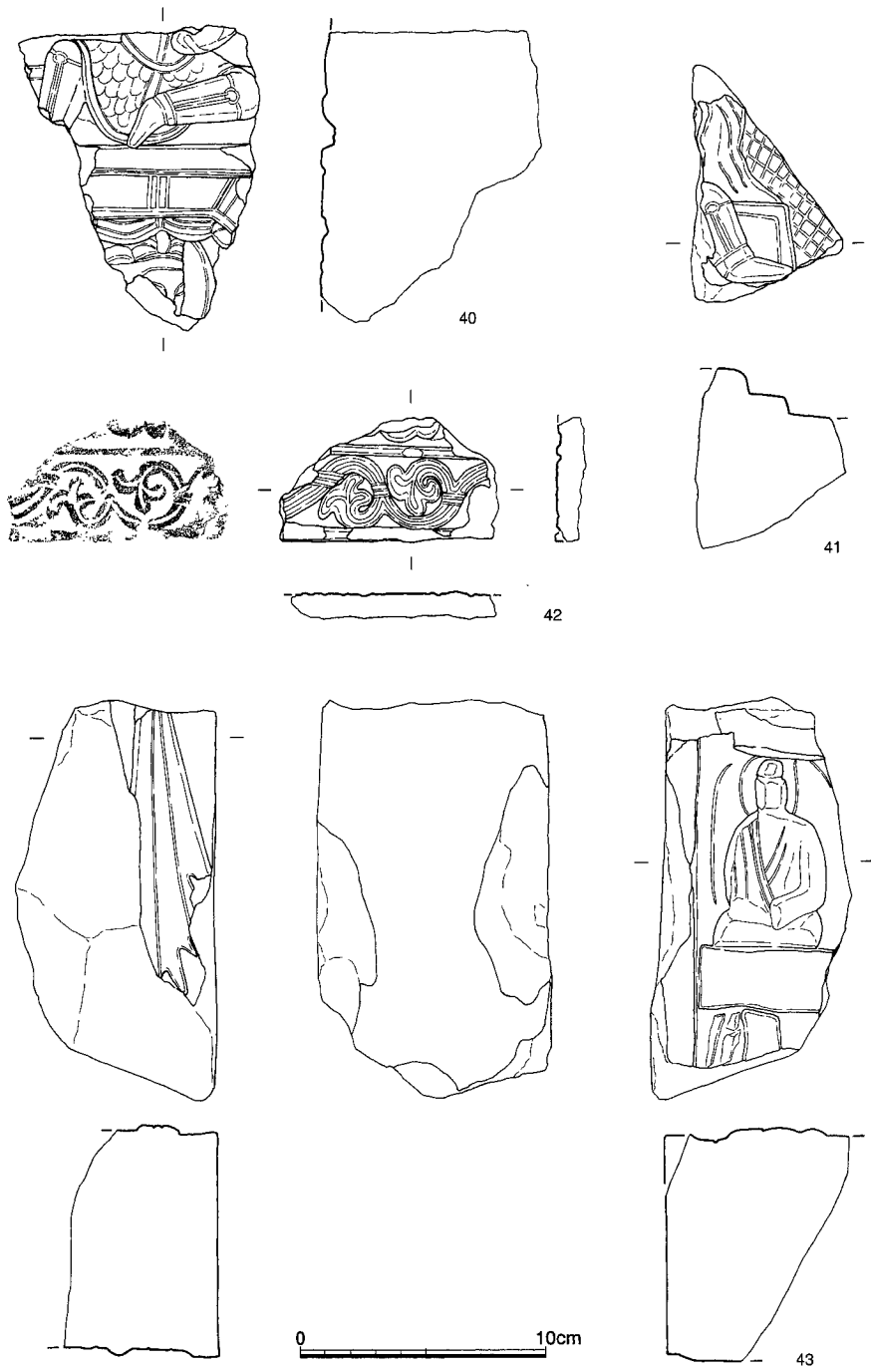


圖 10 白佛臺・草堂山遺址の石彫 縮尺 1/3

附近に長径 0.5 cm、深さ 2.4 cm ほどの小孔があり、蓮華部分は鐵芯塑製の差しこみ式であった可能性が高い。體部は、やや右に腰を捻っており、群像の一部であつたらしい。充實した肉付きをあらわす胸部には、中央に涙形の寶石 1 顆を垂下させた幅廣の三日月形胸飾を佩びている。その表面には、不鮮明であるが、紋様の痕跡が認められる。右上腕に天衣が認められ、そのまま内側から體側に沿って垂下させていたのであろう。右手首には腕釧を佩びている。全體ににぶい赤褐色 (2.5 YR 5/3) の顔料が残る。殘存する高さ 8.7 cm、幅 9.3 cm をはかる。胎土は精良で、にぶい黄褐色 (10 YR 7/3) を呈する。

38 は菩薩像の胸部斷片である。右手を胸前に構える。上半身は裸で、頸部に帶狀胸飾らしき痕跡がある。右上腕に天衣をかけるが、北京大學サックラー考古藝術博物館が所藏する方山出土の同範塑像片〔出光美術館編 1995：圖版 118-j〕から、天衣は肩沿いに上腕から體側へ垂下させていたと推定される。高さ 8.3 cm、幅 6.9 cm が殘存する。胎土は精良で、にぶい黄褐色 (10 YR 7/3)～淺黄橙色 (10 YR 8/3) を呈する。

39 は菩薩立像の腰部斷片である。やや右斜側面であらわされ、またやや腹を前に突き出していることから、全體のプロポーションに若干の屈曲があつたことを示す。腰部以下に、深い衣褶を彫りだした厚い裳をまとう。斷片向かつて左最上部の縁邊に、垂直方向に流れる裳の襞をさえぎる形で、ゆるい下弦狀の刻線が認められる。條帛の下縁あるいは裳の折り返し縁部であらう。右手首に腕釧をつけることから、菩薩像であつたと推定される。右手は右腿部へ垂下させ、掌中に何かをもつ。衣に暗赤色 (7.5 R 6/3) を塗布する。殘存の高さ 9.5 cm、幅 7.8 cm。胎土は精良で、淺黄色 (2.5 Y 7/4) を呈する。

3 石彫 (圖版 6、圖 10)

石彫は 4 點ある。40～42 は「方山」の注記がある白佛臺遺址の採集品、43 は「方山下」の注記をもつ草堂山遺址の採集品である。

40・41 は石造の浮彫斷片である。いずれも砂岩製。40 は上下 2 段からなり、上段には着甲の天部像の下半部が、下段には梯形の楣拱額龕の右上部の一部が残る。天部像は、方座上に安坐し、魚鱗紋が陰刻された腰甲を着け、腹帯を締める。また、袴の上に脛甲を着け、靴を履く。左手は握掌し腹前に構える。楣拱額龕上縁には弧狀の垂幕を吊り、龕内には飛天頭部が殘存する。圓光を負い、やや左に顔を向け、目・眉を陰刻線で表している。元來は、雲岡石窟第 7・第 8 洞の主室前壁にある 6 體天人像の群像構成に類似するものではなかつたかと想定される。殘存高 12.0 cm、幅 9.5 cm で、にぶい黄褐色 (10 YR 6/4) を呈する。41 は方座に安坐する天部像の左脚部斷片である。左足は 40 の浮彫斷片上段天部像と同様に脛甲と靴を着ける。最上部には體側に構えた左肘部のみが残り、左腕から方坐上に垂下する天衣も残る。人物像背後の地には斜格子紋を陰刻する。殘存高 9.1 cm、幅 5.7

cmをはかり、にぶい黄褐色（10 YR 6/3）を呈する。

42は半パルメット波状唐草紋をあらわす浮彫断片。浮彫は平行する2本の突帯の間に波状の莖をあらわし、その山と谷の部分に三葉の半パルメットを交互につける。半パルメットが莖から分岐する部分には結節帯をもつ。莖と葉は中央に1條の刻線があり、上面は幅廣の平面となる。波状唐草紋帯の上方に浮彫が残るが、何を表現したものかは不明である。砂岩製。残存高4.9 cm、幅8.8 cmで、淺黄色（2.5 Y 7/3）を呈する。

43は砂岩製の浮彫断片で、両面に彫刻をほどこす。一面に高さ約8.5 cmの千佛像が浮彫される。拱手し、方座の上に結跏趺坐する。肉髻、衣紋、天蓋、光背などが大まかに刻まれている。千佛をおさめる龕の上面は平坦な面をなしており、同じような龕が上段にも彫刻されていたことを示している。千佛像の着衣は、前合わせのいわゆる涼州式偏袒右肩で、このころ敦煌石窟や雲岡石窟などを中心に確認される着衣形式である。一重圓の頭光を大きな擧身光でつつむ光背形式とあわせて、雲岡石窟第9洞の窟門明窓上の千佛像などと類似し、その製作環境の近さを示している。反対の面には、浮彫の垂幕の左端の一部が残存する。この向かって右側面は平面をなし、平滑に仕上げられている。ただし、上端には龕の底部とみられる段が残存し、側面にも彫刻があった可能性がある。以上のことから本来この断片は垂幕面を正面とし、千佛像を背面とする碑龕像の右下部断片と考えられる。残存高15.8 cm、幅7.9 cm、厚さ9.4 cmで、にぶい黄褐色（10 YR 6/3）～黄灰色（2.5 Y 6/1）を呈する。

第3章 『魏書』と『水經注』にみえる方山永固陵

文明太皇太后は文成帝の皇后馮氏である。長樂信都（いまの河北省冀州市）に出自する漢人で、祖父の馮弘は北燕の天王であったが、436年に北魏に滅ぼされた。父の馮朗は北燕の滅亡前に北魏に亡命し、秦州・雍州刺史となった。母は樂浪王氏である。

文成帝は曇曜の建議をうけて雲岡石窟を開鑿するなど佛教の復興に力を盡くしたが、465年に崩じ、子の獻文帝が12歳で即位する。皇太后となった馮氏は政治の實權を握り、471年、獻文帝に迫って子の孝文帝に讓位させた。このとき孝文帝はわずか5歳、馮氏は490年に49歳で亡くなるまで、太皇太后として權力をほしいままにしたのであった。

壽陵の選地と造營 平城に遷都してから北魏皇帝・皇后の陵墓は、もとのみやこ盛樂に近い金陵にあった。文明太后が490年に没し、孝文帝は494年に洛陽に遷都したから、方山永固陵は平城の近傍に營まれた最初で最後の陵墓であった。文成帝の葬られた金陵に文明太后を合葬するのではなく、方山に獨立した陵墓を營んだ理由について『魏書』卷13文成文明皇后馮氏傳はつぎのように記している。

太后は孝文(帝)と方山に遊び、川阜を顧瞻するに、終焉の志あり。因りて羣臣に謂ひて曰く、「舜は蒼梧に葬らるるも、二妃従わず、豈に必ず遠く山陵に附せば、然る後に貴となるや。吾れ百年の後も、神それここに安んぜん」と。高祖(孝文帝)乃ち有司に詔して壽陵を方山に營建し、又た永固石室を起ちて、將に終れば清廟となさしむ。太和五年(481)に起作し、(太和)八年(484)に成り、石を刊りて碑を立て、太后の功德を頌す。

太后與孝文遊于方山，顧瞻川阜，有終焉之志。因謂羣臣曰，「舜葬蒼梧，二妃不從，豈必遠附山陵，然後爲貴哉。吾百年之後，神其安此」。高祖乃詔有司營建壽陵於方山，又起永固石室，將終爲清廟焉。太和五年起作，八年而成，刊石立碑，頌太后功德。

舜の皇妃が合葬されなかった例を引いて、文明太后は山水の明媚な方山に壽陵の建設を命じたのである。恵太后竇氏や昭太后常氏など、北魏の皇帝陵に皇后を合葬しない先例があり、平城に遷都して80年ほど、そこからあまり遠くない方山に壽陵をつくることも特異なことではない。しかし、それ以前の北魏皇帝・皇后の陵墓はすべて所在が確かめられないほど質素なものであったのにたいして、文明太后は百年後も禮拜されるような墳丘と清廟をそなえた壮大な陵墓を計画したのであった。清廟とは『詩經』周頌の「清廟之什」にちなむ名で、清明な聖人をまつる廟のこと。こうした陵墓の造營は、牧畜をなりわいとすする拓跋鮮卑の質素な風習を捨て、漢人の習俗に轉換することを意味したのである。

營陵の命令がいつ下されたのかは記されていない。しかし、481年に造營がはじまり、文明太后の功績を記した石碑を立てたことは『魏書』卷7高祖紀上にもみえる。

(太和五年)夏四月己亥，方山に行幸す。永固石室を山上に建て、碑を石室の庭に立て、又た太皇太后の終制を金冊に銘し、又た鑿玄殿を起つ。

(太和五年)夏四月己亥，行幸方山。建永固石室於山上，立碑於石室之庭，又銘太皇太后終制于金冊，又起鑿玄殿。

永固石室は『水經注』にいう永固堂で、墳丘の南に位置し、庭には石碑が立っていた。同時に建てられた鑿玄殿は、位置は不明だが、文明太后を埋葬したときに孝文帝がまつりをおこなった建物である。永固陵の墳丘はもともと「三十餘歩」をこえないように計画されたが、葬儀のとき孝文帝は鑿玄殿で詔を下し、「いま山陵を以て萬世も仰ぐ所とし、復た廣げて六十歩となす(今以山陵萬世所仰，復廣爲六十歩)」と墳丘を2倍に擴張したのである(『魏書』文成文明皇后馮氏傳)。それは萬世にわたって禮拜するためであった。じっさい孝文帝は太和14年(490)10月9日に文明太后を埋葬したのち、同月の10日・15日・20日の3回、翌年は3月12日、4月3日、7月5日、10月2日の4回、太和16年は9月18日の1回、洛陽に遷都する直前の太和17年(493)には8月9日に謁陵している〔村元2000〕。

また、恒州代郡には平城・太平・武周・永固の4縣があった(『魏書』卷106地形志上)。本

注によると、このうち平城と武周は漢代にさかのぼる縣で、永固縣は舊來の縣が永固陵にちなんで改名されたのではなく、永固陵の陵邑として新たに設置されたのであろう。その位置について大同市博物館の曹臣明氏の教示では、方山の山麓にあったという。

孝文帝の陵墓 文明太后の死から1年と経たない太和15年7月、孝文帝はみずからの壽陵を方山に造營する。『魏書』卷7高祖紀下は「謁永固陵，規建壽陵」と記すだけだが、『魏書』文成文明皇后馮氏傳はつぎのようにいう。

初め、帝は太后に孝し、乃ち永固陵の東北里餘りに於いて壽宮を營み、遂に終焉を瞻望する志あり。洛陽に遷るに及び、乃ち自ら瀘西に表し以て山園の所となし、方山の虚宮は號して萬年堂と曰うと云う。

初、帝孝於太后、乃於永固陵東北里餘營壽宮、遂有終焉瞻望之志。及遷洛陽、乃自表瀘西以爲山園之所、而方山虚宮號曰萬年堂云。

孝文帝は文明太后の眠る永固陵に參拜し、その東北1里あまりのところに壽陵をつくることを決意した。しかし、その3年後に孝文帝は洛陽遷都を敢行、平城に歸葬することを禁じ、瀘河の西にみずからの陵墓を定めた。いま孝文帝の長陵は洛陽の北、邙山を流れる瀘河の西にある。方山の壽陵はそのまま放棄され、萬年堂と名づけられたのである。

靈泉宮と思遠佛寺 481年に方山永固陵の造營がはじまる少し前、方山にはまず靈泉宮や思遠佛寺などの建築が進められた。『魏書』高祖紀上はつぎのように記している。

太和三年(479)六月辛未、…文石室・靈泉殿を方山に起つ。…八月乙亥、方山に幸し、思遠佛寺を起つ。丁丑、宮に還る。

太和三年六月辛未、…起文石室・靈泉殿於方山。…八月乙亥、幸方山、起思遠佛寺。丁丑、還宮。

方山の文石室と靈泉殿は、靈泉宮の主體建築であろう。孝文帝は太和3年6月に靈泉宮を造營し、その8月には方山に行幸して思遠佛寺を建立したのである。文明太后と孝文帝が方山に遊び、ここに壽陵の造營を決意したのはこのときであろうか。永固陵の造營に着工するのはその2年後だが、この太和3年から文明太后が崩じる太和14年9月まで、方山と靈泉(宮)池への行幸記事が多くなる。『魏書』高祖紀からそれを列挙してみよう。

- ① 太和三年八月乙亥、幸方山、起思遠佛寺。丁丑(2日後)、還宮。
- ② 太和四年八月甲辰、幸方山。戊申(4日後)、幸武州山石窟寺。庚戌、還宮。
- ③ 太和五年四月己亥、行幸方山。建永固石室於山上、…又起鑿玄殿。
- ④ 太和六年三月壬午、幸方山。
- ⑤ 太和七年七月丁丑、帝・太皇太后幸神淵池。甲申(7日後)、幸方山。
- ⑥ 太和八年四月甲寅、幸方山。
- ⑦ 太和八年七月乙未、行幸方山石窟寺。

- ⑧ 太和九年四月癸丑，幸方山。甲寅（1日後），還宮。
- ⑨ 太和九年六月辛亥，幸方山，遂幸靈泉池。丁巳（6日後），還宮。
- ⑩ 太和十年四月癸酉，幸靈泉池。戊寅（5日後），車駕還宮。
- ⑪ 太和十年六月辛酉，幸方山。
- ⑫ 太和十年七月戊戌，幸方山。
- ⑬ 太和十一年五月壬辰，幸靈泉池，遂幸方山。…甲午（2日後），車駕還宮。
- ⑭ 太和十二年四月乙丑，幸靈泉池。丁卯（2日後），遂幸方山。己巳（4日後），還宮。
- ⑮ 太和十二年七月己丑，幸靈泉池，遂幸方山。己亥（10日後），還宮。
- ⑯ 太和十二年九月辛未，幸靈泉池。癸酉（2日後），還宮。
- ⑰ 太和十三年四月丁亥，幸靈泉池，遂幸方山。己丑（2日後），還宮。
- ⑱ 太和十三年七月丙寅，幸靈泉池，與羣臣御龍舟，賦詩而罷。
- ⑲ 太和十四年正月乙丑，行幸方山。
- ⑳ 太和十四年二月辛未，行幸靈泉池。壬申（1日後），還宮。
- ㉑ 太和十四年七月丙午，行幸方山。丙辰（10日後），遂幸靈泉池。

文石室・靈泉殿を建てたときから数えると、方山には記録にとどめられただけでも22回の行幸があった。⑧の太和9年4月までは方山とだけ記され、はじめて靈泉池に行幸した⑨の同年6月以後、靈泉池への行幸記事が多くなる。それは靈泉宮の完成が太和9年にずれこんだからであろう。⑤太和7年7月は孝文帝と太皇太后がそろって行幸したことを記す。方山の前に訪れた神淵池とは北苑内の庭園である。⑩・⑯・⑱・㉑は靈泉池だけの行幸で、㉑は1日、⑭・⑮は2日間の滞在である。⑧の方山滞在も1日だけである。⑬太和11年5月と⑰同13年4月には靈泉池につづいて方山に行き、2日後に平城に戻っている。靈泉池と方山それぞれ1日の滞在であったのだろう。靈泉宮は方山にあったけれども、このように靈泉池と方山とは別々に行幸されたり、靈泉池からつづきに方山へ、あるいはそれと逆の順に行幸されることがあったから、両者はあるていど離れたところにあったと考えられる。『水經注』をもとに検討するように、靈泉（宮）池が方山のふもとにあり、思遠佛寺や永固堂が方山の上にあったとみるのが妥当であろう。

いっぽう思遠佛寺は①にあるように太和3年8月に建てられた。ただし、『魏書』卷114釋老志は太和元年（477）に「又た方山の太祖營壘の處において、思遠寺を建つ（又於方山太祖營壘之處，建思遠寺）」として建立年代がちがっている。月日まで細かく記した高祖紀がおそらく正しいのだろうが、いずれにせよ太和5年の永固陵の着工にさきだって思遠佛寺が建てられたことは確かであろう。それが平城に遷都した太祖道武帝が堡壘を築いたところであることは、思遠佛寺の位置を考えるうえで参考になる。文明太后は同時に北燕の舊都龍城（いまの遼寧省朝陽市）に思燕佛圖を建て、石碑を刻んでいる（『魏書』文成文明皇后馮氏

傳)。思遠佛寺の寺主であった僧顯は、雲岡石窟を開鑿した曇曜のつぎに沙門都統に任じられている(『廣弘明集』卷24)。それは思遠佛寺が太和年間においてすでに國家の中心的な佛寺であったことを示している。しかも、孝文帝は毎年のように方山に行幸し、⑭太和12年4月には方山に4日、⑮の太和14年7月には10日も滞在していることから、それが具體的に方山のどこであったのかは特定できないとしても、山上には多くの建物が臺を連ねていたことはまちがいないだろう。

方山永固陵の陵園 太和年間に相ついで造營された方山の靈泉宮・思遠佛寺・永固陵の位置とその建物の様子について、北魏の酈道元『水經注』卷13 漂水條はつぎのように記している。

(方山の)嶺上に文明太皇太后陵あり、陵の東北に高祖陵あり。二陵の南に永固堂あり、堂の四隅は樹・階・欄・檻を雉列し、扉・戸・梁・壁・椽・瓦に及ぶまで、悉く文石なり。檐前の四柱は、洛陽の八風谷の黒石を採りてこれをつくるに、雕鏤は隱起し、金銀を以て雲矩に間し、錦のごときあり。堂の内外の四側は、兩石趺を結び、青石の屏風を張り、文石を以て縁をつくり、竝びに忠孝の容を隱起し、貞順の名を題刻す。廟前に石を鐫りて碑・獸をつくるに、碑石は至佳なり。左右に柏を列ね、四周し、禽は迷い日は闇にす。院外の西側に思遠靈圖あり、圖の西には齋堂あり。南門には二石闕を表し、闕の下は山を斬り御路を纒結す。下に靈泉宮池を望むに、皎なること圓鏡のごとし。

(方山)嶺上有文明太皇太后陵、陵之東北有高祖陵。二陵之南有永固堂、堂之四隅雉列樹・階・欄・檻、及扉・戸・梁・壁・椽・瓦、悉文石也。檐前四柱、採洛陽之八風谷黒石爲之、雕鏤隱起、以金銀間雲矩、有若錦焉。堂之内外四側、結兩石趺、張青石屏風、以文石爲縁、竝隱起忠孝之容、題刻貞順之名。廟前鐫石爲碑・獸、碑石至佳。左右列柏、四周、迷禽闇日。院外西側有思遠靈圖、圖之西有齋堂。南門表二石闕、闕下斬山纒結御路。下望靈泉宮池、皎若圓鏡矣。

方山の平坦な山上には文明太皇太后と孝文帝の墳墓がある。孝文帝の壽陵は文明太后の墓の東北1里あまりのところであり、埋葬のない虚宮となって萬年堂と呼ばれたことはさきにみた。陵墓の南には永固堂、その西に思遠靈圖、さらにその西に齋堂が並び、南には石闕があり、その下の斷崖には御路がつづら折りになって、下に靈泉宮池が望めたという。永固堂は『魏書』にいう永固石室、思遠靈圖はその思遠佛寺、靈泉宮池はその靈泉殿や靈泉池にあたるのだろう。永固堂は永固石室と呼ばれたように堂の内外を彫刻した石で飾り、洛陽の八風谷に産する黒石を用いて莊嚴していた。彫刻の内容は忠孝・貞順といった中國傳統の儒教道徳で、廟の前には精良な石を用いた石碑があった。文明太后の功德を頌したと『魏書』にいう石碑である。『水經注』はつづけて圓鏡のように光輝いていたという

靈泉(宮)池について記している。

如渾水は又た南して靈泉池に至り、枝津は東南して池に注ぐ。池は東西百歩、南北二百歩。池渚はもと白楊泉と名づく。泉上に白楊樹あり、因りて以て名づけるなり。それ猶お長楊・五柞(宮)の流稱のごときなり。南には舊京に面し、北には方嶺を背い、山原を左右にし、亭觀は繡のごとく峙し、方に湖の反景は、三山の水下に倒れるがごときなり。

如渾水又南至靈泉池、枝津東南注池。池東西百歩、南北二百歩。池渚舊名白楊泉。泉上有白楊樹、因以名焉。其猶長楊・五柞之流稱矣。南面舊京、北背方嶺、左右山原、亭觀繡峙、方湖反景、若三山之倒水下。

靈泉池は方山のふもとにあつて、如渾水(いまの御河)の水を取りこむようにつくられた。南は平城のみやこに通じているが、東西には山がせまり、三方の山が池の水面に映っているという。長楊・五柞宮は秦漢代より渭水にあった離宮で、『水經注』の渭水注にもみえる。『魏書』高祖紀の行幸記事をもとに分析したように、行幸先の方山は山上の永固堂や思遠靈園、靈泉(宮)池は方山のふもとにあつたと考えるのが妥当であろう。

近年、殷憲〔2007〕らは御河と萬泉河の合流點の東南にある青羊嶺村で北魏瓦の散布と靈泉池の遺迹とみられる窪地を發見した。方山永固陵の南およそ4.5 kmのところである。その窪地は東西200 m×南北350 mほどで、『水經注』にいう數値に近いという。報告に圖示された複瓣6葉蓮華紋瓦當は、平城の操場城遺址や明堂遺址の出土例に類似し、靈泉宮の機能していた時期に比定できる。久しく不明であつた靈泉宮の所在地が確定するのは、時間の問題であろう。

造營者の鉗耳慶時 方山の靈泉宮・思遠佛寺・永固陵・永固堂の造營にたずさわつたのは、王遇(もとの姓は鉗耳、名は慶時)ら文明太后に登用された宦官たちである。王遇は馮翊郡(いまの陝西省)の李潤羌に出自し、とくに藝術と建築において手腕を發揮した。『魏書』卷94王遇傳にいう。

(王)遇は性は巧にして部分に強なり。北都(平城)方山の靈泉、道俗居宇、および文明太后の陵廟、洛京の東郊馬射壇殿、文昭太后墓園の修廣、太極殿および東西兩堂、内外の諸門制度はみな(王)遇の監作なり。年は耆老にありといえども、朝夕倦まず、鞍に跨り驅馳し、少壯者とその勞逸を均しくす。

遇性巧、強於部分。北都方山靈泉道俗居宇及文明太后陵廟、洛京東郊馬射壇殿、修廣文昭太后墓園、太極殿及東西兩堂・内外諸門制度、皆遇監作。雖年在耆老、朝夕不倦、跨鞍驅馳、與少壯者均其勞逸。

王遇が建設を監督した「方山の靈泉、道俗居宇、および文明太后の陵廟」とは、方山の靈泉宮・思遠佛寺・永固堂にはかならない。また、同孟鸞傳には「文明太后の時、王遇に寵

あり、(孟)鸞は謹敏を以て(王)遇の左右となり、方山に往來し、諸寺舎を營む(文明太后時、王遇有寵、鸞以謹敏爲遇左右、往來方山、營諸寺舎)」とあり、王遇に近い宦官たちも方山の造營に關與していたことがわかる。

同じころ王遇は雲岡石窟の造營にもたずさわっていた。宿白が北京大學圖書館で發見した元の熊夢祥『析津志』に引く雲岡石窟の「大金西京武州山重修大石窟寺碑」には、つぎのような記載があった〔宿 1956〕。

いま寺中に遺刻の存するところのもの二。一は護國に載在し、大なるも不全、年月の攷うるべきものなし。一は崇教にあり、小にして完。それはほぼ「安西大將軍散騎常侍吏部內行尙書宕昌(公)鉗耳慶時鑄也。巖開寺」といい、その銘に「承藉□福、遮激冥慶、仰鍾皇家、卜世惟永」という。蓋し(鉗耳)慶時の國のために祈福し建てるころなり。末に「大代太和八年に建て、十三年に畢る」という。

今寺中遺刻所存者二、一載在護國、大而不全、無年月可攷。一在崇教、小而完。其略曰、安西大將軍散騎常侍吏部內行尙書宕昌鉗耳慶時鑄也、巖開寺、其銘曰、承藉□福、遮激冥慶、仰鍾皇家、卜世惟永。蓋慶時爲國祈福之所建。末云、大代太和八年建、十三年畢。

金代のとき雲岡石窟の崇教寺内に銘刻が残り、太和8年(484)から太和13年(489)にいたる石窟開鑿の紀年と造營者として鉗耳慶時(王遇)の名が記されていたのである。方山永固陵の造營は太和5年(481)から太和8年(484)まで。したがって、王遇はそれにつづいて雲岡石窟の開鑿に着手したのである。王遇はまた太和年間(477-499)に平城の東郭外に祇洹舎(祇園精舎)を建てた。『水經注』卷13 瀑水條にいう。

(平城)東郭外には、太和中に閩人の宕昌公鉗耳慶時(王遇)、祇洹舎を東郭に立つ。瓦・梁・棟・臺壁・櫺陛・尊容聖像より、牀坐・軒帳に及ぶまで、悉く青石なり。圖制は觀るべきも、恨む所は惟だ列壁合石の疎にして密ならず、庭中に「祇洹碑」あり、碑題の大篆は佳にあらざるのみ。

東郭外、太和中閩人宕昌公鉗耳慶時、立祇洹舎于東郭。瓦・梁・棟・臺壁・櫺陛・尊容聖像、及牀坐・軒帳、悉青石也。圖制可觀、所恨惟列壁合石疎而不密、庭中有「祇洹碑」、碑題大篆非佳耳。

方山の永固堂と同じように、王遇の建てた祇洹舎は建物内外の莊嚴に青石をちりばめていた。それは王遇の「性は巧にして部分に強」という藝術性をあらわしていたのだろう。遷都後の洛陽においても王遇は「洛京の東郊馬射壇殿、文昭太后墓園の修廣、太極殿および東西兩堂、内外の諸門制度」を監督し、洛陽城の造營が本格化した宣武帝のときには將作大匠を兼任していた。平城から洛陽へ、王遇の建築手法はみずからの手で繼承されていたのである。

王遇はまた、雲岡石窟を鑿っていた太和12年(488)に郷里の舊宅を改造して暉福寺を建立した。陝西省澄城縣の北に「大代昌公暉福寺碑」という大篆の碑額をもつ石碑があり(いま西安碑林博物館に所蔵)、二聖(文明太后と孝文帝)のために三級佛圖各一區をつくったことが記されている。文明太后の恩寵をうけて高位に昇った王遇にとって、文明太后と孝文帝とは崇拜すべき生き佛であった。さきに王遇が方山の靈泉宮・思遠佛寺・永固堂の造營を主導したのも、たんに建築家として腕前が認められただけではなく、二聖と佛教にたいする熱い思いがあったからだろう。方山の出土文物を考えると、以上のような王遇の動向にも注意しなければならない。

『水經注』と遺構の比定 遺構の配置と『水經注』との照合は、Wenley にはじまる諸研究によって大きく進展した。そのうち代表的な説をまとめたのが表1である。

Wenley の A 地點を文明太后馮氏の墳墓とみることに異論がない。それが方山にお

表1 『水經注』と遺構の比定

地點	Wenley 1947	原田 1939	水野・長廣 1956	宿 1977	張 2003
A	馮氏墓	馮氏墓	馮氏墓	馮氏墓	馮氏墓
B	永固堂	—	—	—	—
C	南門石闕	永固堂・思遠靈圖	永固堂	永固堂	永固堂・思遠靈圖
D	靈泉宮	靈泉宮	思遠靈圖	思遠靈圖	靈泉宮
E	御道	御道	御道	—	御道

ける最大の墳丘で、「復廣爲六十步」という規模にはほぼ合致し、大同市博物館による墓室の發掘成果をみても、その比定はゆるがない。また、南崖につづら折りの御道がみえることも異論がないだろう。

問題の1つは永固堂の比定である。Wenley は中軸線上にある平坦地の B 地點に遺物が散布していたことを理由に永固堂を比定した。これにたいして、ほかの論者はまったくそれにふれることがなく、南崖手前の C 地點に永固堂を比定している。それは石碑の龜趺が C 地點にあり、文明太后の功績を記した石碑を永固石室の庭に立てたという『魏書』高祖紀上の記述を裏づけているからである。

もっとも意見が分かれているのは思遠靈圖と靈泉宮の比定である。まず、靈泉宮について、Wenley・原田・張は崖上の永固堂から靈泉宮が望めるという『水經注』の記事から D 地點の草堂山遺址にそれを比定した。しかし、靈泉池には如渾水の水を引きいれており、『魏書』高祖紀の行幸記事からみても、山上の永固堂とはかなり離れたところであって、方山のふもと、御河のほとりにあったと考えるのが妥当だろう。

第1章にみたように、近年、殷憲〔2007〕らの踏査によって、御河と萬泉河の合流點に近い青羊嶺村で靈泉宮と靈泉池とみられる北魏代の遺址が發見され、この問題を解決する有力な手がかりがえられた。

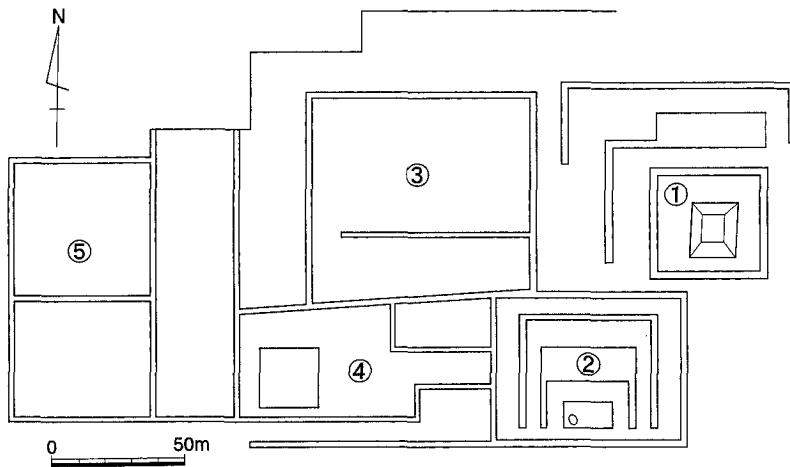


圖 11 白佛臺遺址の遺構復元圖（今井晃樹作成）

白佛臺遺址の復元 C地点の白佛臺遺址とD地点の草堂山遺址の比定については、遺構と遺物とを総合的に考える必要がある。白佛臺遺址の圖 11 は『雲岡石窟』遺物篇に発表した測量圖〔岡村編 2006：圖 64〕をもとに、水野清一・長廣敏雄らが飛行機から撮影した寫眞（圖版 2-1）と Google Earth の衛星畫像によって加筆したものである。白佛臺遺址からは北魏代の瓦のほか遼金代の瓦も出土し〔岡村編 2006：107-115 頁〕、北魏代の遺構の上に遼金代の遺構が重なっている。山頂には明代の烽火臺が点在し、白佛臺遺址にもそれと考えられる土臺がある。しかも、畑の耕作によって壁などの石材が畦に積みあげられている可能性が高く、そのすべてを北魏代の遺構とみることはできない。とはいえ、山頂南端の東南西 3 面は崖縁まで北魏代の瓦が散布し、その全面に北魏代の遺構がひろがっていたことも確かであろう。正確な遺構復元は將來にゆだね、あくまでも想像を交えた現状からの復元であることを断っておく。

石積みの壁で囲まれた院落が少なくとも 5 単位あり、圖のように東から①～⑤とする。東西およそ 280 m、南北およそ 150 m、方位はほぼ磁北に一致する。東の①は一邊 40 m 足らずの區劃内に截頭方錐形の土臺がある。張慶捷は①を永固堂の寢室もしくはそれに附屬する建物と推定したが、高い土臺は寢室にそぐわない。Wenley のいうように明代の烽火臺であろう。②の院落はおおよそ東西 60 m×50 m、中心に東西 35 m×南北 20 m ほどの建築基址があり、その南に石碑座の龜趺が残存している。Wenley 以外の論者は、その龜趺が文明太后を顯彰する石碑の臺座であると考え、この院落を永固堂に比定している。わたしたちもそれを支持する。ただし、その龜趺はこの院落の中軸線から大きく西にずれ、頭を南西に向けて原位置から動いている可能性が大きい。その様式も遼代に下る可能性があ

り〔岡村編 2006：108頁〕、なお検討が必要であろう。かりに②が永固堂であるならば、『水經注』は永固堂の西側に思遠靈圖があったというから、④は思遠靈圖に比定できよう。靈圖とは佛塔のこと。④の西部には一邊 20 m ほどの土臺があり、Wenley は門闕の遺構と考えたが、塔基の中心塔柱と考えるのも一案である。東亞考古學會が採集した塑造や石彫の佛教造像は、白佛臺遺址のどこで発見したのかわからないが、忠孝・貞順の彫刻で飾った清廟の永固堂よりも佛寺の思遠靈圖にあったとみるのがふさわしい。このように④を思遠寺とみるならば、『水經注』は圖(塔)の西に齋堂があったというから、西崖に近い⑤の院落がそれと考えられる。少なくとも永固堂・思遠靈圖・齋堂が東から西に並んでいたという『水經注』にしたがえば、東西に長い白佛臺遺址の遺構配置は無理なく理解できるだろう。しかも『魏書』釋老志に、思遠寺は太祖が方山に築いた城塞のところに建てたというから、崖上の白佛臺遺址のほうが四方に眺望のきく城塞にふさわしい立地である。したがって、①～⑤の比定はともかく、白佛臺遺址に永固堂と思遠靈圖があったと考える原田淑人や張慶捷の説がもっとも妥當であろう。

次章に分析するように、白佛臺遺址で出土した「萬歲富貴」瓦當の同范瓦が草堂山遺址からも出土し、遼寧省朝陽市の北塔下層「思燕佛圖」遺址の「萬歲富貴」瓦當との比較から、それが思遠靈圖の創建時の瓦と判断される。これによって思遠靈圖が白佛臺遺址にあったことは、ほぼ裏づけられよう。

このほか永固堂の寢殿なら、位置からみて①よりも③のほうがふさわしいが、その内部に建築基址が確認できない。①と③の性格については、なお検討が必要であろう。

草堂山遺址も思遠靈圖 D 地點の草堂山遺址については、その遺構から水野・長廣や宿白は思遠靈圖の塔院とみていた。新中國の發掘によって塔基の周圍に回廊がめぐることが判明し、多數の塑造の佛菩薩像が出土したことによって、佛教寺院であることがほぼ確定した。方山における佛教寺院で記録にみえるのは思遠靈圖だけであるから、それを草堂山遺址に比定するのがもっとも妥當であろう。

いっぽう、わたしたちは白佛臺遺址の③を思遠靈圖に比定した。そして、この草堂山遺址も同じ思遠寺の一部であると考えている。それは思遠寺の寺主の僧顯が沙門都統に任じられたことからうかがえるように、思遠寺は國家の中心的な佛寺であり、壯大な伽藍をもっていたと想像されることに加えて、次章以下に検討するように、白佛臺遺址と草堂山遺址とで創建時に用いられたと考えられる 2 種類の同范「萬歲富貴」瓦當や塑像が共有されていることにより、ほぼ同時期に同じ集團によって施工されたと推測されるからである。草堂山遺址は發掘された塔院にとどまらず、東や南の平臺にも伽藍がひろがっていたから、今後、その全體像を明らかにする必要がある。

第4章 方山出土瓦の様式と年代

1 文字瓦當

方山で採集された瓦當は、文字瓦當と蓮華紋瓦當とに大別できる。方山に思遠寺や永固陵が造営された時期は、文字瓦當から蓮華紋瓦當へと紋様の變化がはじまった時期にあたる。以下では、方山の文字瓦當の主體をなす「萬歲富貴」瓦當を分類し、5世紀における方山の文字瓦當の歴史的意義について考察したい。

方山の文字瓦當 方山の白佛臺遺址や草堂山遺址では、「萬歲富貴」文字瓦當がもっとも多く採集されている。東亞考古學會が収集した「萬歲富貴」瓦當は、字形や大きさを異にする2種類の范型で製作され、『雲岡石窟』遺物篇に報告した東方文化研究所の資料も同様である。これを「萬歲富貴」瓦當のA型、B型とする(圖12)。A型は太く丸味を帯びた書體を特徴とし、瓦當の周縁はややゆがみ、中房や乳に圈線をめぐらさない。直徑は17.4cmに復元される。B型は細く角ばった書體で、瓦當の直徑はやや小さく、復元直徑は14.9cm。A型と同じように中房や乳に圈線はともなわない。A型が右に「富」字、左に「貴」字を配するのにたいし、大同市考古研究所で實見した草堂山遺址出土の同范資料によると、B型はこの兩字を左右逆に配置している。

確實に分類できる「萬歲富貴」瓦當に限って點數をみると、東亞考古學會の資料はA型8點にたいしB型はわずか1點だけである。文字が明らかでない小片を加えても大勢は變わらない。京大の所藏資料も、やはりA型5點にたいしB型1點で、状況は同じである。文字瓦當には、ほかに「福」・「樂」・「永」・「流」・「賢」などの文字を配したものがあるが、いずれも小片のみで、點數も少ない。したがって、方山の文字瓦當でもっとも多く用いられたのはA型「萬歲富貴」瓦當であろう。

このA型「萬歲富貴」瓦當は、白佛臺遺址と草堂山遺址のいずれからも出土している。第2章に報告したB型「萬歲富貴」瓦當は草堂山遺址の出土だが、同范品が白佛臺遺址にあることは現地で確認している。「萬歲富貴」瓦當は方山の北魏瓦當のなかで様式的にもっとも古く、また數量的に多いことから、永固陵にさきだって建立さ

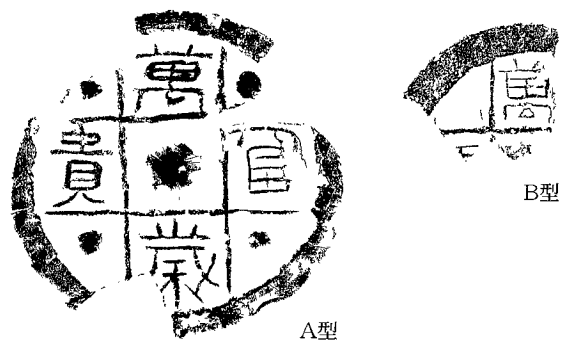


圖12 方山の文字瓦當2種 縮尺1/4

れた思遠佛寺の創建瓦とみてまちがいない。白佛臺遺址と草堂山遺址とが2種類の同範「萬歲富貴」瓦當を共有する事實は、前章で検討したように思遠佛寺が崖上と崖下とにまたがる大規模な寺院であったことを示すものであろう。

文字瓦當の終焉 5世紀における文字瓦當の變遷は、すでに『雲岡石窟』遺物篇に述べた〔岡村編 2006: 148-152頁〕。5世紀前・中葉の指標となるのは、西册田遺址の文字瓦當である(圖13-1~3)。その瓦當は方山の例と同様に瓦當を井桁狀に分割し、「萬歲富貴」などの文字を配するもので、整った隸書體をバランスよく配置し、中房や乳に圈線をめぐらしている。「萬歲富貴」のほか、「大代萬歲」などの文字を配した例がある。

雲岡石窟において瓦葺きの建物がつくられるようになるのは470年代になってからである。第3洞上の東部臺上寺院址と第8洞前から出土した「傳祚無窮」瓦當(同4)がそれであり、書體は楷書に近いものの、整った隸書ふうの文字をていねいに配列し、中房や乳には圈線がともなう。雲岡石窟第3洞前の發掘調査では、「萬歲富貴」瓦當が出土しており、石窟上方から轉落してきたものと推定されている〔雲岡石窟文物研究所ほか 2004〕。これも「傳祚無窮」瓦當と近い特徴を示し、中房や乳の周圍に圈線をめぐらす型式である。

方山における文字瓦當の製作と使用は、思遠寺の造營に際してであろう。前章にみたように『魏書』高祖紀上には479年に思遠佛寺を造營したとあり、481年の永固陵の造營に

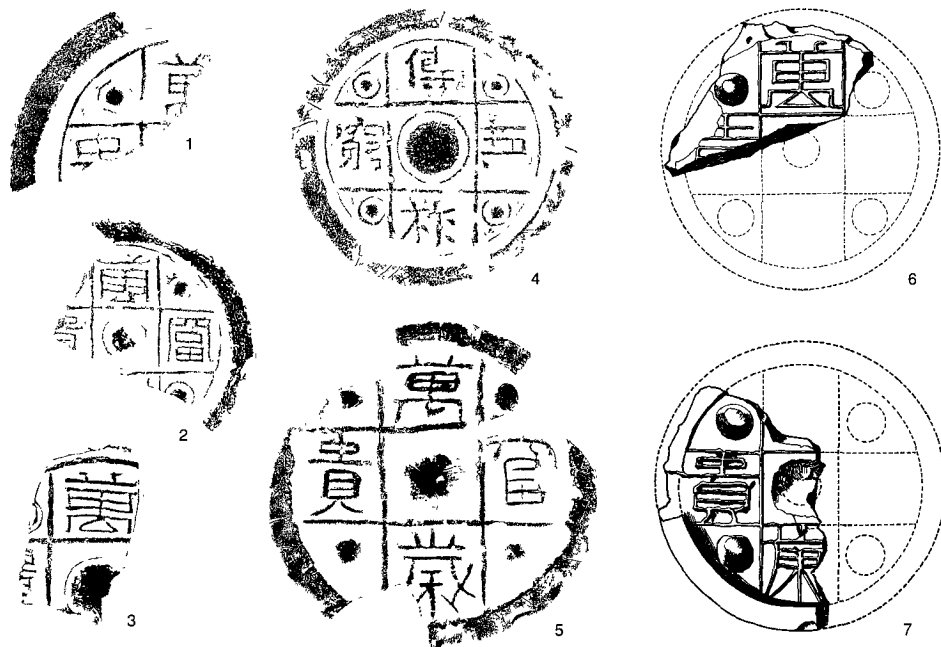


圖13 5世紀の文字瓦當 縮尺1/4
1~3 西册田遺址, 4 雲岡石窟, 5 方山, 6・7 朝陽北塔〔董 1991: 圖7・8〕

さきだって思遠寺が建立されたことが知られる。その文字瓦當は、前項で述べた2種の「萬歲富貴」(同5)のほか、いくつかの吉祥句がある。「萬歲富貴」瓦當は隸書ふうの字體であるが、字形は粗雑で、瓦當そのものにもゆがみがある。いっぽう、「福」・「永」・「流」などの文字は線が細く、萎縮して読みとりづらい。また、「忠賢永貴」瓦當の一部とみられる「賢」字が、かなり楷書體に近づいていることも注意される。そのほとんどは西册田遺址や雲岡石窟の東部臺上寺院址の例と異なり、中房や乳に圈線をとまわず、また紋様區と外縁の間にあった圈線も消失している。

次節で述べるように、北魏では洛陽遷都の直前から蓮華紋瓦當や獸面紋瓦當が隆盛し、伝統的な文字瓦當は姿を消していく。方山において創出された蓮華化生紋瓦當はその先驅的な位置にあり、そのいっぽうで文字瓦當の終焉の一端を方山の文字瓦當にみることができる。すなわち、圈線の消失、字形の粗雑化、楷書體への接近などの一連の現象は、いずれも文字瓦當が終焉をむかえる直前の様相を示しているといえるだろう。

朝陽北塔下層の「萬歲富貴」瓦當 遼寧省朝陽市の北塔は、唐代に創建され、遼代の改修を経た軀塔であるが、その下層から木塔の基壇が発見されている。1993～1995年の發掘調査で北魏代の塑像や瓦當などが多量に出土し、この下層基址が文明太后の造營した思燕佛圖の遺構であることがほぼ確實となった〔董1996〕。

北塔下層とその周邊で出土した瓦當には、「萬歲富貴」瓦當がある(圖13-6・7)。その紋様は瓦當面を突線で井桁状に分割し、中央に半球形の中房、上下左右に「萬歲富貴」の文字を配し、その間の扇形區劃に小さな乳をいれている。中房や乳の周圍には、圈線をめぐらさない。李全〔1996〕は、これらの文字瓦當が篆書と隸書の風格をあわせもつことから、大同周邊で出土する北魏平城期の文字瓦當よりも相對的に古いと判断し、5世紀前葉を下限とする三燕代の瓦當と推定した。これにしたがえば、北魏が北燕を滅ぼした436年がこの瓦當の下限年代となる。

北塔下層の「萬歲富貴」瓦當が整った隸書體であることは事實である。「富」字〔李1996: 圖2-4〕の「口」左端の縦畫が長くのびて「田」の左端につながるなど、後漢～魏晉代の文字瓦當に通じる古い要素をもつことも確かだろう。しかし、北塔下層の「萬歲富貴」瓦當が方山のそれと共通する特徴をもつことにも注意すべきである。前項でみたように、5世紀代の文字瓦當は、中房や乳に圈線をめぐらすものからそうでないものへと變化しており、470年代末に供給された方山の文字瓦當は、北塔下層例と同じ圈線をもたないタイプである。圈線をもたない5世紀代の「萬歲富貴」瓦當は、內蒙古自治區ジュンガル旗の石子灣古城にも出土例がある。報告〔崔1980〕によると、圈線をもつタイプともたないタイプとで出土地點がちがっており、年代差に對應する可能性があろう。大同一帯において、圈線をもたない文字瓦當の出土がいまのところ方山に限られることからみても、この種の文

字瓦當が5世紀後葉の特徴を示していることはまちがいないだろう。

北塔とその周辺では、文字瓦當のほかに蓮華紋瓦當が出土しているが〔李1996：圖1〕、それは高句麗のいわゆる蓮蕾紋瓦當と酷似し、思燕佛圖よりもさかのぼる三燕代のものであろう。また、素瓣蓮華紋瓦當は北魏末あるいはそれ以降のもので、思燕佛圖の創建よりも明らかに後れる。次章で検討するように、朝陽北塔の下層から出土した塑像は方山の例に近似した特徴をもち、『魏書』の記す思燕佛圖の年代と矛盾しない。北塔とその周辺から出土した瓦當のなかで、塑像の年代に合致し、『魏書』の記す思燕佛圖の創建瓦となりうる瓦當は、「萬歲富貴」瓦當をおいてほかにないのである。この「萬歲富貴」瓦當は、中房や乳に圈線をもたない点で方山思遠寺の創建瓦と共通し、文明太后の發願した思燕佛圖の創建瓦にふさわしい。北塔下層で出土した丸瓦や平瓦には、灰色のものと赤褐色のものがあるという〔董1996〕。それは方山に黒色と赤色の磨研瓦があることと對應している。これらの事實は、年代や發願者を同じくする方山の思遠佛寺と龍城の思燕佛圖とは、造瓦の規格のうえでも密接なかかわりがあったことを示している。

2 蓮華化生紋瓦當と複瓣蓮華紋瓦當

方山で採集された瓦のなかでもっとも目を引くのが蓮華化生紋瓦當である。この種の瓦當紋様は、北魏代にいくつかの類例があるものの、ほかの時代に例がない。漢代以來の傳統的な文字瓦當は洛陽遷都の直前に蓮華紋瓦當へと變化しており、方山の蓮華化生紋瓦當は、そのもっとも早い例として重要である。

『雲岡石窟』遺物篇で明らかにしたように、方山永固陵の造營が進められた480年代前半には、雲岡石窟や平城遺址では文字瓦當が用いられており、これが複瓣蓮華紋瓦當や獸面紋瓦當に交代するのは、操場城1號宮殿や明堂などが相ついで建造される490年代はじめごろである。したがって、方山において480年代前半あるいは思遠寺の建立された470年代末に蓮華化生紋瓦當が存在していた意義は大きい。ここでは北魏代の蓮華化生紋瓦當について分類と編年をおこない、石窟彫刻などの圖像と比較することによって、方山における蓮華化生紋瓦當の出現の意義を考えてみたい。

(1) 蓮華化生紋瓦當の分類と年代

北魏代の蓮華化生紋瓦當は、立體感のある豐滿な化生童子をあらわすものと、立體感にやや乏しい瘦せ氣味の化生童子をあらわすものとに大別できる。以下、前者を豐滿型、後者を瘦身型と類別し、それらの出土地や年代の関係について考えていく。

豐滿型蓮華化生紋瓦當 方山白佛臺遺址の例を代表とする。その蓮華化生紋瓦當には2種類(圖14-1・2)あり、蓮瓣外側の連珠紋帯の有無により區別できる。A型(K29・K30・



圖 14 北魏の蓮華化生紋瓦當

1 方山 A 型, 2 方山 B 型, 3 御河東岸〔出光美術館編 1995: 圖版 118-i〕, 4 雲中古城 A 型〔陳 2003: 圖版 41〕, 5 雲中古城 B 型〔石 2006: 403 頁〕, 6 大同南郊〔韓ほか 1996: 圖 14〕, 7 操場城 A 型〔山西省考古研究所ほか 2005: 圖版 17-2〕, 8 操場城 B 型〔同: 圖版 17-1〕, 9 洛陽永寧寺〔中國社會科學院考古研究所 1996: 圖版 114-4〕

T9～T11)は外區に珠紋帯をめぐるさないもので、豊満型化生童子の典型例である。瓦當中央にあらわした化生童子は、腹部がまるく出っ張り、むっくりとした體型で、胸前に兩手をあわせて蕾形のものをもつ。胸元には帯狀の胸飾をつけ、肘には天衣の端のような表現がみえる。複瓣式の蓮瓣は瓣尖が盛りあがって立體感に富み、瓣端が尖る。蓮瓣の基部は不明瞭だが、雲岡石窟などで流行した典型的な北魏の複瓣蓮華紋とはいささか異なっている。すなわち、北魏の複瓣蓮華紋は、外形が漢代以來の傳統的な四葉紋(柿蒂紋)に近く、一筆書きのように蓮瓣の輪郭線が基部でUターンして折りかえすのがふつうである。しかし、この瓦當では輪郭線が繋がらず、それぞれの蓮瓣は獨立している。いっぽうB型(K27・K28)は、蓮瓣と周縁との間に珠紋帯をめぐるすものである。頭部の破片しかないため、化生童子が豊満型か瘦身型かは判断しえない。蓮瓣の形状はA型と同じ各蓮瓣が獨立するタイプであるが、A型に比べると立體感に乏しく、瓣端もやや丸味を帯びている。

御河の東岸で採集された蓮華化生紋瓦當(圖14-3)は、方山のA型ときわめてよく似ている。蓮瓣の輪郭線や瓣尖の稜線がやや細くあらわされるほかは、方山例とほとんど區別がつかないほどである。豊満型の化生童子は、胸前に兩手をあわせて蕾形のものをもつ。帯狀胸飾や、肘にかかる天衣狀の表現も方山例と酷似する。蓮瓣は立體感に富み、瓣端は尖るようだが、つぶれて不鮮明となっている。蓮瓣の基部は不明瞭であるが、方山例と同じく、輪郭線が繋がらず各蓮瓣が獨立するタイプである。外區に珠紋帯はなく、狭い外縁が短くたちあがる。

內蒙古自治區托克托縣の雲中古城から出土した2種の蓮華化生紋瓦當(圖14-4・5)も豊満型である。いずれも豊満な化生童子が、兩肘を曲げてU字形に垂れ下がる花綵を握る姿をあらわしている。A型は化生童子の胸元に帯狀の胸飾をあらわし、その周圍に瓣端の尖った桃果形の複瓣式蓮瓣を配する。輪郭線や瓣尖の稜線をあらわさない點は特徴的である。外區には珠紋帯をめぐらす、外縁は平坦で狭く、珠紋帯が外縁の一部をなしている。直徑は15cm。B型は化生の頭髪を縦の刻線であらわし、兩肘には天衣の表現がみえる。蓮瓣の基部は不明瞭で、輪郭線が繋がらず各蓮瓣が獨立するタイプである。外縁には中心の凹んだ環狀の珠紋を並べる。直徑は11.5cm。

なお、方山思遠寺と同時期に建てられた朝陽北塔下層「思燕佛圖」遺址から蓮華化生の塑像が出土しているという(董1996)。蓮華化生紋の瓦當を誤認した可能性があり、寫眞や圖の公表をまって検討したい。

瘦身型蓮華化生紋瓦當 大同市南郊の金屬鎂廠5號墓の例(圖14-6)を典型とする〔韓か1996〕。この瓦當は墓坑の埋土中より出土したもので、埋葬にともなうものではない。副葬品がないため、墓の年代も決めがたい。化生童子は兩手を胸前で合掌し、兩肘には背後から天衣がかかる。胸元には帯狀の胸飾をあらわす。蓮瓣はやや平板で、瓣端は丸みを帯

びている。蓮瓣の基部は、方山例と同様、輪郭線が繋がらず各蓮瓣が獨立するタイプである。外區に珠紋帯はなく、狭い外縁がわずかにたちあがる。大同市西北郊の鹿野苑石窟前で採集された蓮華化生紋瓦當は、これと同範であろう。

大同市操場城1號宮殿址でも瘦身型の蓮華化生紋瓦當が出土している〔山西省考古研究所ほか2005〕。2種の蓮華化生紋瓦當(圖14-7・8)は、いずれも瘦身型である。A型は化生童子の細部が明確に表現されておらず、わずかに両手を胸前で合掌する様子がわかる程度である。複瓣の蓮瓣は平板で、輪郭線と瓣央の稜線を明確な突線で表現し、瓣端はやや丸みを帯びている。蓮瓣の輪郭線は、基部のところでUターンして折るかえすタイプである。外區に珠紋帯はめぐらさない。外縁は狭く、短くたちあがる。いっぽうB型は、化生童子の頭部を缺くが、両手を胸前に合掌し、胸飾らしき表現がみえる。蓮瓣はやや平板で、瓣端は丸みを帯びている。蓮瓣の基部は、摩滅のため紋様が模糊として詳細はわからない。外區に珠紋帯をめぐらす。外縁はやや廣く、平坦で低い。

洛陽の永寧寺でも數種の蓮華化生紋瓦當(圖14-9)が出土している。報告者はこれらを珠紋帯の有無によってI型とII型に大別し、さらに前者を2式に細分している〔中國社會科學院考古研究所1996〕。いずれも瓦當中央に瘦身型の化生佛の上半身をあらわす。化生佛は胸前に両手を合掌し、胸元に飾りをつけ、兩肩から衣服が垂れている。複瓣の蓮瓣は長く、北魏末の様式を示している。外縁もこの時期の特徴をあらわして、平坦で幅廣い。

蓮華化生紋瓦當の變遷 方山の例は470年代末の思遠寺または480年代前半の永固陵の造營にともない、蓮華化生紋瓦當のなかではもっとも古い。後述のように、蓮華化生紋瓦當の創出にあたっては塑像製作工人が關與した可能性があり、同時期の塑像が豐滿で肉感を十分に表現していることと關連するのだろう。御河東岸寺院址の蓮華化生紋瓦當も方山例と酷似し、兩者の間にはあまり年代差がないと考えられる。内蒙古雲中古城の例は、蓮瓣の表現が大きく異なり、洛陽遷都前後まで下がる可能性があるだろう。

瘦身型の蓮華化生紋瓦當は、金屬鎡廠5號墓と鹿野苑石窟前の例が古い。これらは方山や御河東岸寺院址の例と類似しており、その影響下に製作されたと考えられる。その年代は明確でないが、さしあたり480年代末ごろに位置づけておきたい。

操場城1號宮殿址は、遺構や遺物をもとに5世紀代が大きく2時期に分けられる。報告〔山西省考古研究所ほか2005〕では明言されていないが、「萬歲富貴」や「大代萬歲」など文字瓦當が主體となる前期と、複瓣蓮華紋瓦當や獸面紋瓦當が用いられる後期とである。とくに後期の瓦當は491年造營の明堂出土例に近似し、洛陽遷都の直前に位置づけられる。蓮華化生紋瓦當は方山例を模倣したと考えられる金屬鎡廠5號墓の例より後出することは明らかで、複瓣蓮華紋瓦當や獸面紋瓦當と同時期に用いられたものだろう。ただし、蓮華化生紋瓦當の蓮瓣や外縁の形狀は、複瓣蓮華紋瓦當のそれとは異なっており、それぞれ別

系統の工人が製作した可能性が高い。

いっぽう洛陽永寧寺は516年の創建で、大同周邊の蓮華化生紋瓦當とは20年あまりの開きがある。蓮華のなかに化生童子ではなく化生佛をあらわし、その表現は面長で、中國式の衣服を身にまとっている。それは同時期の佛教造像の様式を反映したものである。このような瘦身型の蓮華化生紋瓦當が、大同周邊のそれを祖形としたものかどうかは明らかでない。とはいえ、方山例のような豊満な化生童子をあらわすものから瘦身型が分岐してくること、それは同時期の佛教造像の變化と軌を一にしていること、そして永寧寺の蓮華化生紋瓦當がその最後の段階に位置づけられることは確かであろう。

(2) 蓮華化生紋瓦當出現の背景

蓮華化生のモチーフは、瓦當紋様だけでなく、雲岡石窟の裝飾にも多見する。また、大同市湖東1號墓〔山西省大同市考古研究所2004〕から出土した金銅製の棺飾(圖15)のように、葬具のなかに蓮華化生の圖像を取り入れた例もある。その蓮華化生の圖像は前節にみた方山の瓦當紋様と近似し、出土した木棺の漆繪が484年の司馬金龍墓から出土した石柱礎や石棺牀の裝飾と共通することから、480年代の製作と考えられる。瓦當紋様と同様に、墓葬にも佛教美術の影響がおよんでいることは興味深い、それらが出現した背景をさぐるためには、石窟裝飾など佛教美術そのものについて検討する必要がある。

雲岡石窟の蓮華化生については、吉村怜〔1960〕が詳しく考察している。しかし、そこでは圖像のもつ意味が主要な論點であり、圖像の時間的な變化についてはほとんど言及されて



圖15 大同湖東1號墓出土銅製棺飾〔山西省大同市考古研究所2004:圖4〕

いない。そこで、雲岡石窟を中心に關連する蓮華化生の圖像を概觀し、蓮華化生が瓦當紋様に採用されたことの意味について考えてみたい。

雲岡石窟前期の蓮華化生 曇曜五窟の例として、第18洞の蓮華化生がある。第18洞の南壁西部下層には、交脚菩薩を中央に、半跏菩薩をその左右に配した龕があり、その楣拱額を四角く區切って飛天と蓮華化生を交互に並べている(圖16-1)。蓮華化生は、浮遊するかのよう



1 第18洞南壁西部下層交脚菩薩龕



2 第18洞南壁西部下層



3 第18洞東壁左脇佛天蓋



4 第18洞北壁本尊佛立像左手首

圖 16 雲岡石窟の蓮華化生（1）

1 第 18 洞南壁西部下層交脚菩薩龕（『雲岡石窟』第 12 卷：圖版 102），2 第 18 洞南壁西部下層（『雲岡石窟』第 12 卷：圖版 106），3 第 18 洞東壁左脇佛天蓋（『雲岡石窟』第 12 卷：圖版 109-A），4 第 18 洞北壁本尊佛立像左手首（『雲岡石窟』第 12 卷：圖版 121）

側視形の蓮華に、兩腕をゆるやかに曲げて合掌した化生童子の上半身をあらわす。その交脚菩薩龕のすぐ脇には、化生樹がある（同 2）。二叉に分かれた樹の先端に、瓣端がやわらかく反轉した側視蓮華をおき、その中央に合掌する化生童子を表現したものである。また、北壁にある本尊の佛立像は、體軀にまとった大衣の襞の間に小さな坐佛像を多數彫りだし、そのうち左手首の衣紋には蓮華化生の浮彫がある（同 4）。短い莖から生じた側視蓮

華の上に合掌する半身の化生童子をあらわしたものである。そのほか東壁にある左脇佛の天蓋には、四角く区切った框内に、飛天と蓮華化生を交互に配する(同3)。その配置や風格は、さきにみた南壁西部下層の交脚菩薩龕のそれと酷似する。西壁の右脇侍佛の天蓋も東壁のそれとまったく同じ構成である。第18洞の蓮華化生は、いずれも石窟造營の早い段階に彫刻されたものであり、雲岡石窟では460年代において蓮華化生のモチーフがすでに存在したことを示している。それらは、龕や天蓋の上框を区切った方形の区劃のなかに、空中を浮揚するかのような側視形の蓮華化生を飛天と交互にあらわすものが多く、ほかに化生樹や佛立像の大衣の襞にあらわされたものなどがある。

雲岡石窟中期の蓮華化生 中期には蓮華化生の圖像が多用され、なかでも第7洞の例が古い。主室南壁の最上層には通肩と偏袒右肩の坐佛が交互に並び、その坐佛列像の光背の間から化生童子が上半身をあらわしている(圖17-1)。蓮華は表現されないが、その丸顔で豊満な體つきは、胸前に蓮華の種子のようなものをささげもつこととあわせて、方山の蓮華化生紋瓦當を彷彿させる。また、主室南壁の拱門上部にあらわされた伎樂天の右肩すぐ横には、蓮華から頭部のみを出した化生蓮華をあらわしている(圖17-2)。

第9洞には、前室と主室の間をつらぬく明窓西壁の側に、大ぶりの側視形の蓮華から上半身を生じた蓮華化生の浮彫がある(圖17-3)。また、主室南壁第1層の拱額には、框を区切った方形の区劃に、飛天と蓮華化生を交互に配している(圖17-4)。側視形の蓮華から起こした上半身は、飛天と同様の天衣をまとい、頭部に圓光を負う。その表現は彫りが浅く、やや平板な印象をうける。

とくに蓮華化生の圖像が目立つのが第10洞である。主室南壁門口の楣部分にパルメット環状唐草紋を配し、唐草紋が連結する部分に立體的な蓮華化生をあらわす(圖18-1)。正視形の複瓣蓮華から上半身を起こした化生童子は、両手に大きな瓔珞をぶらさげる。

第16洞の開鑿は前期にさかのぼるが、その完成は中期末ごろである。南壁の東龕寶壇の供養者列中央に蓮華化生を配する(圖18-2)。側視形の蓮華から生じた上半身は天衣をまとい、両手で博山爐を支えている。供養者列の上の龕は第16洞開鑿當初のものと考えられているが、周囲の小龕は第5洞造營のころまで下がる可能性があり、この蓮華化生の浮彫も中期末に下るものだろう。

第5洞門口の天井には、瓦當の蓮華化生に類似した正視形の蓮華化生がある(圖18-3)。大型の複瓣蓮華の中房部分に、両手を胸前に合掌し、頭部に圓光を負う化生童子の上半身をおく。その表現は萎縮し、全體に平板な印象をうける。

第6洞では、中心柱の東面下層の拱額中央に、蓮華から上半身を生じた化生童子をあらわしている(圖18-4)。側視形の蓮華から生じた上半身に、大袖衣をまとう。頭髮は地髪を左右ふたつに分け、それぞれを頭上でまとめて雙髻をつくる。兩肘は屈曲して胸前で帷



1 第7洞主室南壁最上部



2 第7洞主室南壁拱門上部



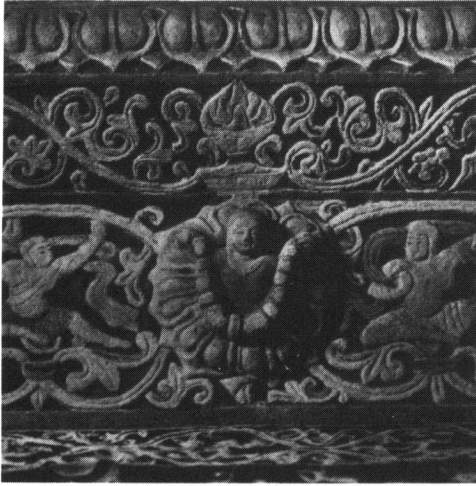
3 第9洞主室南壁



4 第9洞明窓西壁

圖17 雲岡石窟の蓮華化生(2)

1 第7洞主室南壁最上部(『雲岡石窟』第4卷:圖版92), 2 第7洞主室南壁拱門上部(『雲岡石窟』第4卷:圖版100), 3 第9洞主室南壁(『雲岡石窟』第6卷:圖版69-A), 4 第9洞明窓西壁(『雲岡石窟』第6卷:圖版39)



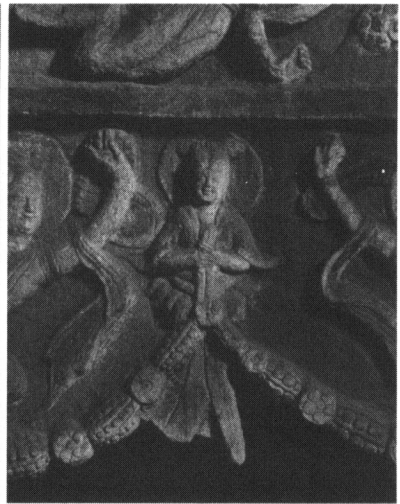
1 第10洞主室南壁



2 第16洞南壁東龕



3 第5洞門口天井



4 第6洞方柱東面下層

圖18 雲岡石窟の蓮華化生(3)

1 第10洞主室南壁(『雲岡石窟』第7卷:圖版47), 2 第16洞南壁東龕(『雲岡石窟』第11卷:圖版85-A), 3 第5洞門口天井(『雲岡石窟』第2卷:圖版17), 4 第6洞方柱東面下層(『雲岡石窟』第3卷:圖版147-B)

幕の瓔珞を支える。

蓮華化生の變遷 前期の第18洞と中期はじめの第7洞にみる蓮華化生は、素朴だが立體感に富んでいる。蓮華は空中を浮揚するかのよう蓮瓣が反轉し、そこから生じた上半身は裸形であらわされ、天衣をまとふことはない。方山の蓮華化生紋瓦當との関連で注意さ

れるのは、第7洞の化生である。その豊満な體つきは、胸前に蓮華の種子のようなものをささげもつこととあわせて、瓦當の蓮華化生を彷彿させる。第9・第10洞の時期になると、紋様表現が細くなるいっぽうで、彫りは浅く、やや平板な表現へと変わっている。蓮華の表現は定型化して動きがなくなり、化生の上半身には天衣をまとい、また背後に圓光を負うものが多くなる。また、第10洞では蓮華化生紋瓦當とよく似た正視形の蓮華化生が出現する。この正視形の蓮華化生は、第5洞の時期になると中央の化生が萎縮し、蓮瓣の表現がいっそう平板になる。このような変化は同時期の瓦當紋様と連動している。さらに、第6洞の蓮華化生は、中國式の衣服をまとい、頭髮は雙髻に結って、その風格は大きく変化している。蓮華化生紋瓦當の最終段階にある洛陽永寧寺の紋様が、このような佛教美術の中國化の流れをうけていることはいうまでもない。

このように、蓮華化生紋瓦當の出現と變遷は、雲岡石窟など同時期の佛教造像と軌を一にした変化をたどる。しかし、前項でみたように、方山の蓮華化生紋瓦當は輪郭線がつながらずに各蓮瓣が獨立するもので、漢代以來の傳統的な四葉紋(柿蒂紋)に類した雲岡石窟の複瓣蓮華紋とは異なっている。また、御河東岸寺院址や雲中古城、金屬鑄廠5號墓の蓮瓣が方山と同じタイプであることは、蓮華化生紋瓦當が同時期の佛教造像から影響をうけつつも、異なる意匠系統であったことを示している。このため、蓮華化生紋瓦當の出現と變遷を雲岡石窟からの影響のみで説明することはできない。方山の蓮華化生紋瓦當に類する蓮瓣として、炳靈寺石窟第169窟〔甘肅省文物工作隊ほか1986〕の西秦代にさかのぼる塑造の蓮華座がある。次項で述べるように、蓮華化生紋瓦當の創出には方山の塑像製作工人が關與した可能性があり、その塑像の様式は雲岡石窟と異なって西域の影響が顯著である。蓮華化生紋瓦當の蓮瓣についても、塑像と同様に西方からの影響をうけて製作された可能性があり、さらに視野を広げて検討する必要がある。

雲岡以西の蓮華化生 雲岡石窟以前における蓮華化生の存在はほとんど知られていない。しかし、甘肅省武威市の天梯山石窟〔宿1986/敦煌研究院ほか2000〕には、5世紀前半にさかのぼる蓮華化生のモチーフがある(圖19)。天梯山石窟は保存状態が悪く、壁畫や塑像の多くは現在に傳わらないが、第1窟と第4窟のふたつの中心柱窟では、最下層において北涼代と推定される壁畫が殘存する。そのうち第4窟中心柱の正面では、初層と第2層の間の框側面に、蓮華化生の彩色壁畫がある。ふたつに分かれた半パルメット唐草紋の間に側視形の蓮華を描き、蓮華の中央に化生童子の上半身をあらわす。化生童子は胸前で合掌し、背後から天衣がかかる。半パルメット唐草紋と蓮華化生の組みあわせはめずらしいが、個々の要素は雲岡石窟のモチーフとの影響關係がうかがえる。

河西地域では、ほかに金塔寺石窟の東窟にも蓮華化生の塑像がある〔甘肅省文物考古研究所1987〕。二重に重ねた複瓣蓮華の中央に、兩手を広げた化生童子の上半身をあらわすもの



圖19 天梯山石窟の蓮華化生〔敦煌研究院ほか2000：圖版46〕

である。また、敦煌莫高窟では第254窟・第257窟・第259窟など北魏代の中心柱窟に蓮華化生の壁画が多い。中心塔柱の側面に設けた佛龕の尖拱額に、側視形の蓮華から上半身をあらわした化生が多種多様の楽器を奏でるさまを描いている。ただ、これらの年代や雲岡石窟との影響関係については諸説〔宿1989/八木2000a〕があり、ここでは蓮華化生の圖像がある事実を指摘するにとどめておく。

蓮華化生の意匠は、西域南道のホータン地域において好まれたらしく、スタッコや陶器の装飾に多くみえる。スタッコには、二重に重ねた単瓣蓮華の中央に化生の半身をあらわしたもの(圖20-1・2)、複瓣蓮華の中央に禪定印を組んで結跏趺坐する通肩の如來坐像をあらわしたもの(同3)がある。前者に類似した蓮華化生の圖像は、陶甕にも用いられた(同4)。これらの年代を5世紀ごろとする説もあるが〔韓國國立中央博物館1989〕、その根拠は明らかではない。ただ、ホータンの蓮華化生の多くが、中房と蓮瓣との間に珠紋帯をあらわすことは注意される。雲岡石窟では連珠紋が多く用いられ、北魏代の複瓣蓮華紋瓦當や蓮華化生紋瓦當にも連珠紋はしばしば出現するからである。瓦當の外區に連珠紋をめぐらすことは北朝や隋唐以降の瓦當紋様に流行するが、中房と蓮瓣との間に珠紋帯をおく紋様構成は北魏洛陽遷都前後の複瓣蓮華紋瓦當に特徴的である。北魏の瓦當紋様における珠紋帯の採用は、蓮華化生や複瓣蓮華の圖像と密接な関連があったと考えられ、中房の周圍に連珠紋をおくという特徴的な配置とあわせて、西域からの影響がうかがえる。

雲岡以西における蓮華化生については、このように断片的な情報しか入手できないが、少なくとも天梯山石窟には雲岡石窟以前にさかのぼる蓮華化生の彩色壁画があり、雲岡の蓮華化生に影響を與えた可能性が考えられる。西域においては、年代は不確かであるが、ホータンに蓮華化生をあらわしたスタッコや陶器の装飾があり、それらが雲岡石窟の蓮華化生や同時期の蓮華化生紋瓦當に影響を及ぼした可能性があるだろう。



圖20 西域の蓮華化生
1・2 ホータン〔韓國國立中央博物館編 1989：圖版 47〕，3 カダリク〔大阪府立近つ
飛鳥博物館 2002：圖 78〕，4 ヨットカン〔熊谷 1953：圖 10〕

(3) 蓮華化生紋瓦當の技術的背景

雲岡石窟の「傳祚無窮」瓦當がそうであるように、北魏の文字瓦當の範には木製のものが多く、これにたいして方山の蓮華化生紋瓦當の範は、木目がまったく認められず、凹凸がはげしいことから、陶製の範を用いたと推測する。洛陽遷都の直前から流行する複瓣蓮華紋瓦當や獸面紋瓦當も、同様の理由から陶範を用いて製作したと考えられる。東魏・北齊や唐代の瓦當も同じである。北魏以前にさかのぼれば、漢代に陶範の出土例があるが、少なくとも5世紀の平城を中心とした地域では、おおむね木範から陶範への變化が推測で

き、方山の文字瓦當と蓮華化生紋瓦當はまさにその過渡的状況を示している。

方山の蓮華化生紋瓦當に關連して注意したいのは、製作に塑像工人が關與した可能性である。おもに線的表現からなる文字瓦當にたいして、蓮華化生紋瓦當は立體的な造形である。圖案の性格に大きな差異があるのはもとより、範の材質も異なっていたとすれば、兩者の範はまったく異なる工人が考案し、製作したと考えるのが自然である。次章で検討するように、方山で採集されている塑像は型づくりであり、その型は陶製であった可能性が高い。また、丸彫りに近いその風格も蓮華化生紋瓦當とよく似ている。これらのことは、塑像の製作工人が蓮華化生文瓦當の陶範製作に關與した可能性を示唆する。同じ型づくりの製品に陶俑があり、塑像の製作との間に影響關係があつた可能性がある〔八木 2000 b〕。次章で述べるように、北魏代における陶俑の製作技法の變化は、塑像の變化と軌を一にするところがあるからである。ただ、當該期の陶俑には、宋紹祖墓と司馬金龍墓の例がある程度で、陶俑の副葬はまだ一般化しておらず、また塑像についても類例が少ないため、その比較は今後の検討課題としておきたい。

(4) 複瓣蓮華紋瓦當と垂木先瓦

複瓣蓮華紋瓦當 方山では、蓮華化生紋瓦當のほかにも、少なくとも3種の複瓣蓮華紋瓦當が発見されている。A類は草堂山遺址の複瓣6葉蓮華紋瓦當 T 25 である。中房に1+6の蓮子を置き、一重の圈線をはさんで、周圍に大ぶりの蓮瓣を半肉彫りであらわす。外側は狭い周縁が短くたちあがる。復元径は14.4 cm。B類は、白佛臺遺址の複瓣8葉蓮華紋瓦當 T 8 で、同範の瓦當が草堂山遺址でも採集されている。ゆるやかに盛りあがる無紋の中房の周圍に一重の圈線をめぐらせ、外側に小型の複瓣式蓮瓣を突線で表現する。周縁は短くたちあがる。復元径12.4 cm とやや小型である。C類は、白佛臺遺址の複瓣蓮華紋瓦當 T 7 である。突線で蓮瓣の輪郭をあらわし、そのなかに2枚の子葉を表現するが、小片であるうえ、紋様が不鮮明なため、詳細は不明である。周縁は短くたちあがる。

A類は蓮瓣の形狀が491年創建の平城明堂や操場城1號宮殿址の複瓣蓮華文瓦當と類似するが、中房に蓮子をあらわすなど、洛陽遷都後の瓦當に多くみる新しい要素を備えている。B類は蓮子のない半球形の中房であるが、蓮瓣の表現は立體感に缺け、突線化が進んでいる點は新しい要素である。C類は紋様の全體が不明だが、蓮瓣を突線で表現するなど新しい要素を備えていることは明らかである。このように、方山の3種の複瓣蓮華文瓦當は、洛陽遷都後の瓦當に多くみる新しい要素を備えている。瓦當の周縁が短くたちあがるなど、文字瓦當や蓮華化生紋瓦當と共通する古い要素を備えているとはいえ、思遠寺や永固陵の造營にともなつて供給された瓦とは考えにくい。したがって、これらは文明太后の没した490年あるいはそれ以降に下るものであろう。

蓮華紋垂木先瓦の創作 方山では、蓮華化生紋瓦當のほか、複瓣蓮華紋の垂木先瓦が採集されている。白佛臺遺址（T16）と草堂山遺址（T27）の雙方にあるが、同範ではない。蓮華紋の垂木先瓦は、5世紀中葉までの西冊田遺址では出土せず、5世紀後葉になって創作された。雲岡石窟では、素瓣の石製垂木先瓦が東部臺上寺院址で出土し、その製作と使用は470年代にさかのぼる。しかし、複瓣蓮華紋が垂木先瓦のモチーフとして定着するのは、方山永固陵の造営以後である。平城遺址では、御河東岸の古城村に例がある。釘孔の周りにめぐらした方形突帯の外側に、小さな珠紋帯をあらわすものと、そうでないものがある。いずれも蓮瓣の形を整えるため、側面に削り調整をほどこす。雲岡石窟では第17洞前から出土した複瓣蓮華紋の垂木先瓦に大ぶりの連珠紋をあらわすものがあるが、古城村のものとはやや異なっている。また、西部臺上寺院址や西梁廢寺にも複瓣蓮華紋の垂木先瓦があるが、それらは側面の削り調整が不完全で、年代的にも後出する。このような垂木先瓦は、北魏洛陽城では出土せず、5世紀後葉の平城を中心とする地域においてのみ流行したのだろう。とくに複瓣蓮華紋の垂木先瓦には、連珠紋をめぐらすものが若干例あるとはいえ、蓮瓣の形態をみると、型式學的に大きな変化がなく、このことも製作が5世紀後葉の短い期間に限定されることと矛盾しない。

3 瓦の製作技法

洛陽遷都の直前に複瓣蓮華紋が北魏の瓦當紋様として定着する。その嚆矢となったのが方山の蓮華化生紋瓦當であり、それは北魏の瓦製作において劃期的な意義をもっている。ただし、方山で用いられた瓦當紋様は、洛陽遷都の前後から主體となる蓮華紋とはやや趣を異にしていたことにも留意する必要がある。これと同じ状況が丸瓦や平瓦の製作技法に看取できるからである。

押壓波状紋平瓦の製作技法 平瓦の廣端部を両側から指先でつまんで波状に装飾する技法は、方山において普遍的である。同時期の雲岡石窟や時期的に先行する西冊田遺址においても、同様の技法が存在する。それらはいずれも廣端部を指で強くつまむことによって凹面と凸面の両側に大きな凹みができ、端部はしばしば先細りになっている。指頭壓痕の1単位も大きく、素朴かつ粗雑な技法であった。これにたいして491年に造営された平城明堂では、同じように押壓波状紋平瓦を用いているが、その紋様単位は細かく、ていねいな押壓へと変化している。すなわち、明堂のそれは廣端部に連続した押壓施紋をするが、爪の先や工具を用いて端部の下顎のみに細かな凹みを形成し、對する凹面側には指先で支えた痕跡はあるものの、施紋を意識した明確な凹みは生じていない。平瓦の先端に1條の沈線を描きだして重弧紋をつくる手法も、洛陽遷都の直前にはじまっている。つまり、押壓波状紋平瓦の施紋技法に限ってみると、方山の瓦は西冊田遺址などで出土する5世紀中

葉までの瓦と大きく変わらない。そのいっぽうで、方山ではこの時期に新たに出現する技法や、方山だけにみられる特殊な技法も存在している。

黒色磨研と赤色磨研の瓦 白佛臺遺址と草堂山遺址では、研磨をほどこした瓦が数多く採集されている。灰色のものが多く、赤色の瓦も一定量混じっている。黒色磨研の瓦は丸瓦の筒部凸面と平瓦の凹面をていねいに研磨調整し、窯で燻し焼きしたものであり、『營造法式』にいう青棍瓦の祖形になるものであろう。方山には「萬歳富貴」瓦當の丸瓦部凸面に研磨調整をほどこすものがあり、思遠寺造營の段階からこのような瓦を用いていたらしい。しかし、まだ研磨が粗雑で、炭素の吸着も十分ではなく、技術的には未熟な段階にある。これらの技術がほぼ完成するのが洛陽遷都の直前で、491年造營の平城明堂で用いられた瓦は、器面に入念な研磨をほどこし、色調も暗灰色や青灰色を呈している。瓦當周縁を廣くつくり、そこにも研磨をほどこすようになる。洛陽遷都の直前に完成したこれらの技術は、そののち唐代まで継承されている。

これにたいして赤色磨研の瓦(圖21)は、方山以外の遺址ではほとんど例をみない。その製作技法は、研磨調整後に赤い顔料を塗布して焼成しており、研磨と燻しによる黒色磨研瓦とは手法が異なる。雲岡石窟にも赤く焼成された瓦が少量あるが、これに研磨や顔料の塗布といった工程は確認できない。雲岡石窟と方山には「傳祚無窮」瓦當の同范関係があり、両者の造營に一定の関係性があったことは確かである。しかし、雲岡石窟には研磨をほどこした瓦が少なく、技術的な関連はあまり認められない。

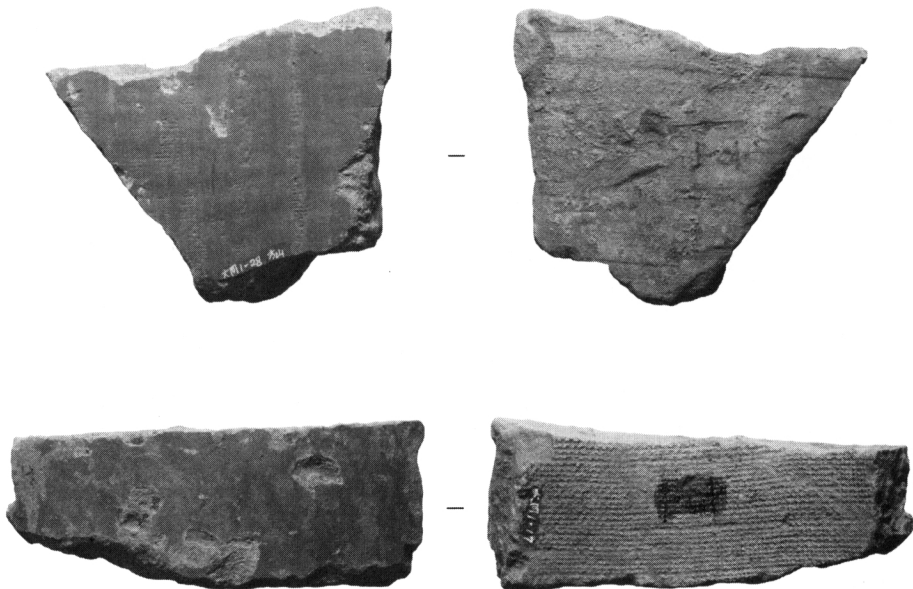


圖21 方山の赤色磨研瓦

方山に特有の瓦製作技法はほかにもある。それは平瓦凸面の狭端近くに装飾をほどこすもので、第2章に報告した平行沈線(T28)のほか、楕描き波状紋や鋸齒紋などがある。これらの装飾技法は北魏の5世紀代の土器と共通するもので、研磨技法とあわせて瓦製作に應用したのだろう。ただ、このような装飾をもつ平瓦は、方山においても出土量が限られ、ほかの遺址ではほとんど出土していない。

第5章 方山出土塑像の様式と年代

方山で採集された塑像は、小片ばかりで数が少なく、全體を復元できるものはない。しかし、一部の石窟寺院をのぞいて、中國ではこれより古い塑像は知られていないから、佛教造像史における重要性はけっして小さくないだろう。ここでは、関連する資料と比較しながら塑像の構成や製作技法について素描してみたい。

1 方山出土の塑像

塑像の構成 方山出土の塑像は、現在ある資料による限り、如來像と菩薩像を中心に構成され、またその大きさも小さなものがほとんどである。如來像には、通肩式に大衣をまとう頸部片 T 31、偏袒右肩に大衣をまとう胸部片 T 32、結跏趺坐した脚部片 T 33・34 があり、北京大學所藏資料には如來頭部片〔出光美術館 1995：圖版 118-g〕もある。菩薩像には、三面寶冠を戴いた頭部片 T 36、帶狀胸飾をつけて蓮莖を手にとる體部片 T 37、裳を身につけた腰部片 T 39 などがある。破片の大きさから推定すると、全高は 30 cm ほどに復元できる。いずれの破片も背面が残存しないが、小型の塑像であることや大同市博物館による草堂山遺址の發掘調査〔胡ほか 2004〕では中心塔柱の周邊から塑像が多く出土していること、洛陽永寧寺遺址では中心塔柱の柱間ごとに日干し煉瓦で構築した龕があったことを考えると、これらの塑像は中心塔柱の四壁の佛龕に貼りつけた可能性が高い。なお、大同市博物館には、これらとほぼ同じ大きさの塑像だけでなく、等身大よりやや小さい手首の塑像片が保管されており、佛菩薩像を中心とする小型の塑像のほかに、大型の塑像も同時に製作されたことがわかる。

塑像の製作技法 方山の塑像は、いずれも型づくりで成形する。型から抜いたあとの細部調整はあまり目立たない。第2章で報告したように、大きさや細部の特徴の類似から、同じ型を用いて製作したと考えられる塑像が2組ある(圖22)。東亞考古學會が採集した塑像のうち、大衣を通肩にまとう頸部片 T 31 は、北京大學サックラー考古藝術博物館所藏品〔出光美術館編 1995：圖版 118-h〕と同範である。また、右肘を屈曲した菩薩像の胸部片 T 38 も、やはり同博物館所藏品〔同：圖版 118-j〕と同範であろう。東亞考古學會の塑像はすべて



圖 22 同範の塑像

1・3 東京大學考古學研究室所藏，2・4 北京大學所藏〔出光美術館編 1995：圖版 118-h・j〕

白佛臺遺址での採集であり，北京大學の所藏品はすべて草堂山遺址で採集したものである。この 2 組の塑像の同範関係は，第 3 章に検討したように，白佛臺遺址と草堂山遺址が，同時期に造營された一連の佛教寺院であったことを示すものだろう。

成形に際し，内部に木芯を入れるなどの工程があるが，きわめて簡単なものである。たとえば，菩薩頭部の破片 T 35 は断面に木芯の痕跡があり，木目が明瞭である（圖 23 上）。木芯に直接粘土を貼りつけたらしく，芯に布などを巻きつける工程は介在していない。また，菩薩像の胴部片 T 37 をみると，頸部に平たい籠状の木芯を用いた痕跡がある（圖 23 中）。これも木目が残ることから，同様に木芯をそのまま用いたことがわかる。同じ破片の右肩には丸い小孔がある。ここに鐵芯を差しこみ，粘土を巻きつけて蓮莖を表現したらしい。偏袒右肩の如來像胴部片 T 32 にも，頸部に芯の痕跡がある（圖 23 下）。孔の深さは 3 cm あまりで，孔の徑も小さいことから，竹ひごぐらいの太さの芯を用いた可能性が高く，

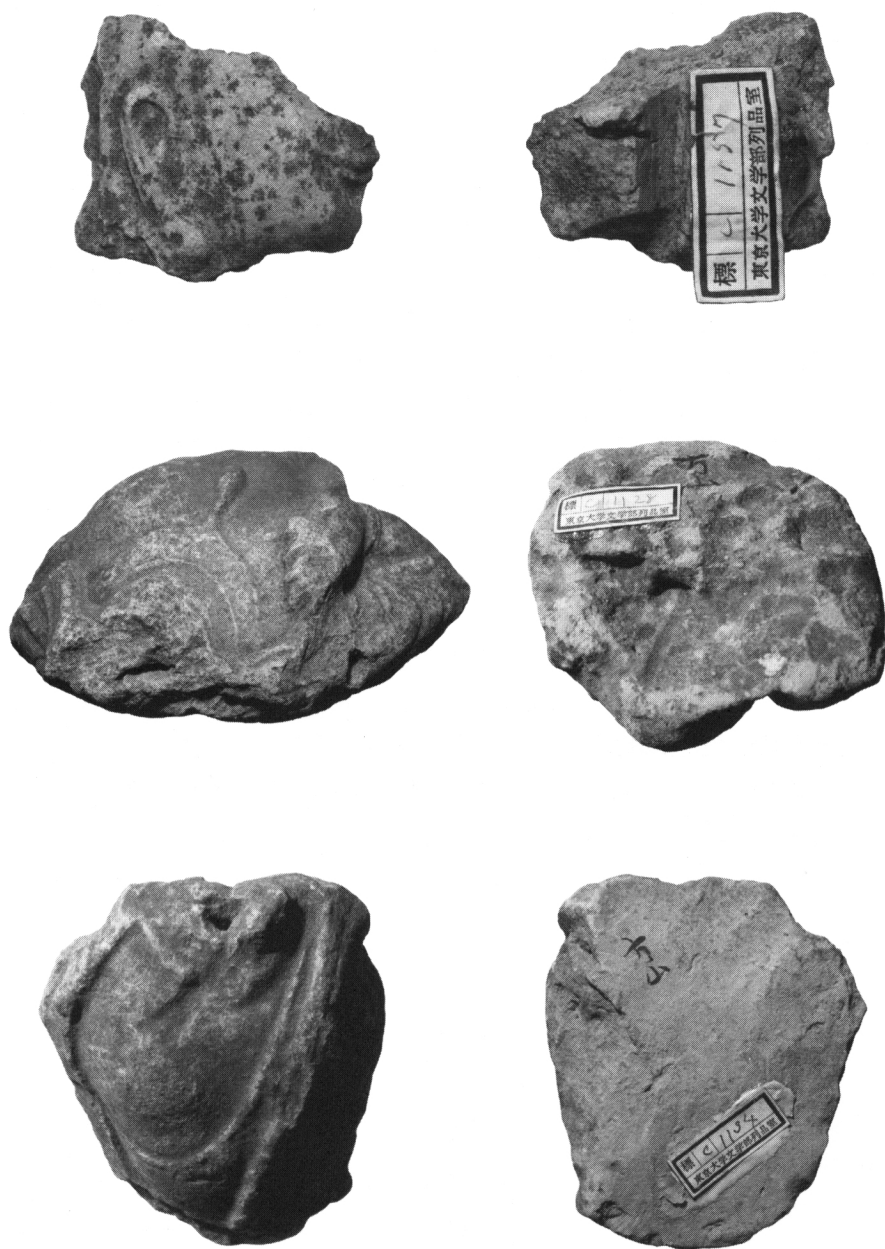


圖 23 方山出土塑像の製作技法

その役割も胴部と頭部との接続を強化する程度だろう。なお、T 32 の裏面は撫で調整により平滑な面をなしており、粘土を型に詰めて成形する工程で生じた痕跡であろう。

このようないくつかの例は胴部から頸部をへて頭部まで木芯を通してのものの、その木芯はいずれも貧弱なもので、塑像の骨格をなすような頑強なものではない。胎土をみると、ごく細かい砂を少量加えたものがあるが、総じて精細な粘土を用い、内外層の区別がない。また、粘土にスサを混ぜることもない。おそらく像そのものが小さく、中心塔柱の佛龕に貼りつけて固定するものであったため、しっかりとした太い芯を必要とせず、均質な粘土を型に入れて一気に成形したのでだろう。ただし、塑像の固定方法は明らかでない。T 33 や T 34 の如來坐像の脚部は底面に平らな面をもつが、平らな臺座や龕の上に置いただけなのか、あるいは固定のための芯が別にあったのかは不明である。いっぽう京大人文研の塑像 K 49 は、背面が平らな面をなし、そこに布の痕跡がある。これはほかの個體には確認できず、貼りつける場所に差異があったのかもしれない。

成形した塑像は、最後に顔料を塗って仕上げている。T 33・34 の如來脚部や T 37・39 の菩薩塑像には、表面に赤褐色や暗赤色の顔料が残存している。本来は赤色のほかにも着色があったのだろうが、すでに脱落して確認できない。

2 北魏寺院址出土塑像の比較

朝陽北塔下層遺址 前章に述べたように、朝陽北塔では現在ある軀塔の下層に木塔基壇の遺構が確認され、文明太后が發願した「思燕佛圖」にあてる説が有力である。1993～1995年に實施された基壇とその周辺の發掘調査〔董1996〕では、瓦などの建築材料に混じって塑像（圖24）が多數出土している。方山出土塑像とは年代が近似するだけでなく、ともに當時の権力者であった文明太后の發願という密接な関係にある。塑像には、大衣を通肩や偏袒右肩にまとった如來像と菩薩像のほか、飛天、金翅鳥、獸首などがあるという。豊満な顔立ちは方山の塑像とも類似するが、細部の表現はやや粗い。高さは坐像で



圖24 朝陽北塔下層遺址出土塑像〔曾布川・岡田編2000：圖171〕

25 cm あまり、立像で 30 cm ほどで、方山の例とほぼ同じである。いずれも型づくりで成形し、體部から頭部まで全體を一氣に成形したらしい。芯の有無は明らかでないが、堅固な芯木を用いていた様子はない。調査では木塔基壇の中央に中心塔柱が確認され、その四面に設けた佛龕内に塑像を貼りつけたと推定している。

內蒙古固陽縣北魏城址 內蒙古自治區包頭市固陽縣の北魏城址からも類似的の塑像が出土している。大同市の西北およそ 280 km に位置する。調査概報〔內蒙古文物工作隊ほか 1984〕によると、城郭の西北隅に北壁と西壁を共有する子城があり、内部には瓦や礎石などの散布が認められた。とくに子城の東南隅には、直径 15 m、高さ 2 m ほどの圓丘状の高まりがあり、建築基址と推定された。その東半部にトレンチを設定して發掘したところ、日干し煉瓦を積み重ねた須彌壇状の基壇を検出した。その壁面には漆喰を塗って人物壁畫を描き、塑像はその周圍から出土したという。

出土した塑像片は全部で 36 點ある（圖 25）。完形品はなく、頭部と胴部の破片が多い。頭部の破片には丸顔に近いものとやや面長のものがあるが、いずれもふっくらとした顔つきである。頭頂に盛りあがる肉髻をあらわすものや、髪を寶髻に結って寶冠を戴くもの、髪飾りをつけるものなどがある。體部の破片は、衣服を通肩にまとうものがほとんどで、胸前に両手を合掌するものや、蓮蕾などの持物をとるものがある。これらは型を用いて成形しており、型から抜き取った後、背面を十分に調整していないことから、壁面に貼りつけて群像を構成したと推定されている。頭に肉髻をあらわす如來、寶冠を戴く菩薩のほか、髪を寶髻に結って髪飾りをつけるものは伎樂天や供養天と推定されている。

古城内の別の調査區では、蓮華紋の瓦當や三角形の蓮華紋軀が出土している。連珠紋帯をもつ複瓣蓮華紋瓦當や同じモチーフの三角形軀は、洛陽遷都の直前に位置づけられる。瓦當には瓣端が細く尖った單瓣蓮華紋を飾るものが數點あり、これらは北魏末ごろに下るものであるから、城郭が北魏末まで使用されたことは明らかである。塑像を出土した基壇



圖 25 內蒙古自治區固陽縣出土塑像 縮尺 1/4〔內蒙古文物工作隊ほか 1984：圖 6〕

附近では瓦當が出土しておらず、建物の造營と廢絶の時期はわからない。ただ、塑像の特徴は方山や朝陽北塔の例とよく似ており、洛陽遷都前の製作と考えられる。城内のほかの地点で出土・採集した遺物にも、洛陽遷都直前のものが少なくないことを考えあわせると、塑像を出土した建物もまたそのころの造營だろう。

洛陽永寧寺址 洛陽永寧寺址〔中國社會科學院考古研究所 1996〕から出土した塑像（圖 26）は、大きさも構成も多様である。大きさには大・中・小の別があり、如來・菩薩・比丘・供養者など多様な構成である。大型の塑像は佛龕の主尊像に相當し、周圍に中型塑像を脇侍と



圖 26 洛陽永寧寺出土塑像〔中國社會科學院考古研究所 1996：彩版 12-1・13-3・16-3・21-2・28-1〕

して配したのだろう。小型の塑像には俗形のものが多く、龕の内外や壁面を荘嚴したと考えられる。これらの塑像は、瓔珞などの一部をのぞいて、原則として型を用いず、手づくねで成形している。木芯や葉束などを骨格とし、内側から順にスサ混じりの粗い土、やや細かい土を重ね、表面はきめの細かい粘土で仕上げる。塑像の大小にかかわらず、頭部と胴部以下とを別々につくったのち、胸腔部にもうけた浅いくぼみに頸部の末端を挿しこむという手順をとる。たとえば中型塑像の頭部には、頸部から断面圓形や多角形の孔が通じており、孔内面の観察から、芯木の周囲に麻紐などを螺旋状に巻いたものがあることが知られる。小型塑像や情景塑像も、やはり頭部に小さな孔をもつことが多く、割り竹ぐらゐの細い芯を用いて頭部を固定したらしい。また、體部については、木芯の周囲に藁を束ねて大まかな骨格をつくり、その周囲に粘土を貼りつけて成形した。ただ、情景塑像のばあい、像の底部に鐵芯が残存する例があるものの、體部の骨格を形成するほどの堅固な芯ではなく、その主要な役割は像を臺座や壁面に固定することにあつたとみてよい。

北魏寺院址出土塑像の變遷 以上の事例から、5世紀後葉から6世紀前葉における塑像の大まかな變化を知ることができる。方山・朝陽北塔・内蒙古固陽縣の塑像は、年代的にも様式的にも近い關係にある。いっぽう516年創建の洛陽永寧寺から出土した塑像は、製作技法や美術様式のうえで大きな差異がある。製作工程をみると、方山や朝陽北塔などの塑像がいずれも型を用いて成形するのにたいして、洛陽永寧寺の例は基本的に手づくねで成形する。前者が體部と頭部を一體で成形するのにたいし、後者は別づくりの頭部を體部に挿しこんでいる。體部と頭部を分割して成形する技法は、同時期の北魏墓から出土する陶俑の製作技法にもみえる。いっぽう方山と同時期の司馬金龍墓から出土した綠釉の陶俑は、方山の塑像と同じく體部と頭部を一體で成形している。このように陶俑においても、頭部と體部を一體で成形するものから分割して成形するものへと並行する變化がうかがえる。陶俑が一貫して型づくりであるのにたいして、永寧寺の塑像は手づくねで製作し、兩者の性格も大きく異なっているが、成形技法の變遷には共通點があつたのである。

また、塑像内部の芯について比較すると、方山など5世紀後葉の塑像は、ごく細い芯を體部から頭部に通すのみで、骨格を構成するようなしっかりした芯は用いない。小型であること、群像を構成すること、型づくりであることなどがその原因であろう。これにたいして永寧寺の塑像は、群像を構成するような小型の塑像は壁面や臺座に固定するためのごく簡素な芯をもつ程度であるが、大型や中型の塑像では、木材の周囲に藁を束ねたものを芯とし、その周りにスサ混じりの粗い土や細かい土を重ね、表面をきめの細かい粘土で仕上げている。このような手法は、永靖炳靈寺石窟・天水麥積山石窟・敦煌莫高窟など5～6世紀の塑像と共通する。

塑像の構成をみると、方山など5世紀後葉の例は、基本的に通肩や偏袒右肩の如來と菩

薩を中心に、天人などをまじえた単純な構成で、小型の塑像を主體とする。これにたいして6世紀前葉の洛陽永寧寺では、如來・菩薩・比丘・供養者などがあり、とくに供養者の服装や表情はじつに多様である。主尊像の大型塑像や脇侍の中型塑像は如來や菩薩を中心として構成された可能性が高いが、群像を構成した小型の塑像は俗形のもものがほとんどである。すなわち、5世紀後葉には如來や菩薩の小型塑像が多数を占めたのにたいし、6世紀前葉には如來と菩薩をあらわした大型・中型塑像に小型の塑像が付随する構成に變化したといえるだろう。

3 方山出土塑像の様式

方山の塑像には、中國式の着衣はまったくみられず、西方式の服制で統一されている。如來は大衣を通肩にまとうものや、大衣と僧祇支を偏袒右肩に着けるものがある。菩薩は、上半身は裸形で腕に天衣をかけ、下半身に裳をまとう。頭には寶冠を戴き、胸元に帶狀の胸飾、手首に腕釧をつける。朝陽北塔下層遺址や内蒙古固陽縣の塑像も、同様に中國式の服制はみられず、方山の塑像ほど洗練されていないとはいえ、様式的には類似性が強く、西域の塑像を彷彿させる。ただ、現在までのところ、これらの菩薩や天人の衣服には通肩や偏袒右肩の例しかなく、上半身を裸形としたものは報告されていない。方山から塑像が伝えられた段階で、菩薩像の着衣に變化が生じた可能性はあるだろう。

いっぽう、方山の塑像を雲岡石窟の造像様式と比較すると、第7・第8洞や第9・第10洞のそれと共通する特徴がある。第2章で指摘したように、菩薩の三面寶冠 T 36 の類例は、雲岡石窟第8洞主室の北壁上段龕にある半跏思惟像に求められる。方山例が圓形立飾から連珠裝飾を左右に垂下させるのにたいし、第8洞の例は紐狀の裝飾をあらわしている。また、第12洞前室東龕の半跏思惟像の頭上にある三面寶冠は、圓形立飾の中央から連珠裝飾を垂下させる點で方山の塑像に近い。ただ、このような寶冠が、當時の雲岡石窟で用いられていた三面寶冠とやや異なることは注意すべきである。曇曜五窟や第7・第8洞、第9・第10洞に多くみる三面寶冠は、圓形立飾の間にパルメット裝飾をおくもので、方山の例と同じタイプのものは少ない。

このように、雲岡石窟の彫像と方山の塑像は、大局的には同一の様式に屬するが、細部の相違點は少なくない。それは、材質や製作技法、大きさのちがいに由來する作風の差異だけにとどまらない。たとえば、方山の菩薩塑像 T 37 は上半身が裸形で、天衣のみをまとうのにたいして、雲岡石窟の菩薩や天人像は天衣のほかに左肩から條帛を懸け、胸前に璽珞を交差させるのが一般的である。このような差異は、設計者や工人の系統差に由來するものであろう。さきにみた菩薩塑像 T 36 の三面寶冠は、河北省曲陽縣の修德寺出土と傳えられる雲岡期の灰色砂岩製菩薩像〔楊伯達 1985：挿圖3〕の寶冠と同形式であり、類例は

天水麥積山石窟の菩薩塑像〔天水麥積山石窟藝術研究所 1987〕にもある。いっぽう、方山の三面寶冠が圓形立飾から左右に垂下させる連珠裝飾は、ガンダーラの冠飾や髮飾に多くみる連珠紐の飾り方とよく似ている。キジル石窟をはじめ西域でも、連珠裝飾は寶冠の飾りとして流行したが、圓形立飾から連珠紐を垂下させるものはほとんどない。したがって、T 36 のような寶冠が方山に伝えられた経緯は明らかにしえないが、これが西方に由來する寶冠の一種を忠實に表現したものである可能性は高いだろう。

方山における塑像の製作にあたっては、材質や製作技法のちがいが、雲岡石窟の工人が直接關與することはなかったはずである。雲岡石窟の諸像に比べて、方山の塑像が西域塑像の趣きを色濃くとどめ、佛塔の壁面に貼りつける手法においても西域のそれと類似することを考えると、方山の塑像製作にあたった設計者や工人は西方の情報に精通した人たちであったのだろう。當時、平城の周邊では未知であった塑像の製作にあたって、塑像の技術が定着していた長安以西から工人を呼び寄せた可能性は十分にある。それが雲岡石窟と方山との様式的差異を生み出す一因となったと考えておきたい。

第 6 章 方山出土石彫の様式と年代

東亞考古學會の収集した石彫は 4 點あり、『雲岡石窟』遺物篇に報告した京大の石彫をあわせると 6 點になる。そのうち K 50・K 51・T 40～T 42 は白佛臺遺址の出土で、T 43 だけが草堂山遺址の採集品である。本章ではその圖像と裝飾紋様について考察する。

1 パルメット唐草紋

『雲岡石窟』遺物篇に報告した方山白佛臺遺址の K 50 はパルメット環狀唐草紋をほどこし、東亞考古學會が同遺址で採集した T 42 は半パルメット波狀唐草紋をもつ石彫である(圖 27)。雲岡石窟において、蓮華紋について多く用いられた裝飾紋様がパルメット唐草紋である。おもに壁面を區劃する紋様帶として用いられ、環狀紋、波狀紋、竝列紋の 3 形式に大別される。『雲岡石窟』第 6 卷 50 頁は、パルメット唐草紋の基本形式は第 7・第 8 洞



圖 27 方山白佛臺遺址のパルメット唐草紋(復元) 縮尺 1/2

に存在し、大がらで刀法の鋭い浮彫りをもつのにたいして、第9・第10洞のそれは平面的で豊かな特色があると指摘する。ここでは例の多い雲岡石窟のパルメット唐草紋を型式學的に検討し、方山のそれと比較してみよう。

波状唐草紋の分類 『雲岡石窟』第5巻35頁では雲岡石窟第7・第8洞の波状唐草紋を2形式に分けており、ここでは方山のT42と同じ「半パルメット波状紋1」を分析する(圖28)。第7・第8洞のそれは、すべて横位で、莖の波形がやや長く、莖から枝分かれした3葉の半パルメットにはV字形の鋭い刻みをもつ。莖には1條または2條の細線をいれ、結節帯は目立たない。これをA型とする。第9・第10洞になると、龕柱に縦位にほどこしたもののや山と谷の部分に禽獸を配したものが出現する。すなわち、波形が短く、莖から枝分かれした半パルメットがやや粗雑なB型、莖の波形が長く、山と谷の部分にパルメットと禽獸を配したX型がある。B型の半パルメットはA型の3葉に小さな1葉が加えられ、以後の基本形となる。X型は禽獸に比べてパルメットが目立たない。C型としたのは、紋

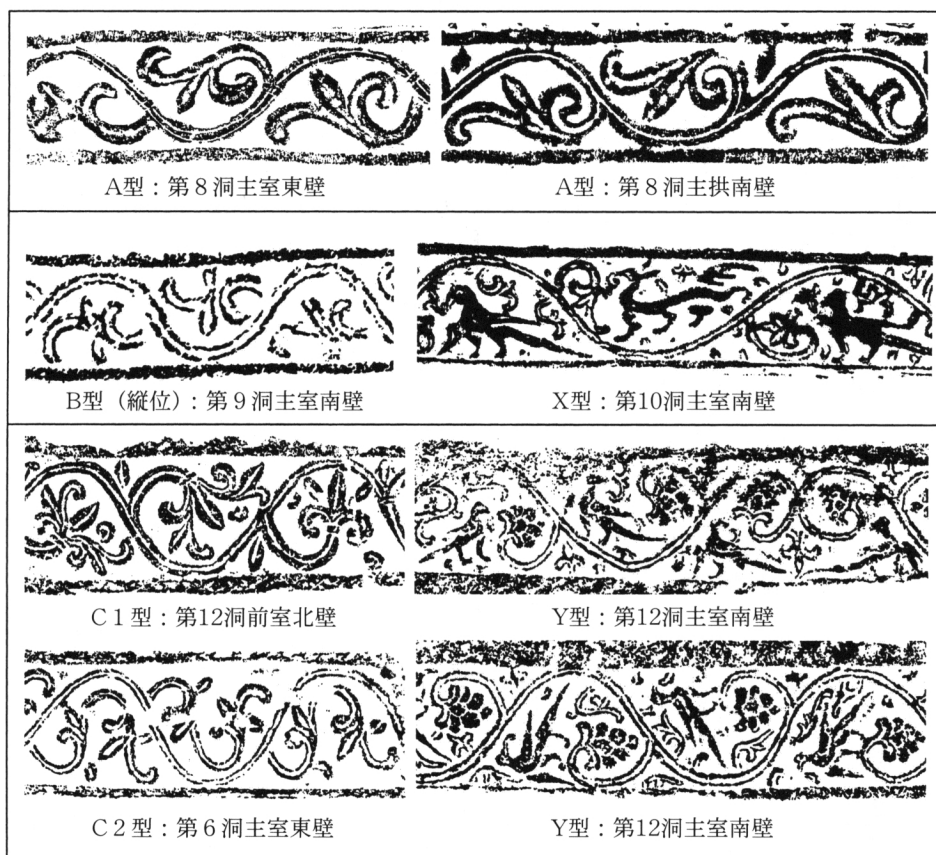


圖28 雲岡石窟における波状唐草紋の分類（〔水野・長廣 1951～1956〕をもとに岡村作成）

様帯の幅が廣くなり、莖からのびた半パルメットや全パルメットが山と谷をうめたものである。すべて横位である。第12洞のC1型は、パルメットの葉肉が厚めで、結節帯をもち、莖との枝分かれ部にも小さな葉をつけている。第6洞のC2型は、B型を継承した形で、半パルメット2組を連ねてS字形をなしたものの。C1型とC2型との先後関係は、紋様型式からは決められない。禽獸を配したY型は、パルメットが葡萄の房状に大きくなったもの。X型の紋様帯が廣くなり、躍動的な禽獸と豊麗なパルメットに發達している。このように波狀唐草紋は、A型→B型→C型という系列と、B型と同時に禽獸を配したX型が出現し、Y型へと裝飾化の方向に進化する系列とがあった。

パルメット唐草紋の5段階 波狀唐草紋の分類をふまえて雲岡石窟における各種のパルメット唐草紋を5段階に編年する(圖29)。

第1段階の指標となるのは、造營初期の曇曜五窟の例である。第17洞・第19洞・第20洞では佛像の光背外周にそって竝列唐草紋をめぐらせている。中心に向かって對稱的に半パルメットを竝列させた紋様で、火焰をあらわしたのであろう。竝列唐草紋の形は第5段階まであまり變化しないが、第2・第3段階には横位の紋様帯に用いられている。第1段階のパルメット唐草紋はほかに例が少なく、第19洞・第20洞本尊佛像の胸襟飾りに環狀唐草紋がみられるだけである。第19洞のそれは縦つなぎ紋と横つなぎ紋の兩種の紋様帯を竝列させている。縦つなぎ環狀唐草紋の形は、第3段階の第9洞の例と大差ないが、横つなぎ環狀唐草紋は、凸帯表現の環が横つなぎになり、それぞれの環内に逆向きのパルメット環をいれた特異な形である。第1段階には波狀唐草紋は用いられていない。

第2段階の指標となるのは、第7・第8洞のA型波狀唐草紋である。佛像光背の紋様帯が減少し、壁面を横位に區劃する紋様帯が出現する。とくに波狀唐草紋と竝列唐草紋が多く、第1段階より多様化する。半パルメット波狀紋には2種があり、莖から半パルメットが枝分かれする上述の「半パルメット波狀紋1(『雲岡石窟』第5卷35頁)」と、波狀の半パルメットが連続する「半パルメット波狀紋2(同)」とがある。半パルメット竝列紋にも圖29のような2種がある。圖の上の例は第1段階を継承した形、圖の下は3葉の半パルメットを横に竝列した形である。形と刀法のいずれも生動的である。

第3段階の指標となるのは、第9・第10洞のB型・X型波狀紋である。龕柱や拱門を縦位に裝飾することがはじまり、天人や禽獸を配した環狀紋が出現する。第2段階との様式差はいちじるしく、バリエーションが豊富になり、パルメット唐草紋の高潮期である。環狀唐草紋には内側に1葉だけのもの、3葉のもの、全パルメットのものがある。環の形は多様で、六角形の環が出現している。その反面、第2段階に盛行した波狀唐草紋や竝列唐草紋は副次的な位置におかれ、竝列唐草紋は第2段階よりも硬直化している。

第4段階の指標となるのは、第6洞や第12洞のC型・Y型波狀紋である。2組の半パ

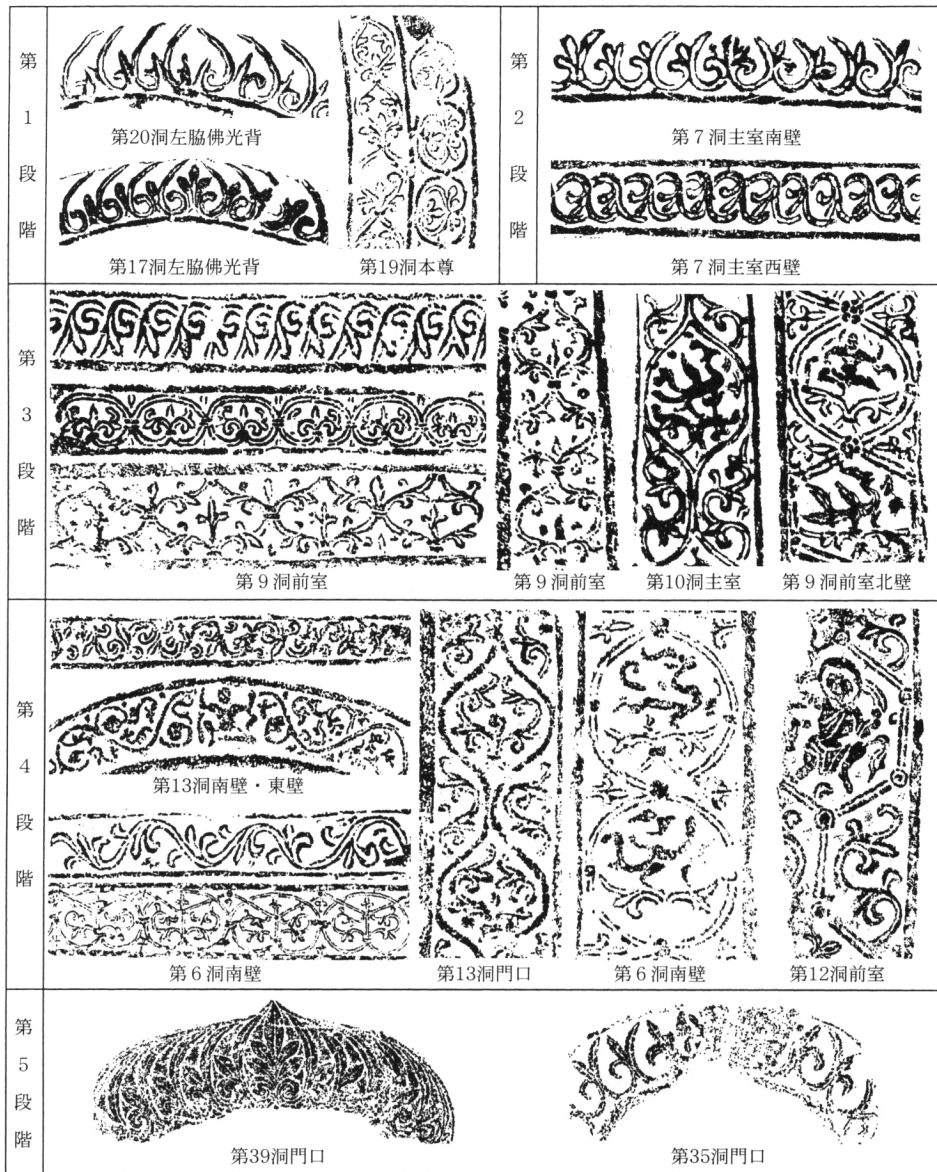


圖29 雲岡石窟におけるパルメット唐草紋の編年（〔水野・長廣 1951～1956〕をもとに岡村作成）

ルメットを連ねてS字形をなした紋様を特徴とする。環状唐草紋を中心とする第3段階の傾向がそのまま繼續し、天人や禽獸を配した紋様、圓環に六角形の環を組みあわせた紋様もみられる。第3段階との様式差は小さい。

第5段階になると、雲岡石窟からパルメット唐草紋が急速に消失する。洛陽遷都後に造營された西方諸洞の時期である。第35洞と第39洞の門口にほどこされた竝列唐草紋で、

紋様表現は兩者でやや異なるが、第1段階の佛像光背にみられた形がほとんどそのまま繼承されている。

パルメット唐草紋の編年 方山永固陵は481年から484年にかけて造営された。『雲岡石窟』遺物篇では、白佛臺遺址から出土した石彫K50をとりあげ、そのパルメット環状唐草紋が第7・第8洞の刀法に近いものの、それを縦位に變えたところは第9・第10洞と同じであることから、兩雙洞の間間的な紋様と考えた。つまり、唐草紋の第2段階と第3段階の間に位置づけたのである。これを補強するのが、東亞考古學會が同遺址で採集した石彫T42である。それは横位に配置した半パルメット波状唐草紋であり、3葉の半パルメットである點はA型の特徴だが、莖の波形が短く、紋様の彫刻が平板で浅い點はB型に近い。半パルメットと莖の形にのびやかな勢いが無い點もB型の特徴である。したがって、方山永固陵の造営された481年から484年のころが、ちょうど唐草紋の第2段階と第3段階の過渡期にあたると思われる。

いっぽう484年の大同市司馬金龍墓〔山西省大同市博物館ほか1972〕から出土した石棺牀と礎石にもパルメット唐草紋がある(圖30)。石棺牀の側面は3段に紋様帯が分かれ、幅の狭い上下段には半パルメット波状唐草紋、幅の廣い中段には天人と禽獸を配した波状唐草紋がある。半パルメット波状唐草紋は、莖の波形がやや長く、莖に2條の細線をいれる點がA型に近いのにたいして、小さな1葉を加えた半パルメットはB型の特徴である。中段の波状唐草紋と礎石側面には天人などの圖像を配し、礎石には波状唐草紋と横つなぎ環状唐草紋の兩方がある。その精細な表現を雲岡石窟と對比することはむずかしいが、パルメット唐草紋の形は、波状唐草紋のA型よりもX型やC1型に類似する。雲岡石窟では唐草紋の第3・第4段階に天人や禽獸を配することが盛行していた。したがって、司馬金龍墓は唐草紋の第3段階もしくはその直前に位置づけるのが妥當であろう。

また、477年の大同市宋紹祖墓〔山西省考古研究所ほか2001〕の石棺牀には、『雲岡石窟』第5卷35頁にいう「半パルメット波状紋2」がある。報告の寫眞が小さく不鮮明なため確實ではないが、第2段階の第7・第8洞の例に類似する。

雲岡石窟におけるパルメット唐草紋は、第2段階と第3段階との間に様式的な懸隔が認められたが、ちょうどその間に實年代のわかる方山永固陵と司馬金龍墓が位置づけられることが判明した。その編年はつぎのようにまとめられる。

雲岡石窟第7・第8洞→方山永固陵→司馬金龍墓→雲岡石窟第9・第10洞
 (唐草紋第2段階) (481～484) (484) (唐草紋第3段階)

これをもとに雲岡石窟の實年代は、唐草紋の第1段階は曇曜五窟の造営された460年代、第2段階は第7・第8洞の470年代、第3段階は第9・第10洞の480年代後半、第4段階は洛陽遷都前の490年代前半、第5段階は490年代後半以降に位置づける。

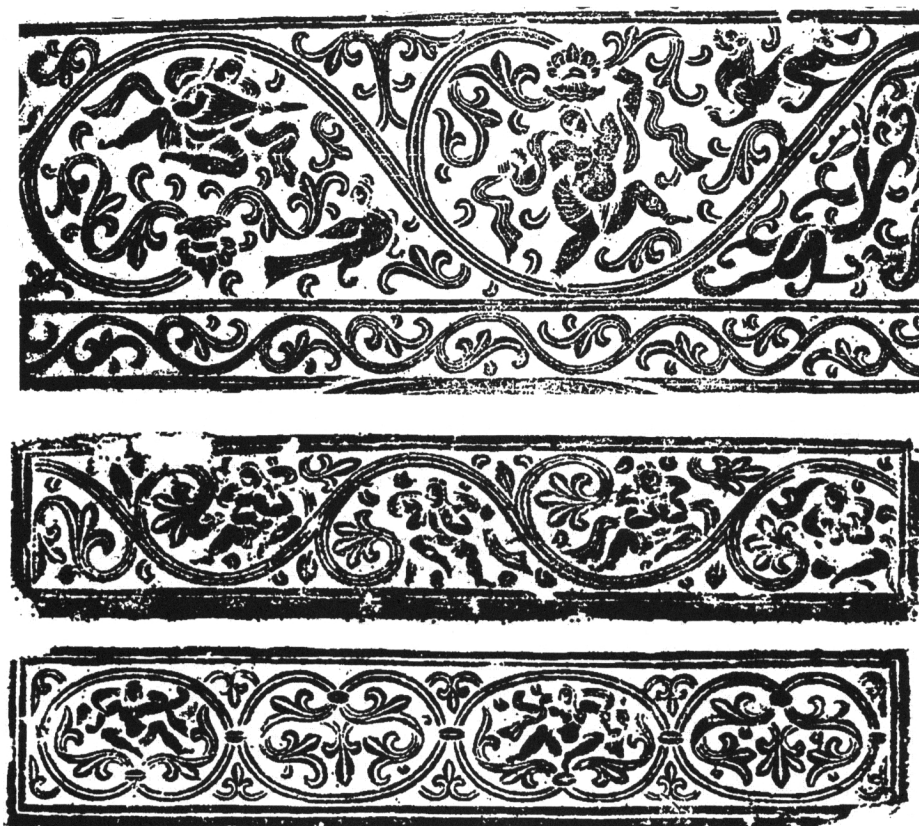


圖30 大同市司馬金龍墓のバルメット唐草紋〔山西省大同市博物館ほか1972：圖6〕
上：石棺牀，中・下：礎石

2 佛教造像

天部像 方山T40・41には武神像が刻まれている。T40は左手を腹前に構え、立て膝をついた右足と同じ方向に左足を曲げている。腰には札甲をまとい、足には脛甲をつけている。T41は方座に安坐し、脛甲をつけた左足がみえる。

雲岡石窟第9洞前室には鎧をつけた門神があり（『雲岡石窟』第6巻：圖版10）、第8洞門口では三叉矛を手にして立つ門神があるが、T40のような姿態の武神像は雲岡石窟には例がない。「雲岡圖像學」（『雲岡石窟』第8・第9巻）の指摘するように、鎧甲をつけた金剛力士像は、ガンダーラには例がなく、キジル石窟の暖爐A洞（谷西區第4窟）・畫工洞（後山南區第207窟）の壁畫など西域に起源がある。また、甘肅省酒泉市で発見された北涼代の「馬德惠」石塔の基層に、三叉矛を手にする金剛力士の交脚像が線刻されている（殷2000：圖8）。鎧甲をつけたその姿態は方山の例に近似し、その祖形とみることができる。造像銘に「承陽二年歲在丙寅」とあり、實在の年號ではないが、干支は426年にあたる。八木春

生〔2004：8-40頁〕が雲岡石窟や龍門石窟にみいだした力士像には方山T40・41と類似する例がないが、雲岡石窟第9・第10洞には同じような姿態の圖像がみられる。それには佛菩薩を支える侏儒像（圖31-1・3）と多面多臂の神像（圖31-2・4）の2種がある。前者は漢代の力士像の流れをうけつつ、インドのヤクシャに起源する像と考えられる。雲岡石窟では上半身が裸で、塔を擔ったり、梁を支える侏儒像が多い。後者は日月をささげ、弓を構える武神アシュラである。第10洞前室北壁門口では須彌山世界を守護する役目を擔い、武神像と同じ性格をもつ。多面多臂の神像は第7・第8洞の門口にあらわされたが、足の姿勢はちがっている。第9・第10洞の段階に武神としてふさわしい姿態に變化したのであるが、方山T40のような鎧甲はつけていない。雲岡石窟では鎧甲をつけた武

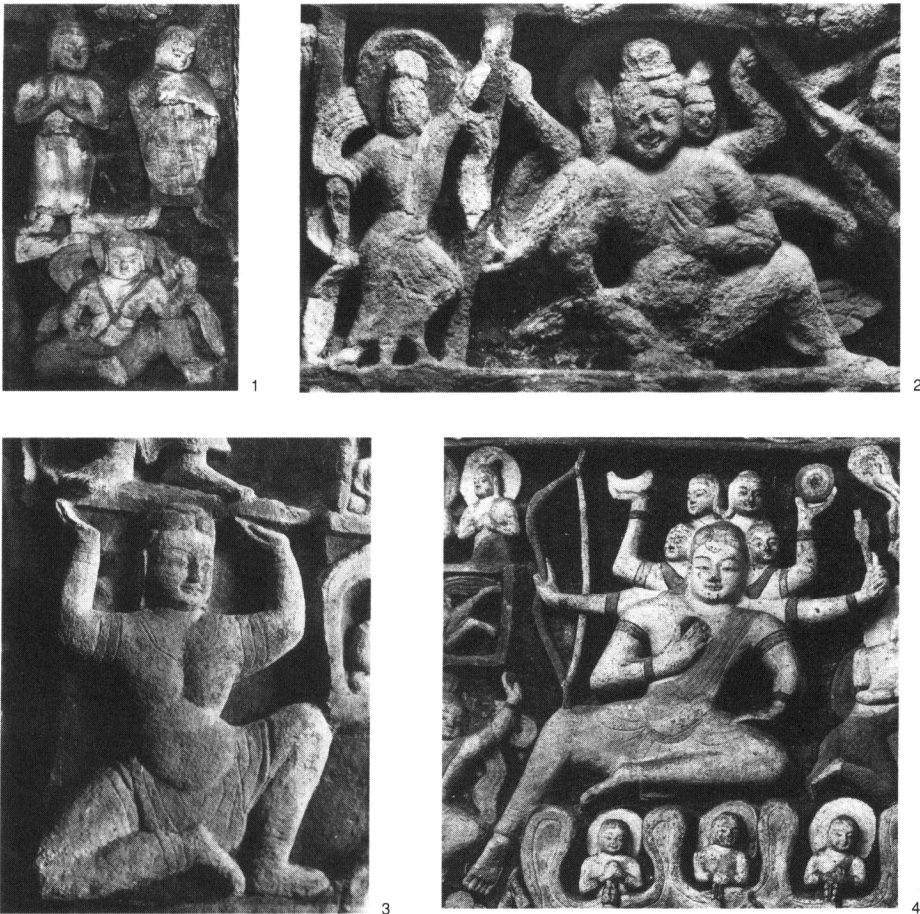


圖31 天部像

1 第10洞前室北壁上層西龕, 2 第10洞明窓東壁人像柱, 3 第9洞主室天井南部梁間, 4 第10洞前室北壁門口

神像は例が少ないことから、方山のそれは、雲岡石窟とまったく無関係ではないものの、異なる系譜を引く可能性が高い。

方山 T 40・41 の鎧甲は北魏の當時に用いられていたものだろう。魚鱗状の札甲は漢代には存在し、同時期の例として司馬金龍墓の陶俑がある。北魏をつうじて武人俑はすべて大口袴や縛袴で〔楊泓 1985：42-52 頁 / Dien 1981〕、脛甲をつけたものはないが、5 世紀前半の大同市沙嶺 7 號墓の甬道壁畫に小札の足甲をつけた武人があり〔大同市考古研究所 2006〕、551 年の山東省臨朐縣崔芬墓の甬道壁畫には方山例に近い脛甲がみえるので〔臨朐縣博物館 2002〕、實例が存在したことはまちがいない。そのいっぽうで西域から天部像のモチーフが傳った可能性もあり、今後は武具の面からも検討の必要があろう。

T 40 は天部像の下に梯形の楣拱額龕があり、弧状の垂幕で飾られている。これは雲岡石窟に例が多く、石窟第 7・第 8 洞の豪華な垂幕が第 9・第 10 洞にいたって形式化が顕著になっている。T 40 の垂幕は形式化の進んだ雲岡石窟第 9・第 10 洞の例に近く、それはパルメット唐草紋および天部像の姿態からみた相對年代と矛盾しない。

佛碑像 草堂山遺址で唯一採集された石彫が佛碑像 T 43 である（圖 32-1）。正面右端の垂幕と背面左端の千佛が部分的に残存する。

正面の垂幕は裾に襞を深く彎入させ、外側になびくさまを表現している。本來は雲岡石窟第 7 洞主室北壁上層龕（圖 32-2）や第 41 洞北壁龕（圖 32-6）のように門の兩側に垂れたカーテンであり、上の缺損部にはそれを結わえたタッセルがあったのだろう。489 年の第 17 洞明窓東側の龕（圖 32-5）ではそれが硬直した三角形をなし、洛陽遷都後の第 41 洞北壁では裾に襞が表現されている。しかし、このような門の兩側に垂下する幕は門柱の内側にあるのにたいして、この佛碑像では外側になびいている。また、裾の襞も雲岡石窟に例のない形である。方山文明太后馮氏墓〔大同市博物館ほか 1978〕の墓室石門に彫刻された童子像（圖 5）の天衣や籐座式柱頭の下端部に類似する表現があるものの、この垂幕では襞の先端を縁どる刻線や入り組んだ弧線が省略されている。しいていえば、雲岡石窟第 8 洞主室北壁上層龕の本尊佛左足にかかる衣（圖 32-3）や第 5 洞主室南壁西供養者像の衣（圖 32-4）の端と関連し、その中間的な表現であるのかもしれない。籐座式柱頭を分析した八木春生〔1991〕は、方山馮氏墓の襞表現が雲岡石窟の系統とは少し異なることに注意している。これは雲岡石窟とは別系統の石工によって彫刻された可能性があるろう。

背面の千佛像はいわゆる涼州式偏袒右肩の着衣で、一重圓の頭光を大きな舉身光でつつむ光背形式をもつ。第 2 章第 3 節の報告では雲岡石窟第 9 洞明窓上の千佛像に類似することを指摘したが、光背の線刻はゆがみ、佛頭や着衣の表現はそれほど精緻ではない。

この佛碑像は方山永固陵に先行する思遠寺の佛塔に立てられたものである。碑像であることからみて、造營當初に造りつけられたものか、それとも建立後に安置されたものかは

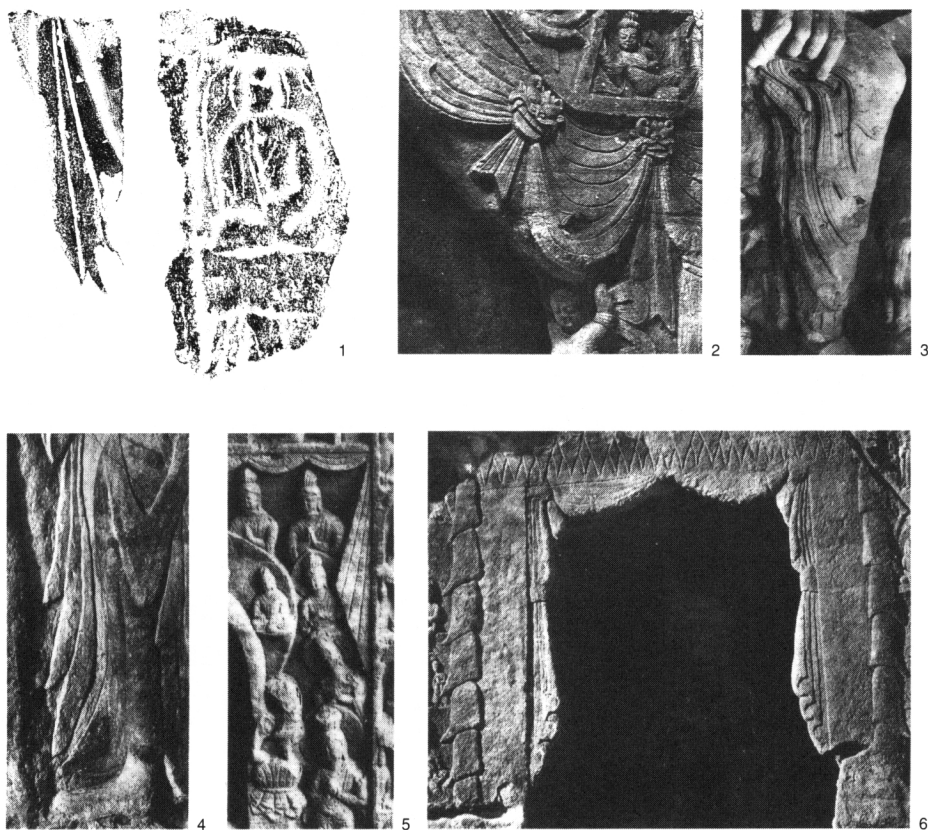


圖 32 垂幕表現

1 方山草堂山遺址の佛碑像（縮尺1/3），2 雲岡石窟第7洞主室北壁上層龕，3 雲岡石窟第8洞主室北壁上層龕本尊佛左足，4 雲岡石窟第5洞主室南壁西供養者像，5 雲岡石窟第17洞明窓東側太和十三年龕，6 雲岡石窟第41洞北壁

わからない。しかし、その様式は方山永固陵の造営前後に位置づけて大過ないだろう。

3 樹木表現

『雲岡石窟』遺物篇に報告した樹木表現の石彫 K 51（圖 33-1）は、中國風の山水表現にある遠景の樹林をあらわしている。直立した4本の樹木が合わさって銀杏の葉のような三角形に表現され、幹の先に小枝をあらわす箒状の細い線と外縁に列点が刻まれている。圖 33-2 は西安碑林博物館に所蔵する神龜2年（519）の元暉墓誌で、このような樹木表現は洛陽遷都後に出現するというのが通説であった。そのもっとも早い例として、502年の甘肅省天水麥積山石窟115號窟の壁畫があり（圖 33-3），その上に南朝様式の仙人が飛遊している〔八木2006〕。しかし、これら遷都後の樹木表現は銀杏の葉のような横長にあらわされるのにたいして、方山の例は縦長の三角形を呈する。圖 33-4 は顧愷之の作と傳える

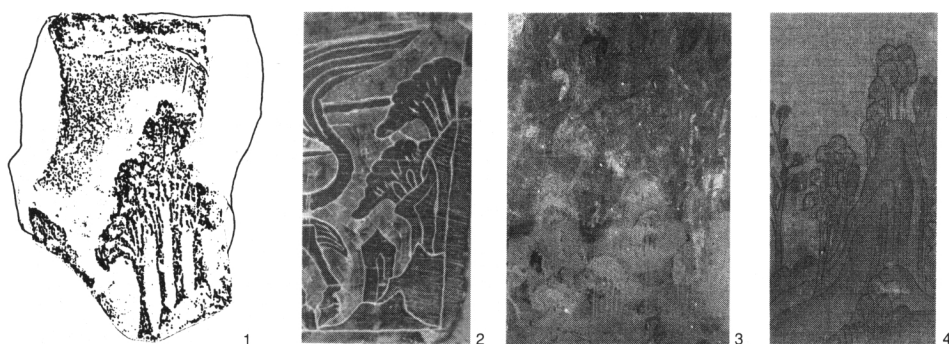


圖 33 樹木表現

1 方山白佛臺遺址 K 51 (縮尺 1/2), 2 洛陽元暉墓誌, 3 麥積山石窟 115 號窟壁畫〔天水麥積山石窟藝術研究所 1987: 圖版 59〕, 4 洛神賦圖卷〔曾布川・岡田編 2000: 圖版 76〕

「洛神賦圖卷」の一部で、樹木が 1 本ずつ獨立して描かれているが、その先尖りの形は方山の例に近い。この「洛神賦圖卷」の模本が 4 世紀後半の顧愷之の表現を正しく傳えているならば、洛陽遷都の前後における表現のちがいは時期差を示す可能性があろう。

南朝の「竹林七賢と榮啓期」圖が樹木の種別を描き分け、特色を把握しようとする意圖があるのにたいして、北魏の樹木や山水の表現は紋樣的・類型的であるという〔長廣 1969: 208-213 頁〕。しかし、漢代には山水の自然な描寫が未發達で、顧愷之に代表される南朝の畫壇において飛躍的な發展をとげることからみれば、方山のそれが南朝の影響によって生みだされたことはまちがいない。

いっぽう、方山と同時期の司馬金龍墓から出土した漆繪屏風が、顧愷之の作品と多くの點で共通することはつとに指摘されている。司馬金龍は西晉宣帝の子孫で、東晉のとき北魏に亡命した司馬楚之の子である。漢人のなかでも、とりわけ高貴な出自により、死後に大將軍・司空公・冀州刺史を追贈された。その漆繪は、中國古來の帝王・將相・烈女・孝子・高人・逸士などの故事や傳説を繪畫と傍題であらわしている。方山の石彫 K 51 は背面が平坦な面をなし、本來はパネル狀の板石であつたと考えられること、第 3 章にみたように、北魏の酈道元『水經注』卷 13 灤水條は「二陵の南に永固堂あり、…堂の内外の四側は、兩石趺を結び、青石の屏風を張り、文石を以て縁をつくり、竝びに忠孝の容を隱起し、貞順の名を題刻す」と傳えること、すなわち青石の屏風に忠孝の容と貞順の名を題刻していたことからみれば、彫刻と繪畫とのちがひ、墓上の祠堂と墓室内とのちがひがあるとはいえ、司馬金龍墓の漆繪屏風は永固堂の青石屏風を彷彿させることはまちがいない。方山の樹木表現は、顧愷之の作品と司馬金龍墓の漆繪、ひいては圖像樣式における南朝と北朝との關連を論じる糸口となるものであろう。

展 望

東京大學考古學研究室に所蔵する東亞考古學會 1939 年の収集資料を中心に、方山永固陵をめぐる諸問題について検討した。最後に、それらをまとめながら、派生するいくつかの課題について展望を示しておきたい。

思遠寺の位置 方山永固陵にともなう永固堂や思遠靈圖(佛寺)などの配置については『水經注』に詳しい記述があり、Wenley〔1947〕にはじまる諸研究では、その同定に関心が集まっていた。第 3 章にみたように、文明太后馮氏墓や孝文帝の萬年堂の比定については異論がなく、永固堂を白佛臺遺地の一角に比定することも、石碑座の龜趺によって裏づけられた。意見がもっとも分かれているのは思遠寺の比定であり、およそ白佛臺遺地説と草堂山遺地説とに二分されている。前者は永固堂の西に思遠靈圖があり、そこから靈泉宮がみえんとする『水經注』の記述が根據になっている。これにたいして後者は、草堂山遺地を思遠寺の塔院遺構とみなし、方山のふもとに靈泉宮を想定する。すなわち、文獻史料にもとづくのか、それとも考古資料から立論するのか、という方法論の對立であった。

わたしたちは白佛臺遺地と草堂山遺地の兩方に思遠寺がまたがっていたと結論づけた。第 1 に、方山からは數種類の文字瓦當が出土しているが、そのうち思遠寺の創建時の瓦と考えられる 2 種類の同範「萬歲富貴」瓦當が白佛臺遺地と草堂山遺地の兩方から出土している。思遠寺と同時期に建てられた遼寧省朝陽市の北塔下層「思燕佛圖」遺地からそれと類似する「萬歲富貴」瓦當が出土していることは、「萬歲富貴」瓦當を思遠寺の創建瓦とすることと矛盾しない。第 2 に、白佛臺遺地と草堂山遺地の兩方から佛教造像が出土し、同範の可能性が高い 2 種類の塑像は兩方にまたがって出土している。草堂山遺地はその遺構から佛寺の塔院とみなしうるが、白佛臺遺地にも同様の佛寺が存在した可能性が高く、思遠寺の創建された 480 年ごろの作品と考えられる佛教造像が兩遺地で共有されていたことは、それらが同時に建てられた同一寺院であったことを示している。

以上の考古學の所見に文獻史料を補ってみよう。思遠寺は太祖が方山に築いた城塞のところに建てたと『魏書』釋老志にいう。白佛臺遺地のほうが四方に眺望のきく城塞にふさわしい立地である。また、寺主の僧顯が沙門都統に任じられたように、思遠寺は國家の中心的な佛寺であり、狭い尾根上に立地する草堂山遺地だけに伽藍が限られたとは考えがたい。いっぽう白佛臺遺地は東西およそ 280 m の規模があり、永固堂・思遠靈圖・齋堂が東西に並んでいたという『水經注』の記録にも合致する。

思遠寺の創建は『魏書』に 477 年と 479 年のふたつの所傳があるが、永固陵の造營は 481 年にはじまるから、そのときすでに思遠寺の伽藍が存在していたことはまちがいな

い。思遠寺が白佛臺遺址の中央附近にあり、永固陵の清廟である永固堂がやや東に偏っているのは、思遠寺がそれ以前に建っていたからであろう。方山の靈泉宮・思遠寺・永固陵などすべての工事を擔當したのは、文明太后に登用された鉗耳慶時である。思遠寺はおそらく方山永固陵の一部として最初から設計されていたのであろう。墓と寺院とのかかわりについて、思想的な背景をふくめて検討していくことが今後の課題である。

思遠佛寺と思燕佛圖 文明太后馮氏は方山に思遠寺を建てると同時に、馮氏の出自した北燕の古都龍城に思燕佛圖を造營した。その遺址が朝陽市の北塔下層で発見されている〔董 1991・1996〕。北魏の版築基壇を利用して隋・唐・遼代に塔の改築や修築がおこなわれ、遼代の甃塔がいまに残る。1300 m²を發掘し、ボーリング調査とあわせて復元した下層基壇の規模を思遠寺の草堂山遺址と比較したのが表 2 である。

表 2 草堂山遺址と北塔下層遺址の基壇規模

	基壇外周	塔 基
草堂山	東西 57.5 × 南北 88.2 m	東西 34.2 × 南北 45.8 m ・ 高さ 2.5 m
北塔下層	東西 90 × 南北 100 m ・ 高さ 7 m	東西 33 × 南北 33 m ・ 高さ 2.2 m

山頂に建てられた草堂山遺址とちがい、北塔下層遺址は城内の平地に位置しているため、基壇の全體はひとまわり大きくつくられている。しかし、中心にある塔基は、草堂山のほうが南北に 12 m ほど長くなっている。北塔下層は塔基の周圍に 2 列の礎石があり、外側柱礎は 20 個、内側柱礎は 12 個、柱間は 2.76 m、一邊の全長は 14.40 m、5 間四方の回廊がめぐっていた（圖 34）。草堂山遺址は 7 間四方の回廊に復元されているが、周圍に回廊のめぐる形式は同じである。礎石は方形だが、四隅の外側柱礎は大型の覆斗式ないしは覆盆式で、龍・鳳・虎・四葉などの浮彫紋様をもつ（圖 34）。覆斗式礎石は三燕時期のものとして寫眞が別に公表されている（遼寧省文物考古研究所編 2002：圖版 167）。南面中央の外側柱礎から 2.55 m のところに一對の礎石が東西に竝んでいる。草堂山遺址のような凸字形塔基の一部で、南の門道につながっていたのだろう。基壇外周にはまた幅 9 m の土臺と 2 列の礎石があり、外回廊と周壁がめぐっていたとみられる。

参考までに、洛陽永寧寺の塔址〔中國社會科學院考古研究所 1996〕をみておこう（圖 35）。基壇は四方に斜道がのびる亞字形で、一邊が 38.2 m、高さ 2.2 m である。中心に日干し煉瓦を積みあげた中心塔柱があり、殘存する長さ 19.8 m、高さ 3.7 m。その周圍に方形の礎石が二重にめぐり、9 間四方の回廊に復元される。その構造は草堂山遺址・北塔下層遺址と同じだが、規模は草堂山遺址よりひとまわり大きい。

方山から出土した「萬歲富貴」瓦當や塑造の佛菩薩像が北塔下層の例に類似していることは、第 4 章と第 5 章に論じた。北塔下層の調査報道によれば〔董 1996〕、このほかにも紅

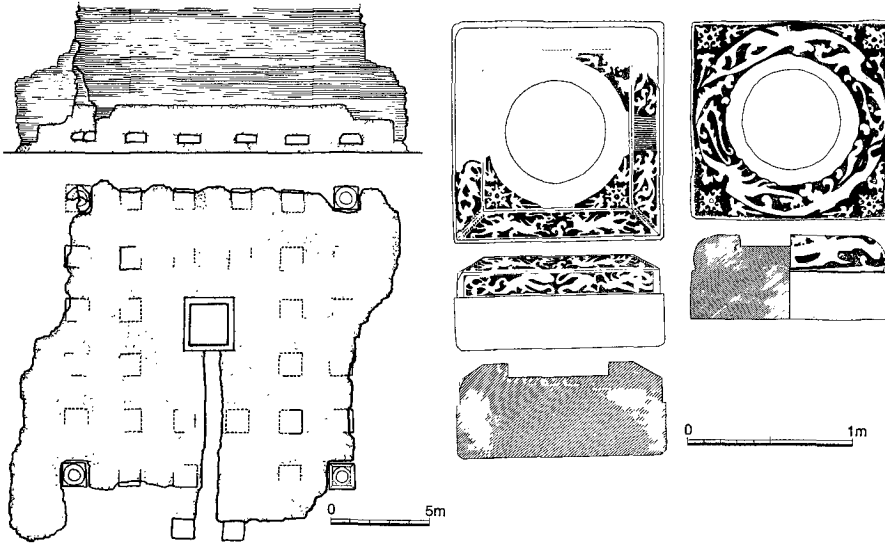


圖34 朝陽北塔下層の塔基と礎石〔董1991：圖1～圖3〕

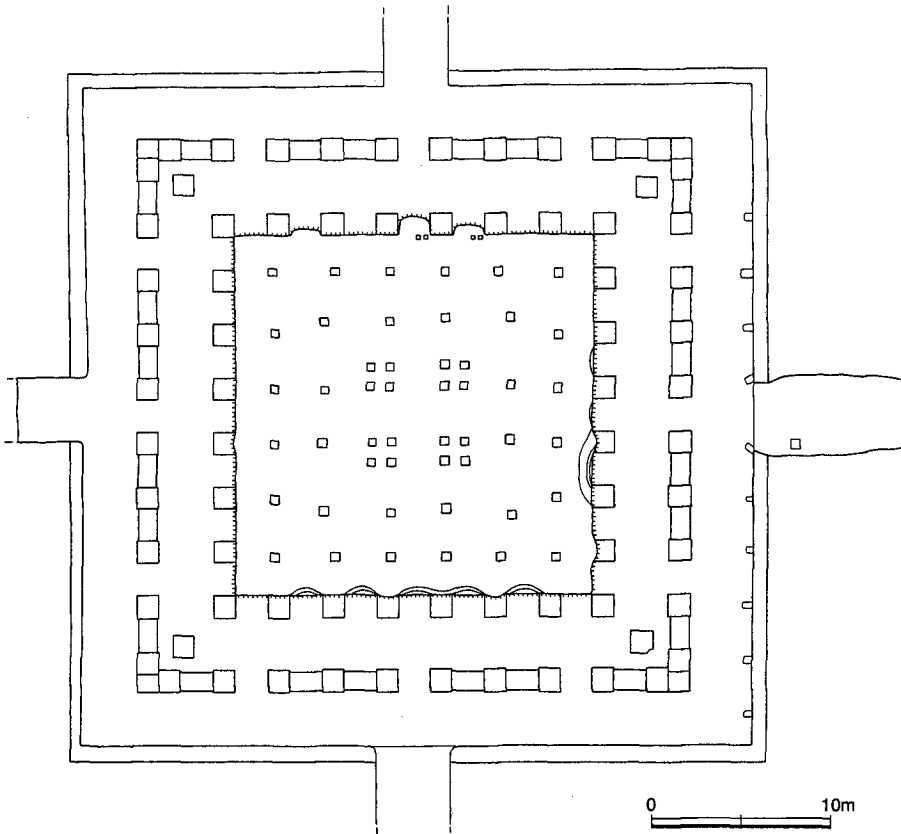


圖35 洛陽永寧寺の塔基復元圖〔中國社會科學院考古研究所1996：圖9B〕

褐色と灰色の丸瓦・平瓦が出土しているという。北魏の平城において紅褐色の丸瓦・平瓦は方山のほかに例をみないから、思遠寺と思燕佛圖とは同時期に同巧の設計で建設されたのであろう。ただし、同範の瓦や塑像が兩遺址に共有されているのか、同じ工人集團が關與したのかについては、實物の觀察をまつ必要があり、今後の課題としたい。

高句麗への影響 方山永固陵のように陵墓に寺廟がともなう例は、中國ではほとんど知られていない。しかし、高句麗の傳東明王陵にともなう定陵寺址は、考古學調査で明らかになった同時代の類例として重要である。それは北朝鮮ピョンヤン市の東南 22 km にあり、傳東明王陵のすぐ南に東西 223 m×南北 133 m の定陵寺址がひろがっている（圖 36）。塔とされる八角形の基址を中心に、回廊で圍まれた數區劃の院落からなり、高句麗の佛教寺院としては異例の伽藍配置である。しかし、東西に院落が連なり、佛寺が中心にあることなど、方山の白佛臺遺址にならった構造と理解すれば、十分に納得できるだろう。全體の規模も白佛臺遺址より少し小さいだけである。しかも、瓦や土器には「定陵」・「陵寺」の刻文があって、文字どおり陵墓にともなう寺院として建てられている。

傳東明王陵は前後の石室からなり、壁には全面に同形の蓮華紋を描いていた。背後の丘陵には數十基からなる眞坡里古墳群が營まれており、傳東明王陵は最初に營まれた墳墓で

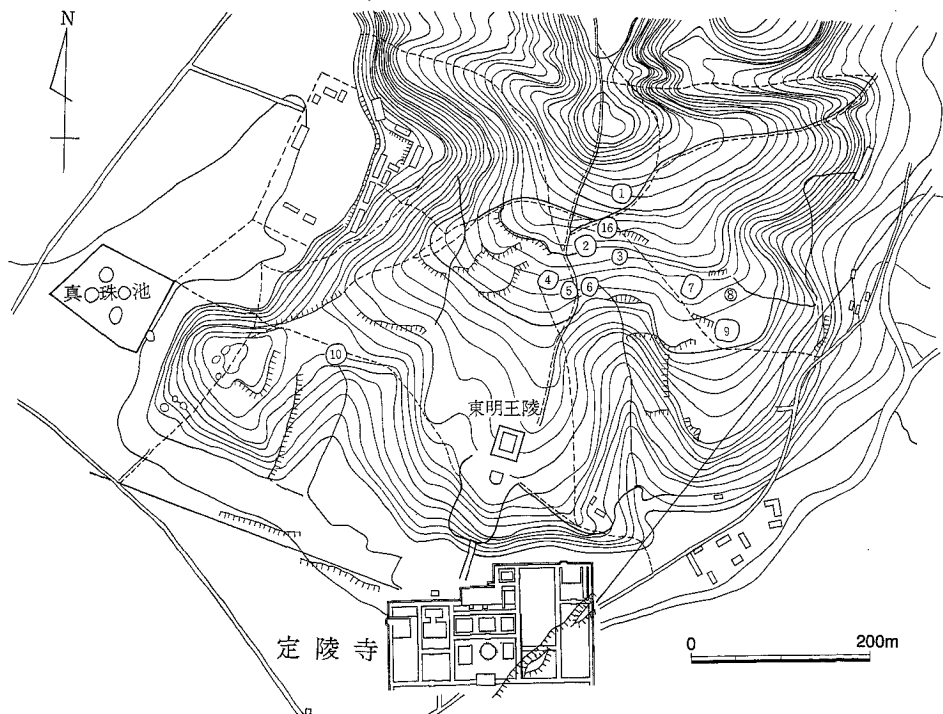


圖 36 傳東明王陵と定陵寺址〔永島 1981：圖 3〕

ある。北朝鮮の調査者は傳東明王陵の年代を4世紀末から5世紀初頭とするが、永島暉臣慎〔1981〕は491年に薨じた長壽王の陵墓に比定し、魏存成〔2002：202頁〕も5世紀末に位置づけている。定陵寺址の年代について、蓮華紋瓦當を分析した田村晃一は、5世紀末の清岩里廢寺より後出すると考えたが、いまでは永島説を支持する立場にかわっている〔2001：357-380頁〕。

長壽王は427年に輯安から平壤に都を遷し、孝文帝のときには連年のように使いを北魏に送っている。とくに488年からは年に2回以上の遣使が記録されている。長壽王の訃報に接した孝文帝は、東郊の行宮にて哀悼し、車騎大將軍・太傅・遼東郡開國公・高句麗王を遺贈した〔『魏書』卷100高句麗傳〕。また、文明太后の母は平壤の樂浪王氏に出自し、孝文帝の昭皇后は高句麗人高肇の妹である。このように5世紀後半の北魏と高句麗とは緊密な関係にあり、傳東明王陵の被葬者を特定することはむずかしいとしても、方山永固陵にならって陵墓と寺廟とを一體として造營した可能性は高い。

雲岡石窟との相對編年 460年に造營のはじまった雲岡石窟は、大きく3期に分けられている。前期は曇曜五窟とされる第16～第20洞、中期はその東に位置する諸洞、後期は洛陽遷都後の西端諸洞である。紀年銘が少ないため、各時期の細分についてはさまざまな異論があり、なかでも中期の第9・第10洞について、「金碑」を手がかりとする中國側の480年代説と美術様式論にもとづく日本側の470年代説とで論争がつづいている。この問題を解く重要な鍵が、479年創建の方山思遠寺と481年から484年に造營された方山永固陵である。方山と雲岡石窟の考古資料を型式學的に對比すれば、石窟中期の實年代論が大きく前進するはずである。しかし、方山永固陵については大同市博物館など〔1978〕が文明太后馮氏墓の墓室を發掘したときの資料が公表されているだけで、草堂山遺址の塑像様式を論じた宿白〔1982〕と籐座式柱頭をとりあげた八木春生〔1991〕をのぞけば、ほとんど議論されていない状況であった。そこで、わたしたちは京大人文研にある東方文化研究所の収集資料を整理し、同範の「傳祚無窮」瓦當が3段階に分かれ、方山の瓦當は石窟第9・第10洞前の瓦當と同じ第2段階に屬すこと、石彫K50の縦位パルメット環狀唐草紋は石窟の第7・第8洞と第9・第10洞の過渡期に編年され、塑像K49もそのころに位置づけられることを明らかにし、さらに方山永固陵の造營を監督した鉗耳慶時（王遇）は、つづいて484年から489年に雲岡石窟の宗教寺を造營しているが、同じ段階の同範瓦當が方山と第9・第10洞の兩遺址で共有されている事實は、鉗耳慶時が兩者の造營を主導したとと関連すると考え、第9・第10洞を宗教寺に比定した宿白〔1956・1982〕説を支持したのであった〔岡村編2006〕。

わたしたちは『雲岡石窟』遺物篇の作成に並行して2003年より東京大學に所蔵する東亞考古學會の収集資料を調査し、第5・第6章で論じたように、塑像と石彫の様式から年

代論の補強を試みた。すなわち、方山白佛臺遺址で採集された塑像は、石窟と材質がちがうため直接的な比較はむずかしいが、おおむね雲岡石窟中期の第7・第8洞から第9・第10洞のところに逆行すると考えられた。また、白佛臺遺址の石彫 T 40 の天部像と垂幕は、第7・第8洞よりも第9・第10洞に近い表現とみなした。

方山からはまた、複瓣蓮華紋のなかに豊満な化生童子をあらわした蓮華化生紋瓦當が多数出土している。第4章に論じたように、蓮華化生のモチーフは雲岡石窟にも多くの例があり、前期の第18洞と中期の第7洞にみるような、素朴だが立體感に富む裸形の化生童子から、第9・第10洞にみるような、やや平板な表現で、天衣や圓光をもつ化生へと變化し、中期末の第6洞では中國式の衣服をまとった蓮華化生が出現している。このような様式變化にともない、第7洞までの蓮華化生は側視形であったが、第10洞では正視形の蓮華化生が出現することを明らかにした。型づくりの瓦當と石窟とのちがいを考慮するとしても、雲岡石窟における蓮華化生の變遷と對照すれば、方山のそれは第7洞と第9・第10洞との間に位置づけられることは認められよう。

パルメット唐草紋もまた雲岡石窟に多く用いられ、型式學的な分析が可能である。石彫 K 50 のパルメット環狀唐草紋は上述のとおりで、石彫 T 42 のパルメット波狀唐草紋も同じように第7・第8洞と第9・第10洞の過渡期に位置づけられた。これに484年の司馬金龍墓の石彫を考えあわせると、パルメット唐草紋は雲岡石窟第7・第8洞→方山永固陵→司馬金龍墓→雲岡石窟第9・第10洞と前後に矛盾なく編年できたのである。

1925年に Bishop らが方山で収集した石彫が *Bishop Book III* (Hennessey 1999: Mf. no. 7) に収録されている。その龍頭表現は第7・第8洞に近く、この結論と矛盾しない。

このように創建年代の明らかな方山思遠寺や永固陵の出土資料を手がかりに、年代論が分岐する雲岡石窟中期の諸窟と對比したところ、蓮華化生紋・パルメット唐草紋・塑像・石彫のいずれにおいても第7・第8洞から第9・第10洞への過渡期に方山が位置づけられた。實年代でいえば、第7・第8洞は方山に先行する470年代、第9・第10洞は方山より後出する480年代後半に比定できるだろう。

方山永固陵と雲岡石窟の造營者 方山の靈泉宮・思遠寺・永固陵の造營を主導したのは、文明太后に登用された鉗耳慶時である。彼はつづいて484年から489年にかけて雲岡石窟の宗教寺を造營した。藝術にたいする「性は巧にして部分に強なり」と稱えられ、「年は蒼老にありといえども、朝夕倦まず、鞍に跨り驅馳し、少壯者とその勞逸を均しくす」る現場の指導者であった。方山と雲岡石窟の第7・第8洞～第9・第10洞とが逆行し、雲岡石窟の宗教寺が第9・第10洞にあたることを確かめたいま、鉗耳慶時の關與が様式としてどのように表象されているのかを検討しよう。

方山と石窟第9・第10洞前には「傳祚無窮」瓦當の同范關係があり、第9・第10洞前

からは方山の赤色磨研瓦を想起させる赤焼きの蓮華紋瓦當が出土し、兩遺址の間に一定の関係性が確かめられた。方山にはじまる複瓣蓮華紋の垂木先瓦は、やや後れて雲岡の西部臺上寺院址や西梁廢寺に用いられている。また、『雲岡石窟』遺物篇の刊行後、平城の操場城1號宮殿址から出土した「傳祚無窮」瓦當〔山西省考古研究所ほか2005：圖版16-2〕が報告された。小さな斷片のため、雲岡・方山のそれとの同範関係は不明だが、平城における瓦生産の動向を考えるうえで注意すべき資料であろう。

雲岡石窟では470年代から490年代まで一貫して「傳祚無窮」瓦當を主體としたのたいていして、方山では伝統的な文字瓦當を改變した「萬歲富貴」瓦當を主體とし、新たに創出した蓮華化生紋瓦當や蓮華紋瓦當を併用していた。鎮護國家を明示する「傳祚無窮」瓦當が限定的に用いられたのとは對照的に、方山で創出された蓮華化生紋や蓮華紋の瓦當紋様は、その後、平城一帯に廣く用いられている。とりわけ瓦當の蓮華紋は490年代にいつそう盛行し、北朝から隋唐代の中心的な瓦當紋様へと發展していった。方山ではまた青棍瓦の祖形になる黑色磨研瓦が出現し、490年代には操場城1號宮殿や明堂の主體となり、ひいては北朝から隋唐以後に繼承されている。方山で同時に出現した赤色磨研瓦などは、ほとんど普及することなく消失するが、總じてみれば、雲岡石窟の瓦製作が保守的であったのと反對に、瓦當紋様と製作技法の兩面において方山の瓦製作がその後に與えた影響は大きかった。以上のことから、方山の瓦製作に雲岡の瓦工が部分的に關與することがあったとはいえ、大部分はそれとは別に組織され、方山の造營が一段落すると、その瓦工たちは雲岡をふくむ平城一帯の造營事業に大きくかかわっていったと考えられる。

方山の瓦當にみる蓮華化生は、雲岡石窟の彫刻にも多く用いられている。しかし、方山以前にさかのぼる蓮華化生は側視形の蓮華で、方山以後の石窟第10洞にいたって正視形の蓮華から上半身を出した化生童子があらわれる。このことからみると、方山で創出された様式が雲岡石窟に影響をおよぼすことがあったとしても、その逆は考えがたい。

方山から出土した塑像について宿白〔1982〕は、その造像様式が雲岡石窟第9・第10洞よりもやや先行し、衣紋の形が石窟第7・第8洞に近いことを指摘した。方山の塑像は小さな斷片ばかりで、全體を復元できるものはないが、前項にみたように、大まかな様式としてみると、雲岡石窟の第7・第8洞～第9・第10洞に並行することは確かであろう。しかし、塑造と石彫とのちがいがあり、工人が異なるのは當然としても、設計者もちがっていた可能性が高い。たとえば、方山の菩薩塑像T37は上半身を裸形とし、天衣のみをまとうのにたいし、雲岡石窟の菩薩や天人像は、天衣のほかに左肩から條帛を懸け、胸前に瓔珞を交差させることが多い。また、方山の塑像にみる菩薩の三面寶冠T36は、圓形立飾から連珠裝飾を左右に垂下させる型式で、河北省曲陽の砂岩製菩薩像にみられるが、雲岡石窟では圓形立飾の間にパルメット裝飾をおくことが多い。そして、構成・形態・製作技

法などすべての點で方山の塑像に類似するのは、同時期の朝陽北塔下層や内蒙古固陽縣城址の塑像であり、それらの祖形は河西から西域に直接たどるべきであろう。

これにたいして方山の石彫は、雲岡石窟の彫刻と直接的な比較が可能である。圖像や紋様の單位ごとにみると、方山の石彫 K 50・T 42 にある 2 種類のバルメット唐草紋、石彫 T 40 の楣拱額龕と弧狀の垂幕、佛碑像 T 43 にある偏袒右肩の千佛像は、雲岡石窟に同一型式の例が多い。そのいっぽうで石彫 T 40・41 の鎧甲をつけた天部像、佛碑像 T 43 正面の外側になびく垂幕は、雲岡石窟とまったく無関係ではないものの、異なる系譜を引くものである。籐座式柱頭を分析した八木春生〔1991〕もまた、文明太后馮氏墓の髣髴表現が雲岡石窟の系統とは異なることに注意している。このため方山の石彫は、雲岡石窟と同時期であるゆえに同じ時代様式を共有するのであるが、別の流派に屬す設計者や工人の作品であったと考えるのが妥當であろう。

鉗耳慶時は方山と雲岡石窟のほか、平城東郊に祇洹舎を建て、遷都後の洛陽でも主要な宮殿と陵墓の建造を主導した。大同市の御河東岸で採集された蓮華化生紋瓦當や垂木先瓦は、方山の例に類似し、その寺院址は祇洹舎にあたる可能性がある。方山をはじめとする平城一帯の出土資料はいずれも斷片的であり、それだけで鉗耳慶時の關與を論じるのは時期尚早であろう。しかし、様式に反映された製作動向をまとめるならば、方山の造營に従事した設計者や工人たちの多くは雲岡石窟とは別に組織されたこと、484年に方山の造營が一段落すると、その設計者や工人たちは平城の都市づくりに關與し、一部は雲岡石窟の造營にも參畫していったこと、490年代の操場城1號宮殿や明堂の造營に瓦工たちが再編成され、遷都後は洛陽城の造營にもかかわっていったことがうかがえた。それは平城と洛陽の主要な造營事業にかかわった鉗耳慶時の動向と無関係ではないだろう。

西方様式の影響 雲岡石窟前期の曇曜五窟が尊像を中心とする石窟であったのにたいして、中期の第7・第8洞と第9・第10洞は佛傳圖や本生圖、釋迦苦行像、禪定比丘、維摩文殊像などの佛教説話や經典内容にもとづく主題が多くなり、珠をくわえた猛禽に座るシヴァ神、牛の背に座るヴィシュヌ神、アシュラといった多面多臂のインドの神がみ、三叉矛をもつ武裝の門神、ササン式冠飾、バルメット唐草紋、連珠紋、柱頭裝飾などの西方的意匠が多くあらわれる〔水野1939b〕。前項にみた方山の西方様式は、このような雲岡石窟における變化と連動したものであろう。

方山永固陵の造營がはじまる直前に、孝文帝は中山に行幸する。そのときに建立した佛塔が河北省定州市で發見されている。その塔基に埋藏されていた太和5年(481)銘の舍利石函から41枚のササン銀貨が出土した〔河北省文化局文物工作隊1966〕。その内譯はヤズデガルドⅡ世(438-457)貨4枚とペーローズ(457-483)貨37枚であり、紀年銘のあるものではペーローズ14年(470)貨がもっとも新しい〔夏1966〕。古いヤズデガルドⅡ世貨にはエ

フタル文字が後刻され、ペーローズ貨にはそれがなく、商業ルートでもたらされたのではなく、ペーローズ朝ペルシアが北魏に朝見した 461・466・468・477 年に直接貢納されたものと考えられる〔桑山 1977〕。このような外交交渉のほかにも、シルクロードを通じた西域との文化交流が連綿とつづいてはならずであり、方山や雲岡石窟における西方様式はそれを反映したものにはかならない。

草堂山遺址の佛塔は長方形基壇の南に突出部をもつ凸字形のプランである。これにたいして洛陽永寧寺の塔基は正方形プランで、四方に斜道がとりついている。西域の塔基には凸字形（一方斗出形）と亞字形（四面斗出形）の 2 種があり、ミーラン 2 號寺院址は凸字形、ホータンのラクワ寺院址は亞字形である〔Stein 1907〕。タキシラ・ガンダーラの例から凸字形は亞字形より先行すると考えられており〔熊谷 1962：86-87 頁〕、それが思遠寺と永寧寺との年代差としてあらわれているのかもしれない。西域からの文化傳播が連綿とつづいていることからすれば、北魏の佛塔型式もまた、平城から洛陽に繼承された面があるいっぽうで、西域から新たな影響をうけて變化した側面もあったのだろう。

南朝の影響 雲岡石窟にあらわされた中國獨特の意匠は少なく、480 年代の第 9・第 10 洞に出現する屋形龕や第 5・第 6 洞などにみる中國式服制をあげうるにすぎない。いっぽう、484 年の司馬金龍墓から出土した漆繪屏風には中國古來の故事や傳説の繪畫と傍題があらわされ、顧愷之の作品との共通性が指摘されてきた。しかし、その漆繪は同時代の繪畫に比較資料がないため、南朝の亡命貴族である司馬金龍その人を念頭において南朝の影響が語られてきたところがある。

方山白佛臺遺址の石彫 K 51 は、顧愷之ら南朝の畫壇にはじまる山水畫ふうの樹木をあらわしたものである。北魏では洛陽遷都後にはじまる山水表現と考えられていたから、その出現が 20 年ほどさかのぼることになった。それは南朝様式が 480 年代前半の方山におよんでいたことを示すだけでなく、司馬金龍墓の漆繪屏風を再評價させることになった。すなわち、方山の石彫 K 51 はパネル状の板石で、忠孝の容と貞順の名を刻み、永固堂の周圍に立てられていたと『水經注』にいう青石屏風の一部であったと考えられる。司馬金龍墓の漆繪屏風には、そのような山水表現はないが、中國古來の故事傳説を繪畫と傍題であらわした點で永固堂の青石屏風と共通する畫題をもち、司馬金龍その人の經歷による所産ではなく、480 年代の平城に南朝様式が廣範に受容されたことを示している。

北魏と南朝の宋・齊とは敵對していたとはいえ、『南齊書』魏虜傳に「宋の明帝末年、始めて虜（北魏）と和好し、元徽・昇明（473-478）の世には虜使歳ごとに通ず」とあるように、5 世紀後葉にはひんぱんな外交関係があった。また、469 年に北魏は宋の領有していた山東半島を手に入れ、すぐれた藝術家の蔣少游らを平城に移住させた。孝文帝の命をうけた蔣少游は、491 年に洛陽や南朝のみよこ建康を視察し、平城の宮殿建設に手腕を發揮

した。北魏が南朝の文化を受容する機会は少なくなかったのである。これまで雲岡石窟の佛教美術をもとに平城時代の北魏文化が語られてきたが、今後は方山永固陵をはじめとする同時代の考古資料にも目配りし、その文化を總體的に理解する必要がある。

方山永固陵の調査は1920年代に米中の共同調査ではじまり、1930年代には日本人が相ついで踏査した。雲岡石窟の調査史にはおよばないものの、すでに80年あまりの研究が蓄積されている。これは中國考古學史において特筆すべきことであろう。

1939年に東亞考古學會が方山で収集した考古資料は、雲岡石窟と比較できる佛教造像をふくんでいるにもかかわらず、小さな破片が多かったため、ほとんど顧みられることがなかった。新中國の調査でも出土遺物にたいする関心は低く、もっぱら遺構と文獻史料をもとに研究されていた。しかし、京大人文研にある東方文化研究所の調査資料の再検討をふまえ、東亞考古學會の収集資料を整理した結果、方山永固陵や雲岡石窟はもとより、そこから東アジアにおける5世紀後半のさまざまな問題が展望できた。60年以上も前に収集された資料40点ばかりのささやかな整理報告とはいえ、當該期の考古學研究を活性化させる引き金となれば、所期の目的は達せられたことになる。

参考文献

- 出光美術館編 1995『北京大學サックラー考古藝術博物館所藏 中國の考古學展』、出光美術館
殷 憲 2007「北魏靈泉宮池訪尋記」『中國文物報』2月23日
殷 光明 2000『北涼石塔研究』、財團法人覺風佛教藝術文化基金會
雲岡石窟調査班 1943「雲岡石窟調査記（昭和17年度）」『東方學報』京都第13冊第4分
雲岡石窟文物研究所・山西省考古研究所・大同市博物館 2006「雲岡石窟第3窟遺址發掘簡報」『文物』第6期
雲岡石窟文物保管所編 1989-90『中國石窟 雲岡石窟』第1・第2卷、平凡社
王 銀田・曹 臣民 2004「北魏石雕三品」『文物』第6期
大阪府立近つ飛鳥博物館 2002『西域への道』大阪府立近つ飛鳥博物館展示圖録
岡村 秀典編 2006『雲岡石窟 遺物篇』京都大學人文科學研究所研究報告、朋友書店
夏 焜 1966「河北定縣塔基舍利函中波斯薩珊朝銀幣」『考古』第5期
河北省文化局文物工作隊 1966「河北定縣出土北魏石函」『考古』第5期
韓國國立中央博物館編 1989『韓國國立中央博物館所藏 中央アジアの美術』、學生社
甘肅省文物考古研究所編 1987『河西石窟』文物出版社
甘肅省文物工作隊・炳靈寺文物保管所編 1986『中國石窟 炳靈寺石窟』、平凡社
韓 生存・曹 承明・胡 平 1996「大同南郊金屬鑄廠北魏墓群」『北朝研究』第1期
魏 存成 2002『高句麗遺迹』20世紀中國文物考古發現與研究叢書、文物出版社
裘 善元 1926「信陽漢冢發掘記」『國立歷史博物館叢刊』第1年第2冊
熊谷 宣夫 1953「東トルキスタンと大谷探検隊」『佛教藝術』第19號

- 熊谷 宣夫 1962「西域の美術」『中央アジア佛教美術』西域文化研究第5，法藏館
- 桑山 正進 1977「サーサーン冠飾の北魏流入」『オリエント』Vol. XX, No. 1
- 小林 知生 1939 a「大同北方方山に於ける北魏時代の遺蹟」『考古學雜誌』第29卷第8號
- 小林 知生 1939 b「東亞考古學會北魏平城址調查概報」『考古學雜誌』第29卷第10號
- 胡 平・解 廷琦・焦 強 2004「大同思遠佛寺遺址考古發掘成果斐然」『中國文物報』10月1日
- 駒井 和愛 1952『東亞考古學』，弘文堂
- 駒井 和愛 1959「社會と思想」『世界考古學大系7 東アジアⅢ』，平凡社
- 崔 躋 1980「石子灣北魏古城的方位、文化遺存及其他」『文物』第8期
- 山西省考古研究所・大同市考古研究所 2001「大同市北魏宋紹祖墓發掘簡報」『文物』第7期
- 山西省考古研究所・大同市考古研究所・大同市博物館・山西大學考古系 2005「大同操場城北魏建築遺址發掘報告」『考古學報』第4期
- 山西省大同市考古研究所 2004「大同湖東北魏一號墓」『文物』第12期
- 山西省大同市博物館・山西省文物工作委員會 1972「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』第3期
- 宿 白 1956「大金西京武州山重修大石窟寺碑」校注一新發現的大同雲崗石窟寺歷史材料的初步整理」『北京大學學報（人文科學）』第1期
- 宿 白 1977「盛樂、平城一帶的拓跋鮮卑～北魏遺迹一鮮卑遺迹輯錄之二」『文物』第11期
- 宿 白 1982「《大金西京武州山重修大石窟寺碑》的發現與研究」『北京大學學報』哲學社會科學版第1期
- 宿 白 1986「涼州石窟遺迹與“涼州模式”」『考古學報』第4期
- 宿 白 1989「莫高窟現存早期洞窟的年代問題」『香港中文大學中國文化研究所學報』第20卷
- 宿 白 1997「東漢魏晉南北朝佛寺布局初探」『慶祝鄧廣銘教授九十華誕論文集』，河北教育出版社
- 澄田 正一 1975「思い出の溫容」『考古學雜誌』第60卷第4號
- 石 俊貴主編 2006『托克托文物志』上下卷，中華書局
- 關野 貞 1938『支那の建築と藝術』，岩波書店
- 曾布川 寬・岡田 健編 2000『世界美術大全集』東洋編第3卷，小學館
- 大同市考古研究所 2006「山西大同沙嶺北魏壁畫墓發掘簡報」『文物』第10期
- 大同市博物館・山西省文物工作委員會 1978「大同方山北魏永固陵」『文物』第7期
- 田村 晃一 2001『樂浪和高句麗の考古學』，同成社
- 中國社會科學院考古研究所 1996『北魏洛陽永寧寺 1979～1994年考古發掘報告』，中國大百科全書出版社
- 張 慶捷 2003「北魏永固陵的考察與探討」『古代文明研究通訊』第19期
- 陳 永志主編 2003『內蒙古出土瓦當』，文物出版社
- 天水麥積山石窟藝術研究所 1987『中國石窟 麥積山石窟』，平凡社
- 東京大學 1952『考古圖編 文學部考古學研究室蒐集品』第12輯，東京大學
- 東京大學 1960『考古圖編 文學部考古學研究室蒐集品』第18輯，東京大學
- 董 高 1991「朝陽北塔“思燕佛圖”基址考」『遼海文物學刊』第2期
- 董 高 1996「朝陽北塔發掘獲重大成果」『中國文物報』1月21日
- 敦煌研究院・甘肅省博物館 2000『武威天梯山石窟』，文物出版社
- 內蒙古文物工作隊・包頭市文物管理所 1984「內蒙古白靈淖城團圍北魏古城遺址調查與試掘」『考古』第2期
- 永島 暉臣慎 1981「高句麗の都城と建築」『難波宮址の研究』第7論考篇，大阪市文化財協會
- 長廣 敏雄 1969『六朝時代美術の研究』，美術出版社

東方學報

- 長廣 敏雄 1980 「宿白氏の雲岡石窟分期論を駁す」『東方學』第 60 輯
- 長廣 敏雄 1988 『雲岡日記 大戦中の佛教石窟調査』, NHK ブックス 544
- 原田 淑人 1939 「大同附近遺蹟調査概報」アジア歴史資料センター Ref. B 05015885100
- 水野 清一 1939 a 「方山永固陵と萬年堂」『東洋史研究』第 4 卷第 4・5 號
- 水野 清一 1939 b 『雲岡の石窟とその時代』, 富山房
- 水野 清一・長廣 敏雄 1951～1956 『雲岡石窟』, 京都大學人文科學研究所
- 水野 清一・長廣 敏雄 1956 「大同近傍調査記」『雲岡石窟』第 16 卷, 京都大學人文科學研究所
- 向井 佑介 2004 「中國北朝における瓦生産の展開」『史林』第 87 卷第 5 號
- 村元 健一 2000 「北魏永固陵の造營」『古代文化』第 52 卷第 2 號
- 八木 春生 1991 「雲岡石窟に見られる『籐座式柱頭』についての一考察」『佛教藝術』第 197 號
- 八木 春生 2000 a 『雲岡石窟紋様論』, 法藏館
- 八木 春生 2000 b 「南北朝時代における陶俑」『世界美術大全集』東洋編第 3 卷, 小學館
- 八木 春生 2004 『中國佛教藝術と漢民族化』, 法藏館
- 八木 春生 2006 「書評 岡村秀典編『雲岡石窟』遺物篇」『史林』第 89 卷第 5 號
- 山崎 隆之 1998 「永寧寺塔内塑像の製作技法について」『北魏洛陽永寧寺』中國社會科學院考古研究所發掘報告, 奈良國立文化財研究所
- 楊 泓 1985 (來村多加史譯) 『中國古兵器論叢』, 關西大學出版部
- 楊 伯達 1985 (松原三郎譯) 『埋もれた中國石佛の研究—河北省曲陽出土の白玉像と編年銘文—』, 東京美術
- 吉開 將人 2006 「東亞考古學と近代中國」『岩波講座「帝國」日本の學知』第 3 卷, 岩波書店
- 吉村 日出東 1999 「東京帝國大學考古學講座の開設—國家政策と學問研究の視座から」『日本歴史』第 608 號
- 吉村 恰 1960 「雲岡における蓮華化生の表現」『美術史』第 37 號
- 李 新全 1996 「三燕瓦當考」『遼海文物學刊』第 1 期
- 遼寧省文物考古研究所編 2002 『三燕文物精粹』, 遼寧人民出版社
- 臨朐縣博物館 2002 『北齊崔芬壁畫墓』, 文物出版社
- Bishop, Carl Whiting 1925 *Archaeological Expedition to China, Explorations and Field-work of the Smithsonian Institution in 1924, Smithsonian Miscellaneous Collections, Vol. 77, No. 2, pp. 67-75*
- Dien, Albert E. 1981 *A Study of Early Chinese Armor, Artibus Asiae, Vol. 43*
- Hennessey, Collen compiled 1999 *Register to the Papers of Carl Whiting Bishop in the Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery Archives*, Smithsonian Institution, Washington, D. C.
- Stein, M. Aurel 1907 *Ancient Khotan*, Oxford
- Wenley, Archibald Gibson 1947 *The Grand Empress Dowager Wên Ming and the Northern Wei Necropolis at Fang Shan*, Freer Gallery of Art, Occasional Papers, No. 1



1 方山永固陵全景（南東から、1939年京大人文研写真）



2 文明太后墓の墳丘（東から、1939年京大人文研写真）

圖版 2



1 白佛臺遺址（南東から，1939年京大人文研寫眞）

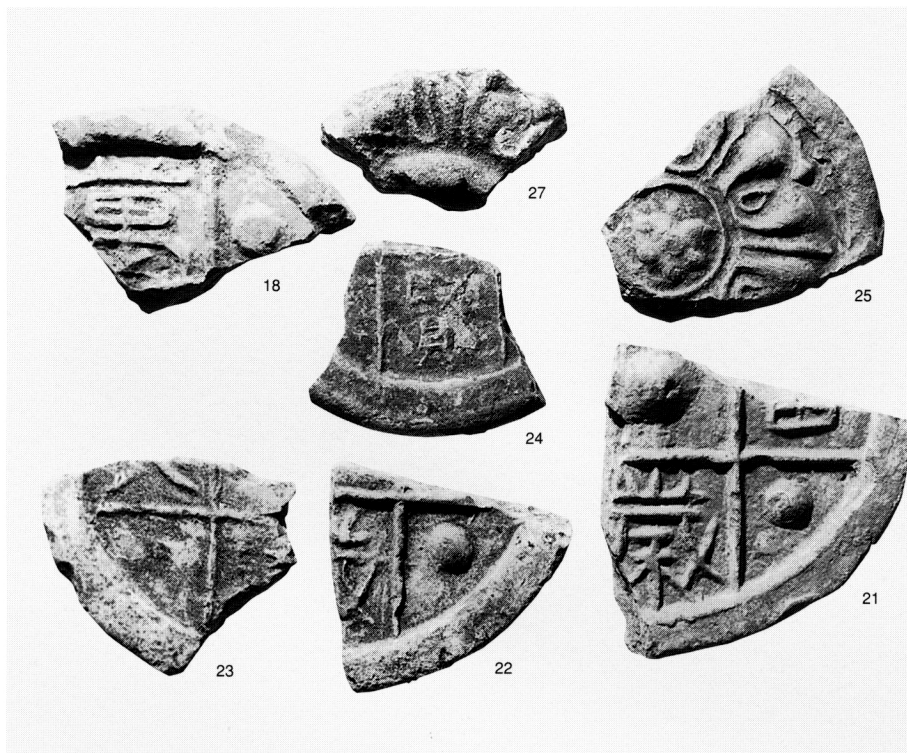


2 草堂山遺址（北から，1939年京大人文研寫眞）

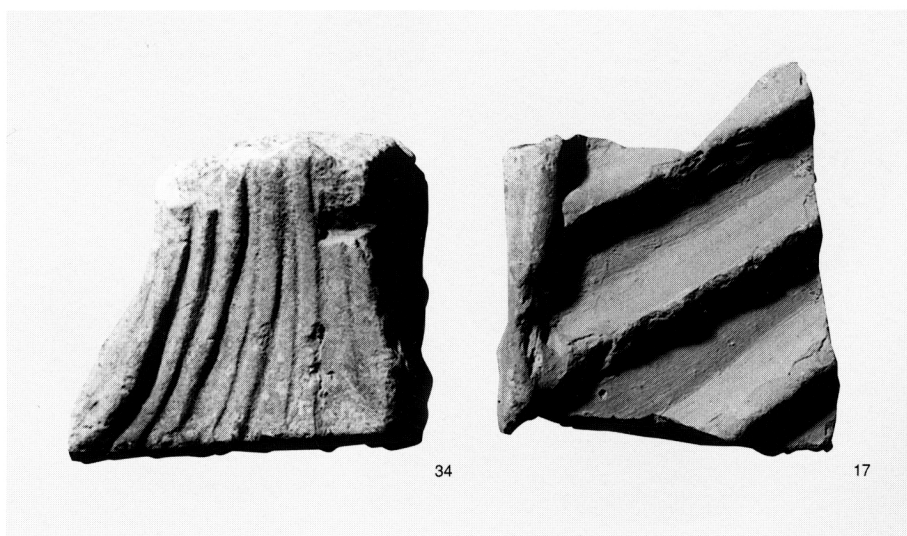


白佛臺遺址の瓦當

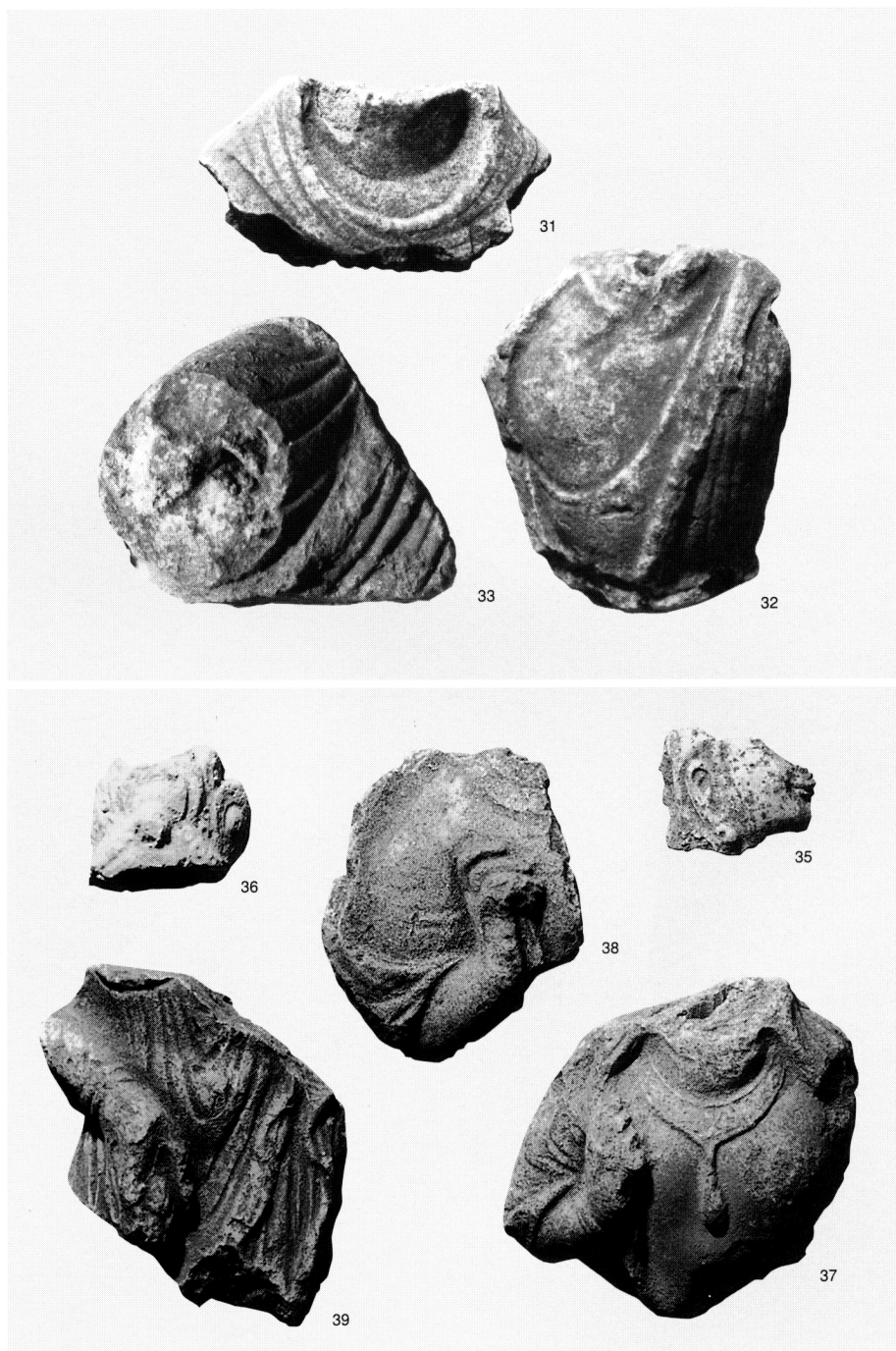
圖版4



1 草堂山遺址の瓦類



2 白佛臺遺址の塑像と鴟尾



白佛臺遺址の塑像

圖版6



白佛臺・草堂山遺址の石彫

A Study of the Northern Wei Mausolea at Fangshan 方山
— Report on Archaeological Investigation of the Artifacts Collected
by the Mission of the Far Eastern Archaeological Society
東亞考古學會 in 1939 —

Edited by Hidenori OKAMURA and Yusuke MUKAI

The mausolea of the Northern Wei dynasty standing on a flat summit named Mount Fangshan, located 20 kilometers to the north of Datong 大同 in Shanxi 山西 province in China, are identified as those of the Grand Empress Dowager Wenming 文明太后 and the Emperor Xiaowen 孝文帝. The Yonggu 永固 Mausoleum at Fangshan was constructed in 481–484, and the Siyuan 思遠 Monastery had been built before 479. The Mission of the Far Eastern Archaeological Society surveyed these sites in 1939, and collected the artifacts such as tiles, plaster and stone figures that had been kept in Tokyo University in a virtually unsorted state. Following the observation of artifacts collected from the Yungang 雲岡 Caves and neighboring sites including the Mausolea at Fangshan that had been kept in the Institute for Research in Humanities, Kyoto University, we set about researching on them, and as a result we obtained much new and important information about the mausolea complex and the art styles then existing.

The antefixa with the inscription “Wansui Fugui 萬歲富貴” unearthed from the south of the upper plateau came from the same mould as those found at the Buddhist pagoda site on the lower plateau, and both belong to the first stage of the Siyuan Monastery. This would suggest that the Monastery extended across both the upper and lower plateaus.

The art styles of the antefixa with a lotus motif showing the upper part of the body of reborn child, the massive plaster figures and circular palmettes with intertwining arabesque patterns carved in stone that were found at Fangshan reveal characteristics that are slightly newer than the style of Yungang Caves VII–VIII, and they bear a closer resemblance to Caves IX–X. This means that Caves IX–X may be dated to the latter part of the 480 s, slightly after the construction of the Yonggu Mausoleum at Fangshan, as we maintained in *YUN-GANG, Artifacts* (2006).